

「大学入試をめぐる危機対応の体制構築に向けてーCOVID-19の災厄を越えてー」

シンポジウム

大学入試における 危機対応

わざわい と わざわい
災いと禍を乗り越える

報告書



令和5(2023)年3月

独立行政法人 大学入試センター 研究開発部

見逃し配信のご案内

シンポジウムの動画を YouTube でご覧いただけます。ご関心がおありの方や、もう一度ご覧になりたい方は、下記の URL または QR コードからご視聴ください。

プレイバック座談会

「大学入試におけるコロナ対策：令和 3 年度入試の舞台裏」

開催日時：

2021 年（令和 3 年）12 月 19 日（日）13 時～15 時 30 分

URL：

<https://www.youtube.com/watch?v=ckCFj4S9cXI>



プレイバック座談会 Part 2

「大学入試における危機対応：災いと禍を乗り越える」

開催日時：

2022 年（令和 4 年）11 月 27 日（日）13 時～15 時 30 分

URL：

https://www.youtube.com/watch?v=0MG_88aXQfA



※ 動画中の内容は、座談会開催当時の状況に基づくものですので、あらかじめご了承ください。

はじめに

大学入試センター・研究開発部 内田照久

この報告書は、令和4(2022)年11月27日に実施されたシンポジウム『[プレイバック座談会 Part 2] 大学入試における危機対応：一災いと禍を乗り越える一』の講演内容と資料をまとめたものです。

令和2(2020)年以来、世界的なCOVID-19の感染拡大は、私たちの暮らしの形を大きく変えました。そして、わが国の「大学」の教育研究、そして「入試のあり方」まで、今なお、大きく揺さぶり続けています。

コロナ禍の初年度、令和3年度入試の個別学力試験では、個々の大学は、受験生を守りながら入学者の選抜を行うという、難題に苦しみながら、入試にあたってきました。そこでは、早くから2次試験の中止を決めた大学、試験時間の短縮、内容の変更を行った大学など、様々な対応が取られました。奇しくも、個々の大学の裁量・決断に委ねられているものが、いかに大きいかを目のあたりにすることになりました。

そして令和4年度の入試は、オミクロン株による、さらに大きな第6波の感染拡大の中で行われました。しかし、大学は「前年度の経験に裏打ちされた自信」を内に秘めて、より強靱な体制で、入試の確実な実施を目指しました。ところが、4年度入試では、コロナ禍に留まらない事案が立て続けに発生しました。

1. 第6波の感染拡大の中で、濃厚接触志願者への対応方法が年末になってから二転三転しました。
2. また、もし共通テストが受験できなくても、個別試験で、別途、選抜をするように、との通達が、唐突に発出されました。
3. そして、共通テストの初日、東京大学の前で男子高校生による刺傷事件が発生します。
4. そのすぐ翌日、トンガの海底火山の噴火による津波で、一部の地域には緊急避難指示が出されました。
5. さらにそののちに、試験時間中に試験問題を、スマートフォンや小型の電子機器で撮影して、外部に送信するといった不正行為が発覚します。

しかし、大学は、この不測の事態にも向き合いながら、入試を完遂してきました。

このシンポジウムでは、コロナ禍をはじめ、大学入試を揺さぶった個々の事案について、その経緯と大学での対応を、順を追って振り返りました。そして、それぞれの大学が、それぞれに置かれた環境・条件の中で、何を最も大切だと考えて決断をしたのか、大学入試の中で、守るべきものは何なのかを、見つめ直しました。そして、そこで考え抜いたことがまだ見ぬ危機への対応のための、体制の構築に向けた手がかりになればと考えたところです。

次に、今回のシンポジウムに至る経緯です。近年、大学入試センターの研究開発部には、センターの外部の研究者と連携して、個別大学の入試をサポートするための 情報交流の場を作る、プラットフォームを構築するという、ミッションが加わりました。

その矢先に、コロナ禍が訪れます。そこで、2020 年の 6 月、研究開発部は、『新型コロナウイルス禍における大学入試の在り方を考える』というテーマの「緊急オンライン・フォーラム」を企画しました。そこには、5 つの大学のアドミッションに携わる先生方が、参加されました。ただ、各大学の検討段階での試案などが、一人歩きするようなことがあると、社会的な混乱も予想されるということで、議論のやりとりは、まずは非公開で進められました。しかし、翌年にはその情報交流の中で生まれた知恵を精選し、積極的に発信します。それが、令和 3 年 12 月に行った、1 回目のシンポジウム、「大学入試におけるコロナ対策：—令和 3 年度入試の舞台裏」です。

ところが その年が明けての令和 4 年度入試では、大学入試を揺さぶる事案が頻発します。その状況を受けて、「危機対応のオンライン・フォーラム」を 6 つの大学で再組織しました。このシンポジウムでは、そのフォーラムでの議論を、まさにそのメンバーが報告しています。登壇メンバーは次の通りです。

東北大学・高度教養教育・学生支援機構 倉元直樹 先生
名古屋大学大学院・教育発達科学研究科 石井秀宗 先生
名古屋工業大学大学院・工学研究科 林 篤裕 先生
愛媛大学・四国地区国立大学連合アドミッションセンター 中村裕行 先生
九州大学・アドミッションセンター 立脇洋介 先生
佐賀大学 アドミッションセンター 西郡 大 先生

このメンバーは、現在、大学入試センター理事長裁量経費による調査研究プロジェクト(通称：大学入試の危機対応)¹に参画しています。

さらにこのシンポジウムでは、大学入試センターと個別大学のタイアップにも挑戦しています。プログラムの内容・構成は、主催の大学入試センターの研究プロジェクトが担当し、映像技術・配信は、共催の東北大学の科研プロジェクト(通称：入試科研 2)²が担当しました。東北大学の宮本友弘先生の指揮の下、久保沙織先生、南紅玉先生、事務局の竹浪綾子さんによる科研チームが実施を支えて下さいました。そして、全体の司会進行は、大学入試センター研究開発部の寺尾尚大先生が担当しました。

このシンポジウムは、2022 年晩秋、コロナの第 8 波の足音が忍び寄ってくる中で行われました。このシンポジウムの記録が、大学の入試を担う方々にとって、COVID-19 の禍に留まらず、さらなる災い、まだ見ぬ危機に立ち向かう体制構築を考えるための一助にならないことを願っています。

- ¹ 令和3(2021)～4(2022)年度 大学入試センター 理事長裁量経費（調査研究）
「大学入試をめぐる危機対応の体制構築にむけて —COVID-19の災厄を越えて—」
（研究代表者：内田照久）」
- ² 令和3(2021)～7(2026)年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（A）
「コロナ禍の下での大学入試政策及び個別大学の入試設計のための総合的入試研究」
（課題番号 21H04409；研究代表者：倉元直樹）」

目次

見逃し配信のご案内.....	i
はじめに.....	iii

プレイバック座談会 Part2

「大学入試における危機対応：

災いと禍を乗り越える」 3

第1部 オミクロン株と大学入試.....	15
第2部 自然のもたらす災いと大学入試.....	31
第3部 人が介在する禍と大学入試.....	41
総合討論	57
ライブ Q&A セッション.....	73

大学入試センター 研究開発部 内田照久

大学入試センター 研究開発部 寺尾尚大

東北大学 高度教養教育 学生支援機構 倉元直樹

名古屋大学 大学院 教育発達科学研究科 石井秀宗

名古屋工業大学 大学院 工学研究科 林 篤裕

愛媛大学 四国地区国立大学連合アドミッションセンター 中村裕行

九州大学 アドミッションセンター 立脇洋介

佐賀大学 アドミッションセンター 西郡 大

資料編	81
シンポジウムのアンケート結果と実施運営のバックヤード	83
大学入試センター 研究開発部 寺尾尚大	
大学入試センター 研究開発部 内田照久	
東北大学 高度教養教育 学生支援機構 宮本友弘	
東北大学 高度教養教育 学生支援機構 久保沙織	
プレイバック座談会 Part2 進行表	97
大学入試センター 研究開発部 寺尾尚大	
関連資料	115

プレイバック座談会Part2
大学入試における危機対応
災いと禍を乗り越える

独立行政法人 大学入試センター 研究開発部

寺尾：

視聴者の皆様、こんにちは。定刻となりましたので、「プレイバック座談会Part2 大学入試における危機対応 災いと禍を乗り越える」を始めたいと思います。

本日の司会を務めさせていただきます、大学入試センター研究開発部の寺尾です。よろしくお願いいたします。

本日はご多用の中、ご視聴いただきどうもありがとうございます。昨年12月19日に開催した「プレイバック座談会 大学入試におけるコロナ対策 令和3年度入試の舞台裏」に続く第2弾となります。

初めに、大学入試センター研究開発部の内田より趣旨説明をさせていただきます。内田先生、よろしくお願いいたします。

内田：

大学入試センター研究開発部の内田です。本日は「大学入試における危機対応 災いと禍を乗り越える」のシンポジウムにご参集いただき、ありがとうございます。

さて、一昨年来のCOVID-19の感染拡大は私たちの暮らしの形を大きく変えました。そして、我が国の大学の教育、研究、そして入試の在り方まで、今なお大きく揺さぶり続けています。

コロナ禍初年度の昨年、令和3年度入試の個別学力試験では、個々の大学は受験生を守りながら入学者の選抜を行うという難題に苦しみながら入試に当たってきました。そこでは早くから2次試験の中止を決めた大学、試験時間の短縮、内容の変更を行った大学など様々な対応が取られました。奇しくも個々の大学の裁量、決断に委ねられているものがかに大きいかを目の当たりにすることになりました。

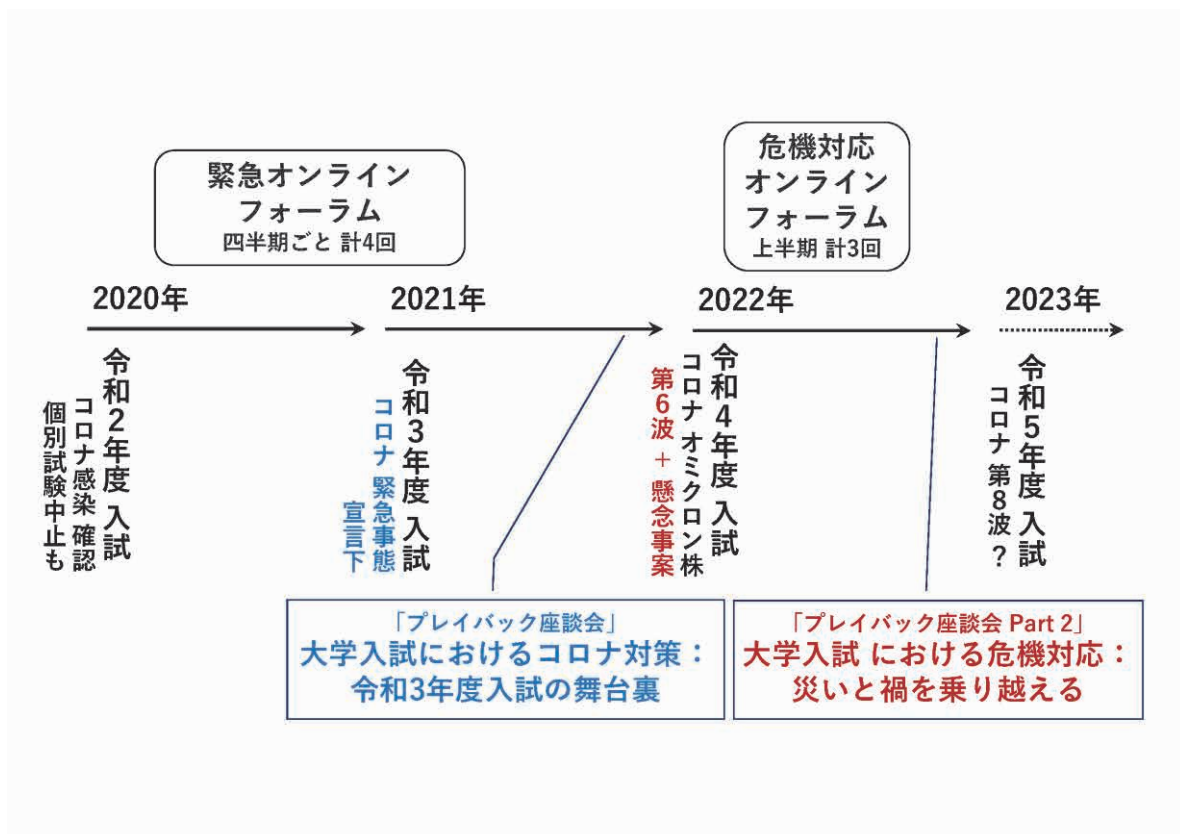
そして翌年、令和4年度の入試は、オミクロン株によるさらに大きな第6波の感染拡大の中で行われました。しかし、大学は前年度の経験に裏打ちされた自信を内に秘めて、より強靱な体制で入試の確実な実施を目指しました。

ところが、令和4年度入試ではコロナ禍にとどまらない事案が立て続けに発生しました。まず、第6波の感染拡大の中で濃厚接触者となった志願者への対応方法が、年末になってから二転三転しました。また、もし共通テストが受験できなくても個別試験で別途選抜をするようにとの通達が唐突に発出されました。そして、共通テストの初日、東京大学の前で男子高校生による刺傷事件が発生します。その翌日、トンガの海底火山の噴火による津

波で、一部の地域には緊急避難指示が出されました。さらにその後、試験時間中に試験問題をスマートフォンや小型の電子機器で撮影して外部に送信するといった不正行為が発覚します。大学はこの不測の事態にも向き合いながら入試を完遂してきました。

このシンポジウムでは、コロナ禍をはじめ、大学入試を揺さぶった個々の事案について、その経緯と大学での対応を、順を追って振り返っていきます。それぞれの大学がそれぞれに置かれた環境、条件の中で、何を最も大切だと考えて決断をしたのか、大学入試の中で守るべきものは何なのかを見詰め直します。そして、そこで考え抜いたことが、まだ見ぬ危機への対応のための体制の構築に向けた手がかりになっていけばと願っています。

本日のシンポジウムに至る経緯です。近年、大学入試センターの研究開発部には、センターの外の研究者と連携して個別大学の入試をサポートするための情報交流の場をつくるプラットフォームを構築するというミッションが加わりました。その矢先にコロナ禍が訪れます。



そこで2020年6月、研究開発部は「新型コロナウイルス禍における大学入試の在り方を考える」というテーマの緊急オンライン・フォーラムを企画しました。そこには5つの大学のアドミッションに関わる先生方が参加されました。ただし、各大学の検討段階での試案

などが一人歩きするようなことがあると、社会的な混乱も予想されるということで、議論のやり取りはまずは非公開で進められました。

しかし、翌年にはその情報交流の中で生まれた知恵を精選して積極的に発信しました。それが昨年12月に行った1回目のシンポジウム「大学入試におけるコロナ対策 令和3年度入試の舞台裏」です。

ところが、その年が明けての令和4年度入試では、大学入試を揺さぶる事案が頻発します。その状況を受けて、危機対応のオンライン・フォーラムを6つの大学で再組織しました。本日は、そのフォーラムの議論を参加メンバーが報告します。

ご紹介します。

東北大学高度教養教育・学生支援機構、倉元直樹先生

愛媛大学・四国地区国立大学連合アドミッションセンター、中村裕行先生

名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門、石井秀宗先生

佐賀大学アドミッションセンター、西郡大先生

九州大学アドミッションセンター、立脇洋介先生

名古屋工業大学アドミッションオフィス、林篤裕先生

個別大学とのタイアップ

プログラム製作・構成：主催

令和3～4年度 大学入試センター理事長裁量経費（調査研究）

「大学入試をめぐる危機対応の体制構築に向けて
—COVID19の災厄を越えて—」

映像技術・配信：共催

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（A）課題研究21H04409

「コロナ禍の下での大学入試政策及び
個別大学の入試設計のための総合的入試研究」

このシンポジウムは個別大学とのタイアップにも挑戦しています。プログラムの内容、構成は大学入試センターの理事長裁量経費による研究プロジェクトが担当しています。そして、映像技術・配信は東北大学の科研プロジェクトが担当します。今、この瞬間も東北

大学の宮本先生の下、ご覧のスタッフが支えてくださっています。

全体の進行は大学入試センター研究開発部の寺尾尚大先生が担当します。

それでは、コロナの第8波が、その足跡と共に忍び寄ってくる中ではありますが、今回のシンポジウムが大学入試に携わる方にとって実り多いものになることを願っています。では、司会の寺尾先生にお返しします。

寺尾：

内田先生、どうもありがとうございました。

初めに本座談会の内容の位置づけについて、一言申し上げます。本座談会は、登壇者と大学入試センターの教職員に閉じて実施したオンライン・フォーラムの内容を再構成したものです。文部科学省の施策や当センターの試験実施方針に影響を持つものではなかった点、あらかじめご承知おきください。

また、本座談会は入試の実施、運営に当たる大学関係者の視点で議論を進めてまいります。コロナ、自然災害、刺傷事件や不正行為を取り扱いますが、関係者目線の議論が中心となりますので、すべての論点を網羅することができない点、あらかじめご了承ください。トピックによっては間接的にしか扱えないものもございます。こちらもどうかご理解ください。

登壇者は集合しての配信を実施しておりますが、コロナ対策を十分に行った上で配信しております。

座談会の中身に入る前に、ご視聴いただくにあたっての確認事項について説明します。

視聴者の皆様へ

• 座談会の進め方

- 司会者と登壇者の短い質疑応答のラリーを重ねます
- 登壇者個別の発表時間はございません

• ご質問・ご意見・ご感想などの投稿先

- AhaSlides (<https://audience.ahaslides.com/oib94kybsy>) で座談会中もコメントの投稿を受け付けます
- 名前を明示していただいた際の投稿、匿名での投稿が可能です
- ZoomのQ&A機能は使用しません



2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

9

1つ目は進め方についてです。本座談会は、司会者と登壇者の短い質疑応答のラリーを重ねる形で進めてまいります。

2つ目は視聴者の皆様からのご質問についてです。今年のご質問、ご感想などを随時Q&Aの形で受け付けたいと思います。こちらのAhaSlidesにアクセスいただき、登壇者へのご質問、ご感想等を投稿してください。最後の15分程度でQ&Aにお答えする時間を設けます。ご質問は匿名でもお名前を出していただいても構いません。ZoomのQ&A機能は使いません。時間の都合上、座談会の内容をさらに深めるご質問やご感想のみを優先して取り上げさせていただきますので、すべてのご質問にはお答えできないこと、あらかじめご了承ください。投稿のルールなどの詳細については事前にお配りした資料をご確認ください。

まず、昨年のプレイバック座談会のおさらいをしたいと思います。3分程度の映像にまとめましたので、こちらをご覧ください。

プレイバック座談会のハイライト

2021年12月19日（日）プレイバック座談会 大学入試におけるコロナ対策：令和3年度入試の舞台裏より

第1期

2020.4～2020.6

主な入試業務

入学者選抜実施要項（文部科学省）および
大学入学共通テスト実施要項（大学入試センター）等を
踏まえた 各大学の入学者選抜要項の検討 など

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

10

映像内

～第1期～

寺尾：

次に、各大学で重視したものという点で、名古屋大学の石井先生と東北大の倉元先生にお話をお伺いしたいと思います。

石井：

名古屋大学では、連休が明けた5月の中旬から6月にかけて、こちらを作成していました。これは何かといいますと、共通テストがなかったらどうなるのか、個別学力試験がなかったらどうなるのかなど、どうなっているのかと言っているもしょうがないわけです。共通テストや個別学力試験がもしあったら、もしくは部分的にでも実施されたら、または共通テストがなかったらなどのような形で場合分けをして、大学としてどのような対応が可能か、フローチャートで全部作っていきました。

倉元：

実際、我々も入試に携わっているわけですが、学内に意識を割く余裕がなかったというのが正直なところでした。むしろ外に向けて受験生にこういった形で大学の情報をお

伝えし、安心して受けていただける準備をするのかということを整えていたというようなところになるでしょうか。

～第4期～

林：

入構する段階で本人に熱がありそうだということになってきますと、大学としては別室をつくっていくということになります。それに備えて、予備監督者もリストアップはしていたわけですが、発熱とか体調がちょっとという申し出に対して、それぞれ対応をさせていただいた結果、予備試験監督者が枯渇をいたしました。私は比較的後ろのほうにどうか、本来は出ていってはいけないリストの中にある順位なのですが、これは行かざるを得ないということになって、私も1コマだけありますが、試験監督をさせていただきました。

西郡：

私の所属している佐賀大学はオンライン・フォーラムというものには入っていません。ですので、この会の司会をしてくれという話を聞いたとき、そんなことやっていたのですねと、羨ましいなというのが率直な感想です。もちろん佐賀大学でも個々につながりのある大学さんと確認をしながらいろいろと検討を進めていったわけですが、こうした新型コロナにおける緊急時の情報交換、大学同士の情報交換というのがいかに重要なのかということに改めて思い知りました。

プレイバック座談会Part2の進め方

座談会 (13:00～14:35目安)

第1部 オミクロン株と大学入試

第2部 自然のもたらす災いと大学入試

第3部 人が介在する禍と大学入試

----- 休憩(5分) -----

総合討論 (14:40～15:15)

ライブQ&Aへの回答 (15:15～15:30)

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

11

寺尾：

なお、今年度から西郡先生にもメンバーに入らせていただいております。

座談会後のアンケートでは、「様々な対応事例の情報共有は非常に重要である」とか、「他大学のリアルな情報はなかなか聞くことができない」などのご意見などもいただきました。試験実施に関する情報共有の重要性を改めて認識した次第です。

また、「コロナ禍を通じて入試制度そのものが抱える課題も顕在化した」でありますとか、「ここからさらに議論が進むことを期待する」など、本座談会の今後の展開を求めのお声も頂戴したところであります。

プレイバック座談会Part2の進め方は、ご覧いただいているとおりです。今回のテーマは「危機対応」であります。前回に続いてコロナを取り上げつつ、自然災害や刺傷事件、不正行為など令和4年度入試に降りかかった困難をプレイバックし、大学入試の危機対応の在り方を考えていきたいと思っております。

オミクロン株の流行前まで、新型コロナウイルスの対策の2周目を着実に行えば、コロナ禍の中でもできるだけ混乱のない入試を取り戻せるものと信じておりました。そこへ、11月中旬からオミクロン株の不穏な足音が近づいてきます。第1部は「オミクロン株と大学入試」と題して、ギリギリまで粘り強い調整を続けた大学入試関係者のリアルをお伝えします。

第2部は「自然のもたらす災いと大学入試」と題して、当日に起こったトンガの海底火山の噴火をきっかけに、自然災害に見舞われたときの大学入試の危機対応を考えます。実際、海底火山だけでなく、地震や雪害は今までも入試の実施基盤を揺るがしてきました。人間が自然災害の前に無力であることは前提としつつ、自然災害が入試を襲った場合の対応や考え方についてお話を伺います。

第3部は「人が介在する禍と大学入試」と題して、東大前の刺傷事件と不正行為を取り上げます。どちらも人が努力の結果を発揮しようと頑張る場を壊してしまおうとする事件でした。こうした危機に大学入試がどのように立ち向かっていくか、先生方にお話を伺いたいと思います。

第1部から第3部は個別の危機について理解を深める時間と位置づけます。休憩を挟んだ後、総合討論の時間では、それぞれの危機をもう少し大局的に眺め、危機対応の共通点やそれぞれの危機の独自な点を探りたいと思います。

第 1 部

オミクロン株と大学入試



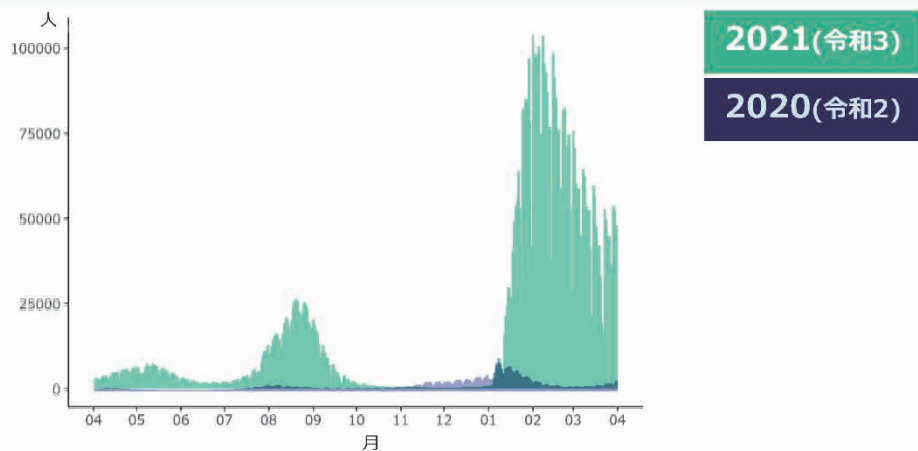
オミクロン株と大学入試

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

12

新規陽性者数の推移 (全国)



2022/11/27

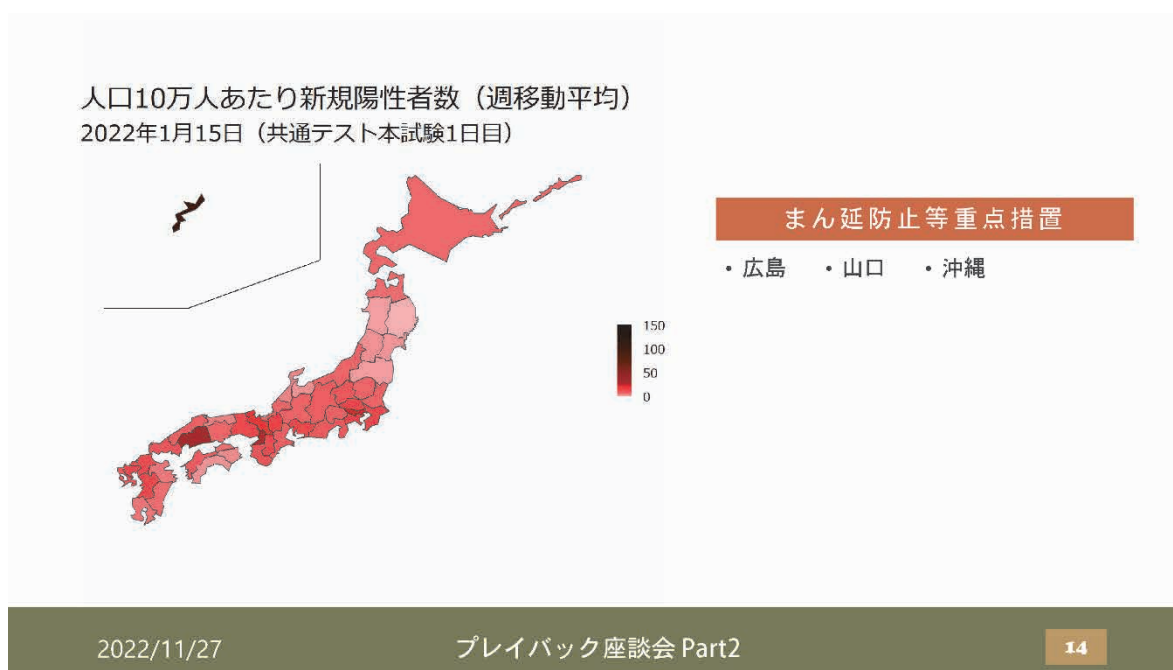
プレイバック座談会 Part2

13

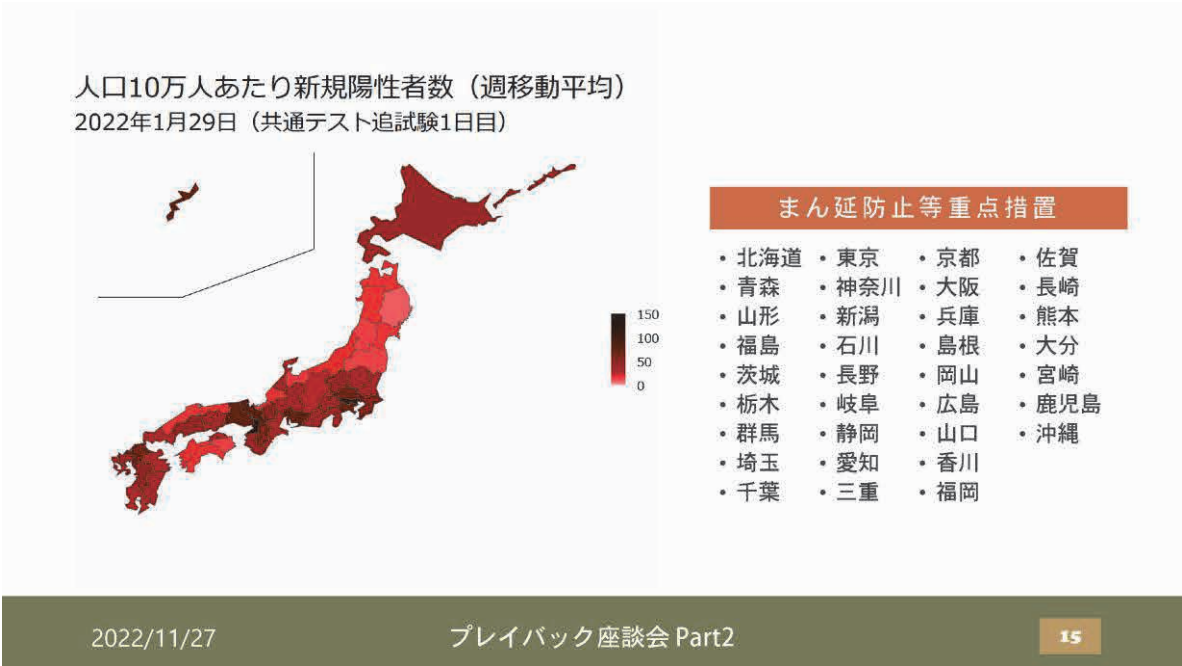
寺尾：

それでは、第1部「オミクロン株と大学入試」に入っていきたいと思います。

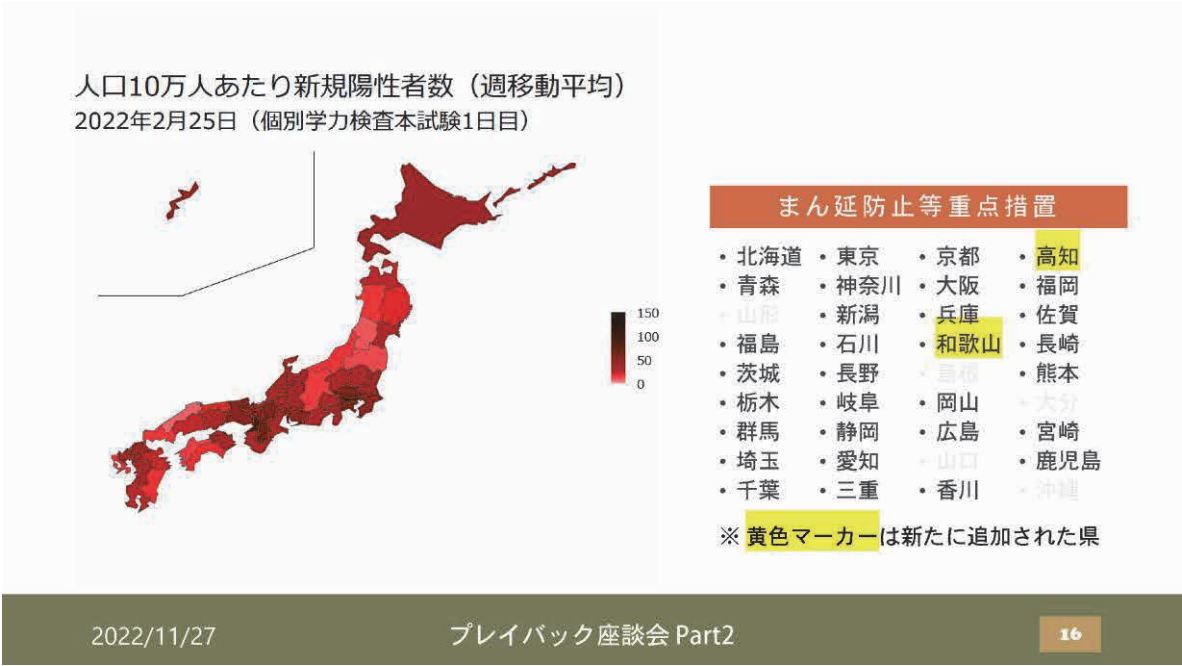
まずは、前回にならって、新規陽性者数の分布を見てみたいと思います。紺色でお示したのが2020年度の新規陽性者数、緑色でお示したのが2021年の新規陽性者数です。デルタ株の新規陽性者数と比べると、令和4年度入試における新規陽性者数は本当の意味で桁違いです。総合型選抜、学校推薦型選抜のシーズンとなる10月、11月に感染が下火となっていたのは不幸中の幸いでした。オミクロン株の厄介なところは、感染したときの症状の重さではなく感染力の高さでした。大多数は軽症で済むと考えられていましたが、オミクロン株の影響範囲をどこまで考えるかということが政策決定者を悩ませ、関係者を混乱させることとなりました。



都道府県ごとの人口10万人あたり新規陽性者数も日本地図で確認したいと思います。こちらが2020年の共通テスト本試験1日目の状況です。オミクロン株が米軍基地を中心に流行し始めたことを反映して、広島、山口、沖縄にまん延防止等重点措置が出されていました。

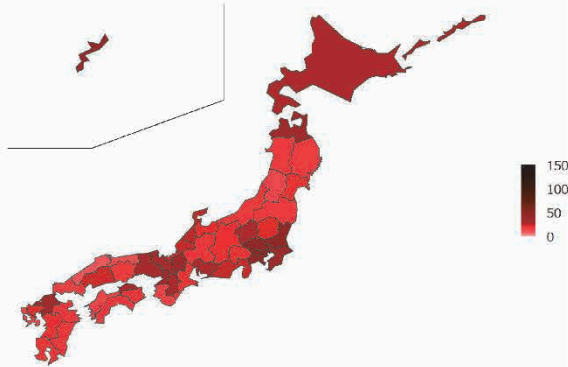


2週間後、追試験1日目です。まん延防止等重点措置はほぼ全国に拡大され、大都市圏は赤色を乗り越えて真っ黒となっています。



1か月弱が経過して個別学力検査本試験の1日目ですが、状況はそれほど変わっていないようです。

人口10万人あたり新規陽性者数（週移動平均）
2022年3月22日（個別学力検査追試験）



まん延防止等重点措置

・ 3月21日をもって解除

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

17

さらに1か月経過した3月22日は、個別学力検査の追試験の日でした。まん延防止等重点措置は解除されたものの、依然として日本地図は赤のままでした。

水際対策と外国人留学生入試

・ 令和3年11月18日

「大学入試の受験を目的とする外国人入学志願者の入国について（依頼）」（3高大振第22号）

今般、…（中略）…、「水際対策強化に係る新たな措置（19）」のとおり、外国人の新規入国制限が見直され、商用目的又は就労目的による短期滞在（3月以下）の新規入国について、受入責任者から業所管省庁へ提出した誓約書等を含む申請様式が事前に業所管省庁の審査を受けたことを条件に、入国が認められることになったことから、今後の外国人入学志願者が出願可能な個別入試の扱いについては、下記のとおりとしますので、受験機会の確保に遺漏のないよう、よろしく申し上げます。

- ・ 外国人出願者の受入責任者＝出願先の大学
- ・ センターは、共通テストの出願者のうち海外在住外国人の者に出願予定の大学を確認し、該当の大学に11月22日までに通知。大学は渡航の要否を決定し、センターに11月30日までに回答。
- ・ 大学は、試験において外国人留学生の新規入国を求める場合、大学入試室宛てに申請書類を提出。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

18

新規陽性者数の推移だけを見ても、令和4年度入試のコロナ対策を振り返るには十分ではありません。今度は文部科学省や国立大学協会から各大学のもとに届いた通知を振り返りながら、オミクロン株の対応の難しかった点を確認します。

オミクロン株の流行が最初に直撃したのは、外国人入学志願者に関わる選抜区分でした。

11月18日の依頼では、定められた条件を満たせば、外国人入学志願者の入国が認められることになっていました。出願先の大学を受入責任者とし、共通テストを受ける海外在住の外国人志願者に対しては、センターがどこに出願するか確認の上、その大学に通知すること、大学は渡航の要否を判断してセンターに回答すること等が主なポイントでした。

この時点では出願先の大学が渡航を認めた場合、外国人志願者は来日して試験を受けることが可能でした。

水際対策と外国人留学生入試

- 令和3年11月30日
「オミクロン株に対する水際措置の強化に伴う大学入試の受験を目的とする外国人入学志願者の入国について（通知）」（3高大振第25号）

今般、南アフリカ等で確認された新たな変異株であるオミクロン株（B.1.1.529系統の変異株）への対応として、「水際対策強化に係る新たな措置（20）」…（中略）…のとおり、…（中略）…、11月30日以降、本年12月31日までの間、全ての国・地域からの外国人の新規入国を停止することとなりました。

これにより、…外国人の新規入国に係る、受入責任者から業所管省庁への申請の受付及び当該業所管官庁の帰国・入国前の事前の審査を、本年12月31日までの間停止し、業所管省庁から受入責任者に対する新たな審査済証の交付を行わないこととなりました。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

19

試験実施ガイドラインの改訂

- 令和3年12月24日
「令和4年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドラインの一部改訂について（通知）」（3文科高第1123号）

以下のいずれの要件も満たし、本ガイドラインで示す感染症対策が講じられている場合には、…、各大学の事情等を勘案の上、無症状の濃厚接触者の受験を認めることができること。当日受験させないこととする場合は、追試験による対応等を提示すること。

ii) B.1.1.529系統（オミクロン株）への感染が確定した患者等の濃厚接触者として、宿泊施設への滞在が求められている者ではないこと

v) 終日、別室で受験すること

オミクロン株の濃厚接触者として、宿泊施設への滞在が求められている場合は、別室受験の要件を満たさない→追試験での受験

https://www.mext.go.jp/content/211228_mxt_daigakuc02_000005144-2.pdf

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

20

その後、オミクロン株の急速な感染拡大により水際対策を強化することとなりました。11月30日の通知では、すべての国と地域からの新規入国を停止することになりました。渡航の上での試験を計画していた各大学は、急ハンドルを切ることになります。

社会的に大きな話題となったのが濃厚接触者への対応でした。12月24日の通知では宿泊施設への滞在が認められているオミクロン株の濃厚接触者に対して、別室での受験を認めないという対応になりました。この対応が世論からの反発を招き、27日、岸田首相が会見を行い、オミクロン株の感染者の濃厚接触者についてもできるだけ受験機会を確保するよう文部科学省に指示したと表明しました。これを受け、翌28日には濃厚接触者の別室受験を認める対応に変更になりました。

受験機会の更なる確保について

・令和4年1月11日

「令和4年度大学入学者選抜における受験機会の更なる確保について（依頼）」（3文科高第1161号）

…各大学におかれては、受験生それぞれが置かれ得る状況に応じ、一人の受験生も入学者を志願する大学の入学者選抜の受験機会を失うことのないよう、下記について、予め検討を進め、必要が生じた場合には、対象となる受験生の状況に応じつつ、更なる受験機会の確保のための措置を迅速に講じていただくよう特段のご配慮をお願いします。

- (1) 共通テスト本試験・追試験ともに受験できなかった場合、個別学力検査、調査書等で合否判定を実施する
- (2) 個別学力検査の本試験・追試験ともに受験できなかった場合、共通テスト、調査書等で合否判定を実施する
- (3) 共通テスト・個別学力検査が本試験・追試験ともに受験できなかった場合は、当該受験者のための追試験を別途設けるか、本人の提出書類に基づく選抜を実施する + 相談窓口

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

22

ここで着地すればよかったのですが、年が明けて1月11日、「受験機会の更なる確保について」という依頼文が出されました。この内容を簡潔に申し上げるならば、共通テストや個別学力検査において、本試験と追試験のどちらも受験することができなかった者については、利用可能な選抜資料のみで合否判定を行うというものでした。この発出文書が出たからには、各大学で対応を考えなければならなくなりました。共通テスト本試験の4日前のことです。

国立大学協会は翌12日、大変バランスの取れた文書を国立大学長宛てに送付しました。前日の依頼文の対応は各大学の経験と事情等に基づき、各大学の判断に委ねられるものであること、この対応については緊急かつ特殊なもので、今年度限りであるということを通

知しました。国立大学協会は各大学に可能な範囲での対応を求め、政策決定者の対応変更の落としどころを示した形になりました。

国大協からの通知

・令和4年1月12日

「令和4年度大学入学者選抜における受験機会の更なる確保について」（国大協企画第73号）

これについて、文部科学省より、令和4年1月11日付3文科高1161号（以下、依頼文）で従来の追試験等の対応に加え、受験機会の確保に更なる配慮を行うよう依頼がなされました。この依頼文の内容については、文部科学省に対し以下の点について確認をいたしました。

1. 依頼文への対応については、各大学の経験と事情等に基づき、各大学の判断に委ねられるものであること。
2. 依頼文の内容については、新型コロナウイルス感染症およびオミクロン株の感染拡大に伴う緊急かつ特殊な対応で、今年度限りであること。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

23

第1部で取り上げる話題

・オミクロン前

- ・令和4年度入試における総合型選抜・学校推薦型選抜

・オミクロン後

- ・私費外国人留学生入試（オミクロン株水際対策）
- ・共通テスト・個別学力検査における濃厚接触者対応・追試験対応
- ・共通テストなしの個別学力検査による選抜・共通テストのみの選抜

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

24

第1部ではオミクロン前、オミクロン後に分けてお話を伺いたと思います。

まず、愛媛大学の中村先生にお伺いしたいと思います。前回もお話くださったとおり、愛媛大学は総合型、学校推薦型選抜の日程が他大学に比べて早いというのが特徴だと思うのですが、令和4年度入試は予定どおり当日を迎えることができたのでしょうか。

中村：

愛媛大学で最も早い選抜というのが社会共創学部の総合型選抜で、例年10月中旬、今年10月23・24日に実施し、昨年度実施分から少し後ろにずらして実施しました。まず、社会共創学部の総合型選抜は大学入学共通テストを課さない選抜で、例年、総合問題、面接、グループディスカッション、出願書類で選抜を行います。コロナ禍の初めての年である令和3年度入試（1年前）の段階では、7月上旬に募集要項を発表するという一方で、それに向けた検討を行う段階では、まだ他大学がどうするのかという検討状況が全く分からない状況でした。グループディスカッションや面接の実施方法について検討した上で、さらに文部科学省からのガイドラインなどを踏まえた上で募集要項を発表しましたが、結果的には変更なく実施できました。令和4年度入試でも令和3年度と同様に、変更なく実施ができました。

もう一つ、令和3年度入試で実際に変更を行ったのは、医学部看護学科の学校推薦型選抜でした。こちらは大学入学共通テストを課す学校推薦型選抜で、小論文、面接、グループディスカッション、出願書類で選抜しますが、募集要項発表段階で新型コロナウイルス感染症拡大防止のためにグループディスカッションを取りやめました。昨年度の令和4年度入試では、すべての学校推薦型選抜で当初の予定どおり実施をしました。なお、令和3年度入試で変更した医学部看護学科は選抜要項発表段階からグループディスカッションを実施しない旨周知していたので、特に変更はなかったという状況になっております。

寺尾：

ありがとうございます。

同じ質問を九州大学の立脇先生にもお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

立脇：

本学では総合型、学校推薦型として36の選抜を行っていますが、コロナの初年度である令和3年度の入試の場合、19の選抜でオンライン試験などの変更を行いました。ところが、令和4年度の入学者選抜では、36のうち4の入試区分で変更が行われたのみでした。これほど変化したのは、以下の2つの原因が関わっています。

一点目は、初年度はその時点で通常の授業がオンラインで行われていたために、入試も

オンラインが中心となりました。

もう一点ですが、令和3年度の入学者選抜がすべて終わった段階で、各学部ヒアリングを行ったところ、オンラインでやりやすかった選抜方法とやりにくかった選抜方法がありました。やりやすかった選抜方法は面接で、オンラインでもそれほど問題がなかったです。ところが、例えば小論文の代わりにオンラインで口述試験を行ったケースでは、かなり違う能力を測っているという問題もあったため、2年目には対面でやるという学部が多かったです。ただ、福岡以外の遠方の会場でも面接を行っていた学部に関しては、継続してオンラインを実施するということが決まっています。

寺尾：

どうもありがとうございます。これがオミクロン前です。

オミクロン後に移りたいと思いますが、オミクロン株の水際対策の影響が最初に直撃した私費外国人留学生入試のことを、立脇先生にお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

立脇：

まず、外国人留学生入試に関して簡単に説明させていただきます。本学の場合、2つの入試区分があります。1つ目は4月入学の入試で、こちらは基本的に日本人の学生と同様に、日本語の授業を受ける学生のための入試区分になっております。そのために行っている入試も日本人向けのものに近い設計になっています。日本学生支援機構が行っている日本留学試験（EJU）—共通テストに当たるようなもの—に加えて、大学独自の日本語試験、さらに面接を行っています。こちらに関しては、大学に来て同じような環境で試験を受けていますので、日本人の一般選抜にかなり近い形の設計になっております。

こちらの入試区分は、最もコロナの影響を受けております。入国制限の影響で、既に受験の手続等を行っていたものの、日本に入国できなかった志願者には受験料の返還等の対応を行いました。さらに、令和3年度入試（コロナ禍の入試の最初の年）に関しては、日本留学試験の第1回目の試験が中止になっています。試験の実施が危ぶまれるほど、大きな影響を受けました。

もう一つの選抜区分は10月入学の入試で、こちらは英語で授業を行う、国際コース向けの入試になっております。欧米やシンガポールだけではなく、英語を公用語としない地域の学

生の方も受験をしております。様々な国から受けるため、例えば学力試験に関してはEJU、GCEとアメリカやイギリス、様々な国の共通テストのスコアのうちどれかを1つ提出してもらっています。加えて、エッセイやオンラインでの面接を行っております。こちらの入試区分は、元々九州大学に来なくても受験できるように設計してありましたので、コロナの影響というのはあまり受けなかったのです。ただ初年度に関しては、海外の方が日本よりもコロナのはやまった時期が早く、現地の試験の時期と重なっていたために、一部の試験が中止になったという影響はありました。

寺尾：

ありがとうございます。

東北大学でも外国人留学生入試で対面とオンラインを併用されるなど入国禁止の影響が出たというふうに伺いましたけれども、倉元先生、いかがでしょうか。

倉元：

ごく簡単に説明させていただきます。大きかったのはやはり12月の段階です。12月に入った段階で、海外から受験生が入国できないということが分かりました。その一方で、入国できない受験生に対して対応しなければいけないという事情が起こってきました。本学の私費外国人留学生入試は、3月10日と他大学さんと比べて多分遅い時期になっていると思います。そこにメリットはあったのですが、それでも苦労しました。選抜方法としては、面接と、一部の学部が数学の筆記試験を課しています。面接のほうはそれまで大学院でもオンラインの対応をやっていたので、かなりノウハウは積んでいたのですが、筆記試験は大変苦労したというところでは。

ここで大事な要因は、受験者の規模です。例年、志願者数が60人前後で、実際に受けてくれる人は若干減るのですが、最終的にはその中の10人ぐらいがオンラインの筆記試験対象になりました。それまでの準備もなかったものですから、公平性を考えて、対面の試験と同じ時間に同じ問題をオンラインで実施するという非常に厳しい条件の試験を行いました。人海戦術もあって1人の受験生に対して2人ぐらいの監督者がつくようなやり方で何とかやり切ったのですが、非常に薄氷を踏む思いであったということを、オンラインの筆記試験を担当したグループからは聞いております。私は実は対面のほうを対応していたので、詳しくは知らないですけども、そういう状況でした。限界を見た感じでございます。

寺尾：

ありがとうございます。

さて、次に名古屋大学の石井先生に令和4年度入試における共通テスト、個別学力検査の当日の様子を伺いたいと思います。オミクロン株の濃厚接触者への対応も含めて石井先生、お話をお伺いできますでしょうか。

石井：

コロナ2年目ということで、1年目に取っていた対策を洗練させ、事前の準備も十分できたと思います。試験監督がいて、試験場にいる予備監督がいて、待機監督という、何かあったら来ていただく試験監督者という三段構えの体制を取って、1年目はかなり人数を手厚くしました。しかし2年目については、そこまで多くなくても大丈夫だということが分かりましたので、多少人数を絞りながら万全の体制で臨みました。

試験をするにあたり、受験生をきちんと守って、きちんと受験をしていただくことが第一なのはもちろんですが、大学の教職員も守ってきちんと入試をやっていくことを考えることも非常に重要になってきます。

実際にあった大変な例としては、濃厚接触者が別室受験になった際、その濃厚接触者の方がいわゆる時間延長の方だった場合には、その試験監督者の監督業務も延長することになります。そうすると、1人の監督者がずっとその部屋にいるというのも感染予防の観点からするとよくないということで、監督者をローテーションする体制を取りました。他方のべ人数が多くなっていくことを検討する必要が生じてきました。別室受験は、試験室の数が少ないときであれば何とか対応が利くのですが、数が多くなってきた場合、またそれが延長となる場合、試験監督者ののべ人数がどんどん多くなっていくため、試験監督者の確保という点でちょっと苦労しました。監督する大学教員も、例えば持病を持っていらっしゃる方なども多いので、教職員の数がそれほど多くない状況の中で対応していくことに難しい場面が出てきました。

寺尾：

ありがとうございます。

続いて、佐賀大学の西郡先生にもお話を伺いたいと思います。共通テストで少しご苦労

されたというお話をお伺いしましたけれども、このことについて教えていただけますでしょうか。

西郡：

共通テストの本番の前日、県内のある高校から連絡がありました。その高校の地域がちょうどその時期にオミクロン株で非常に感染者が増えており、あるクラスで感染者が出てしまいました。保健所も逼迫していて誰が濃厚接触者か分からないということで、どうすればよいのか、という問合せが前日の午前中にありました。大学入試センターと相談して、当該クラスは30名ほどをすべて別室で受験させる対応をとりました。幸いにも、そのクラスの生徒さんたちの科目選択のパターンが同じでしたので、複雑な試験室設定にはならなかったわけですが、ただ答案用紙を元に戻さなければいけないという状況で、かなり慎重な対応を要するものでした。これについては何重ものチェックを行いました。もし、こうした事象が複数件発生していたり、あるいは科目選択のパターンがかなり複数であったりすると、運用上かなり難しい判断になったのではないかなというふうに考えております。

寺尾：

ありがとうございます。

ここまでの共通テストの話だったのですが、個別学力検査の濃厚接触者対応に関連して、愛媛大学では大変丁寧な対応をされたというふうに伺いました。このことについて中村先生、教えていただけますでしょうか。

中村：

先ほど冒頭のスライドにもありましたように、大学入学共通テストの濃厚接触者の対応が変わったことに伴って、個別学力検査に対する扱いも変更することになりました。ただし個別学力検査については、大学入学共通テストのように、出願者の出身地域が同じではないので、出願者の状況が個々に異なるということが想定されました。そのため、一律にこういう対応をするということはなかなか難しいのではないかとということになりました。一律の対応を示すのではなくて、個々に相談してくださいということを示しました。ちょうど感染拡大がかなり進んでいた時期なので、それに伴って想定外の対応も検討する可能

性があるということになりました。

寺尾：

ありがとうございます。

名工大の林先生にもお話を伺いたいと思いますが、オミクロンに特化したということではないかもしれませんが、個別学力検査での追試験の受験資格に関して少し不思議なことが起こったということで、お話をお伺いできますでしょうか。

林：

不思議なという言い方が正確かどうかということはあるのですが、ご存じのとおり、我々個別試験は前期と後期と2回やっております。それぞれの受験者に対して健康を留意してということになるわけですが、本学を後期で受けた受験者についての事例で、前期日程では本学ではないある大学をお受けになって、そのときにCOVID-19疑いということで、追試験のほうに回りなさいということになった受験者が、追試験を受ける申請をされました。

本学には後期日程で来学をされ、実際試験室に入られたわけですが、やはり少し健康に不安があるということで申し出があって、お医者さんに診ていただいたところ、やはり追試験へ回ったほうがいだろうということになったわけです。

つまりそのご本人は、ある大学で前期日程の追試験の措置、本学でも後期日程の追試験の措置ということで、2回の受験の権利を有したということになります。しかし、国立大学の場合は前期日程・後期日程ともに3月22日に追試験を実施することになっておりますので、その方についてはどちらかしか選べないということになってしまいました。実際どうなったかというと、追試験の3月22日に本学にはいらっしやいませんでしたので、もう一つの大学を受験されたのではないかと想像しております。実際、我々調べておりませんので分かりません。2回の権利を有する受験生が出てしまったということが、我々も最初、ちょっと不思議だったわけです。再度見てみますと、大学入試センターのほうで配布されている健康状態チェックリストでは、AとBという2つの区分の中で、いくつ以上チェックが入ったら追試験に回っていただくという対応を取っております。微熱であったとしても強いだるさがある咳があるという症状を訴えられた場合には、追試験を申請することになります。それぞれの大学がこれに従った結果、その受験生は2つの受験資格を持ってし

まったということです。

ただ、2月の試験と3月の試験の両方で追試験を受けるというようなことは、それほど一般的なことではないので、追試験を2日間設定するというのは個別大学としてはぜひ遠慮いただきたいと思っています。ですが、そういうことが起こるといふこと、その理由については皆さんにお知らせしておいてもいいのかなといふことで、この研究会でご報告させていただきました。

寺尾：

ありがとうございます。

第1部の最後のトピックとして、共通テストなしの個別学力検査、共通テストのみの選抜を取り上げたいと思います。追試験も受けられなかった受験生の救済措置として、1月11日に出た通達への対応ですけれども、例えば佐賀大学ではどのような対応を取られましたでしょうか。

西郡：

この方針が出てから、すぐにこういった形で対応するのかということを中心に全学的に議論したわけですが、共通テストの本試験・追試験をどちらか受けていれば、他の受験者との比較も行いやすいといふことで、対応はある程度できるかなと考えていました。

難しいのは共通テストを追試も含めて受験できなかった場合の対応です。個別試験だと、例えば英語だけしか課していない学部などでは選抜資料が非常に少なくなります。基礎学力も十分に評価できないというところがありました。基本的な方針としては個別学力検査と出願書類を用いて合否判定を行うということにしました。ただ、やはり大学入学共通テストに相当する幅広い基礎学力の評価を補いたいと考えて、前期日程の試験日に実施している他の教科科目、他学部が実施しているものも併せて課すという方針を出しました。

例えば個別学力検査が英語のみの学部については、追加で他の学部が課している国語や数学を、できる限り出題範囲で課して判定しようといふことです。何を課すかにつきましては、各学部のアドミッションポリシーの観点から決定する、といふところまで公表していたところです。

合否判定につきましては、順序づけといふのは非常に難しいといふところがありましたので、その点については試験の成績から総合的に合否判定を行うことを想定していました。

寺尾：

どうもありがとうございます。

愛媛大学では、学科ごとの対応にバリエーションがあったというお話をお伺いしましたがけれども、このことについてお話しいただけますでしょうか。

中村：

いずれの大学でもタイミングが同じだったと思いますが、愛媛大学の場合は、出願が終了する前に本学のホームページで周知しました。共通テストを受験できなかった場合の対応では、社会共創学部の2学科と医学部看護学科以外は対応可能としまして、出願の場合には2月3日17時までに相談窓口で電話で事前相談をしてもらうようにしました。また、共通テストのみでの対応では、社会共創学部の2学科、理学部、医学部以外は対応可能としまして、一般選抜の追試験日である3月22日12時までに相談窓口で電話連絡をしてほしいという扱いとしました。

寺尾：

どうもありがとうございます。

令和4年度入試を直撃したオミクロン株への対応、オミクロン前とオミクロン後と見てまいりましたけれども、およそ該当者がいない、あるいはごく少数に限られるケースについても、時間がタイトな中で多大なエフォートを割いて検討されたということでした。このことについては、後の総合討論のところでも論点になるかと思います。

寺尾：

続いて第2部「自然のもたらす災いと大学入試」です。

共通テスト1日目の午後1時頃、日本からはるか8,000キロ離れたトンガで海底火山が噴火したというニュースが流れてきました。海底火山の噴火はラム波という気圧波を発生させ、潮位の変化が生じた結果、津波という形で日本に影響を及ぼしました。1月16日日曜日深夜0時15分、気象庁は太平洋側の広い範囲に津波警報と津波注意報を発表しました。

この場をお借りしまして、事前配付資料をご丁寧にご覧いただき、資料の誤りを指摘してくださった方へ御礼申し上げたいと思います。事前配付資料の初版では、岩手県を津波注意報に入れたままにしておりました。実際0時15分の発表、発令では注意報だったのですが調べたところ、2時54分に注意報から警報に変わっております。情報が不足していたことについておわび申し上げるとともに、ご指摘いただいたことに御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

トンガ海底火山噴火と再試験

・岩手県の公共交通機関への影響

- ・沿岸部のJR・三陸鉄道・路線バスで始発から運転見合わせ

・岩手県沿岸部における共通テストの試験場

- ・釜石高校・大船渡高校試験場：予定通り
- ・岩手県立大学宮古短期大学部試験場：再試験

2日目 1月30日（日）

教科：理科①			
大学名	定員数	受験者数	受験率
岩手県	岩手県立大学宮古短期大学部	181	69

教科：数学①			
大学名	定員数	受験者数	受験率
岩手県	岩手県立大学宮古短期大学部	181	171

教科：数学②			
大学名	定員数	受験者数	受験率
岩手県	岩手県立大学宮古短期大学部	181	169

教科：理科②			
大学名	定員数	受験者数	受験率
岩手県	岩手県立大学宮古短期大学部	181	106
三重県	三重大学	5	5

<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00040991.pdf&n=別添1：追・再試験受験状況.pdf>

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

27

共通テストの2日目の実施に対する直接的な影響としましては、沿岸部の試験場の再試験が挙げられます。岩手県沿岸部の公共交通機関は始発から運転を見合わせ、試験場に向かおうとする受験生を足止めすることになりました。岩手県沿岸部の釜石高校、大船渡高校の試験場で2日目は予定どおり進行できましたが、岩手県立大学宮古短期大学部の試験場は2日目を再試験とすることになりました。

共通一次試験・センター試験と自然災害

・雪による試験時間の繰り下げは、ほぼ毎年のこと

- ・昭和54 (1979) 年1月の共通一次試験は、関東地方に降雪

・震災とセンター試験

- ・平成5 (1993) 年度センター試験：前日に**釧路沖地震**
- ・平成7 (1995) 年度センター試験：本試験の2日後に**阪神・淡路大震災**
- ・平成24 (2012) 年度センター試験：
前年の**東日本大震災**を受け、試験場の増設・検定料の免除など
各種の対応

独立行政法人大学入試センター (2020). 「センター試験をふり返る」 pp.189 - 236 を参照
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00040328.pdf&n=「センター試験」をふり返る.pdf>

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

28

実は、試験実施当日の自然災害は、公共交通機関の運行状況にかなり影響を及ぼします。それは入試関係者にとって基本のキの情報なのかもしれません。当センターが実施してきた共通一次試験、センター試験の歴史を見ましても、自然災害の影響は様々あります。共通一次試験、センター試験は現行試験と同じ1月に実施してきました。どうしても時期的には雪とは切っても切り離せない季節でありまして、共通一次試験の初回だった昭和54年度入試も午後からの試験だったということですが、朝は雪に見舞われていたようです。共通一次試験、センター試験において雪の影響による試験時間の繰下げ、公共交通機関の乱れからくる試験時間の繰下げはあまり珍しいことではありません。

大きな震災はセンター試験の当日こそ直撃していませんが、試験の前後で各地を襲い、入試の実施、運営を揺るがしてきた歴史があります。平成5年度入試では、前日に釧路沖地震が発生し、北海道教育大学釧路分校の試験場の窓ガラスが割れたために試験場として使いものにならなくなりました。夜を徹し、急遽体育館に試験場を移設して当日を迎えたという記録もあります。

平成7年度入試に関しては皆様ご存じのとおり、1月17日の阪神・淡路大震災の影響が出ました。当日の実施運営を襲うことはありませんでしたが、答案輸送網が麻痺しました。マークシートは1枚たりともなくさずにこちらに戻す必要がありますので、代替の輸送手段を用いて迂回路を確保し、何とか輸送することができました。また、当初、西日本地区の追試験会場は京都大学にお願いしておりましたけれども、急遽九州大学にも試験場を追

加したということも大きな出来事でした。

平成24年度入試では、前年の東日本大震災を受け、試験場の増設、それから被災した受験生に対する検定料の免除など各種の対応をセンターとして行ってまいりました。

これらの歴史的な事実は2020年に当センターが発行した報告書「センター試験をふり返る」の巻末に掲載されています。ご関心がおありの方はぜひご一読ください。

それで、トンガの海底火山の噴火を受けた岩手県ですけれども、まずは本日のご登壇者の先生方の中で地理的に近い倉元先生にお話を伺いたと思います。トンガでの噴火は共通テストの2日目にどういった影響を及ぼしたのか教えていただけますでしょうか。

倉元：

まず、前の晩にトンガで噴火があったということは知っていたのですが、こちらに影響があるということは想像していませんでした。個人的な話になりますが、朝起きて、テレビをつけてみたら、交通機関が止まっているという話で、そこがまず一番困りました。特に緊急事態ですので、試験関係者としては何があっても試験場に駆けつけなきゃいけないわけです。自分が使っている電車が動かないということがあり、幸い車を調達できたので、試験場に向かうことができたのですが、実はその後のことはほとんど覚えていないのです。というのは、おそらく宮城県のほうは交通機関の復旧が結構早かったのではなかったかと思えます。ですので、試験実施をどうするかということを議論した記憶はありません。

ただ、準備をしている間に、非常にローカルな話で恐縮ですけれども、受験生が使うトイレが壊れるという事件が起きました。背景を話しますと、コロナ禍で教室を使っていなかった時期を経て、共通テストの1日目に多数の受験生が一気にトイレを使用するというようなことがあったからだと思うのですが、朝方、どうも初日ダメージを受けていたトイレの配管が割れたらしく、試験室に予定していた教室が水浸しになったという事件がありました。その復旧と、トイレの確保に走り回っていたので、津波の話はその後あまり覚えていないというところが正直なところですね。

岩手県では本当に大変だったと思いますけれども、我々のほうは幸いにして、そこまでの影響はなかった。ちょっと対応のフェーズが違っていたかなという気がします。

寺尾：

ありがとうございます。

念のための確認ですけれども、トイレが壊れてしまったということは、トンガの噴火や、津波とは無関係ということではよかったでしょうか。

倉元：

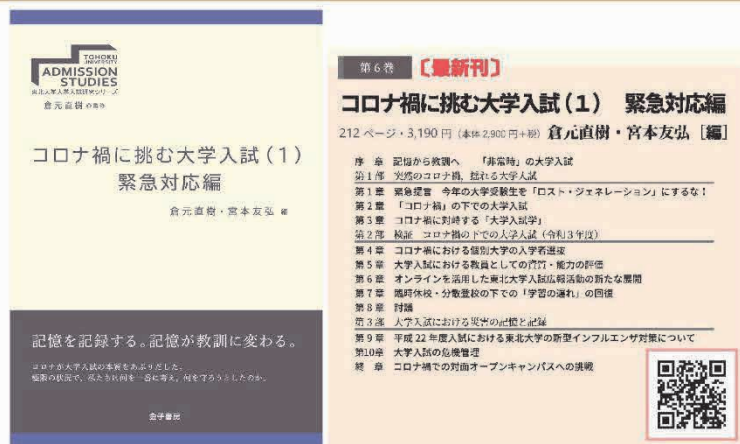
はい、関係はないです。関係はないですけども、試験場っていろんなことが起こりますよね、という例として一つ、お話をさせていただいたということです。

寺尾：

どうもありがとうございます。

倉元先生は入試に長く携わられる中で幾つもの自然災害をご経験でいらっしゃいます。自然災害と入試に関わるエピソードということで、危機対応とつなげながら少しご紹介いただきたいと思います。お願いできますでしょうか。

自然災害の記憶と記録



2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

30

倉元：

自然災害という縛りになってくると関係ない話も入ってくるかもしれませんが、ある時期、非常に毎年いろんなことが起こりました。今回、コロナの経験がありましたので、私も東北大学で「東北大学大学研究入試シリーズ」という本を出しています。一番最近の巻では「コロナ禍に挑む大学入試(1) 緊急対応編」というタイトルの本を出させていただいたのですが、その最後の章2つが緊急対応の例になっています。1番最後は、い

わゆる東日本大震災の話です。

その1つ前の章では、もう記憶にない方もいらっしゃるかもしれませんが、平成22年度に流行した新型インフルエンザの時のことについて書いたものです。新型コロナと違って入試の時期には普通のインフルエンザであるという認識になっていて、それほど脅威の中で実施されたということではなかったのですが、例えば、各都道府県に追試験場を設けるというような対応を迫られたことがありました。そのときのことをまとめたものです。実は、今回新型コロナウイルスに対してどう対応するかということについて、これですべてできたわけではないのですが、1つのヒントになる記録ではあったかなと思います。そういう意味では、今日こうやってお話をさせていただくのも、将来のことを考えるといい機会なのかなと思ったりもします。

それで、1つポイントになるのは、災害発生のタイミングです。試験が実施されている時間帯に大きな災害に見舞われたという経験はありません。試験の前に起こったこと、あるいは当日起こったことというのは相当程度経験をしています。ですので、先ほどのトンガの話もそうですが、大きな整理をすると、まず我々試験実施の関係者としては、ある程度の状況であれば、まずは受験生に予定どおり試験をいい環境で受けていただき、それまで準備してきた実力を最大限発揮してもらって、しかも公平な環境を保つということを第一に考えます。それ以上の問題になったとき、すなわち、生命や身体に関わるような危険が迫っているとすると、もともとのミッションをある程度限定しなきゃいけない、そういう判断に迫られるのかなと思います。

私たちの話ではないのですが、1つのヒントになるのが、東日本大震災のときに、宮城県の高校入試が終わった翌々日でしたか、そのようなタイミングでこの地震が発生した際の出来事が、東日本大震災について書かれた最後の章の冒頭に書いてあります。沿岸の高校が実際に津波に襲われて、校舎に残っていた生徒と一緒に先生方が避難をされたという話です。本当に校舎が津波に襲われて、屋上に逃げた子どもたちと先生方は、結果論としては全員助かったのです。非常に危ない状況だったのです。そのときに既に採点、集計等終わった入試データをどういうふうに扱ったかということも、1つのヒントになってくるかなと思います。

私どもの経験としては、ちょうど3月11日、東日本大震災のときというのが、後期日程の前日でした。多くの受験生が後期日程を受けるべく仙台に入ったところで被災をしている状況でした。その中で私どもはとにかく「明日の試験はできない」ということをどうや

って伝えるかというところにまず腐心をしました。その後、これはどう考えてもそう早く復旧することはないので、何かの代替の手段で、先ほどコロナの追試験対応の話でも出ましたが、大学入試センター試験のデータをなるべく活用して合否判定をするというような取り組みを行っておりました。

ここで非常に強く感じたのは、現場の感覚をすべて共有していただくのは難しいのだな、ということです。幸い大学が内陸にあったこともあり、生死に関わる状況ではなかったのですが、それでも被災をして、それぞれ生活の大変な中で業務を行っていたわけです。ただ、それはそれとして、例えば受験生ご本人より恐らく保護者、それはそれで人生をかけた大事な機会を場合によっては奪われたという状況になる。そうすると、事務職員の方々が対応したのですが、色々な電話がかかってくるわけですが、正直あまり気持ちのいいものではないような内容もある。そういうギャップというのを感じながら業務をさせていただいていたということがあるかなと思います。

受験生の皆さんに、ぎりぎり何とか予定されていたとおりに受験していただくということを最優先に、いろいろな状況の中でやってきたのですが、それが最後、身体、生命の危機が迫っている状況でどう判断を切り替えるのかというのは、多分難しい課題として残っています。また、その状況について、どうやって、その場にはいない方々に分かっていただくかというのは難しい課題だなと思います。

また後で機会があれば、色々なエピソードはありますので、そのときに披露させていただきたいと思います。お時間いただきましてありがとうございました。

寺尾：

どうもありがとうございます。

自然災害が起こったときというのは、みんなパニックになっているという状況ですので、試験に関わる関係者としても、自分自身の生命を確保した状態で、重要な判断をしければいけないというところはやはり難しい判断になるのだろうなという感想を持ちました。ありがとうございます。

入試シーズンは先ほどもご紹介したとおり、どうしても季節柄、雪の影響を受けざるを得ないかなと思う次第です。当日は状況を見ながら判断すべきときに適切な判断、それは試験時間の繰下げであったり再試験であったり、いろいろだと思いますけれども、判断を下す必要があります。関係者のみに閉じて実施したオンライン・フォーラムでは、自然災

害の話題も十分議論をしたのですが、そこから派生して大学間で試験実施本部の様子、運営の仕方が異なるということも教えていただきました。詳細をお話しいただくのはなかなか限界があるかなと思うトピックですけれども、名古屋大学の石井先生と名工大の林先生にお話を伺いたいと思います。

まずは石井先生にお話を伺いたいのですが、雪と公共交通機関の乱れに伴って、試験時間の繰下げ判断などが生じると思うのですが、差し支えない範囲でご経験を教えていただいてもよろしいでしょうか。

石井：

雪の場合は、公共交通機関が遅れたり止まったりしますので、先ほどの倉元先生のお話にもありましたが、復旧のめどがどれぐらいで立つかということも考えます。ただ、復旧したからといってすぐ受験生が到着するわけでもないで、どのくらい遅らせればいいのかも考えます。遅らせるといってもいくらでも遅らせられるわけではなくて、実際に通常の進行で進んだところとの兼ね合いも考えながら大学入試センターとも相談し、どれぐらい遅らせるか実施本部のほうで検討したうえで、大学のホームページに掲載し、周知していきます。公共交通機関で、例えば駅でアナウンスしていただければ受験生にも早く伝わりますので、実施本部ではそのような検討もしております。

あと、公共交通機関の話題ではないのですが、大学構内に非常に角度の強い坂があり、そこを通過してトラックで答案用紙を運ばなくてははいけません。実際、雪が降って構内で路面凍結が起こった場合、トラックが上がれなくなることがあります。雪が予見される場合は、前日から融雪剤をまいておかななくてはなりません。このあたりに関しては、職員の方に夜を徹してお願いする判断も必要になってきます。

寺尾：

どうもありがとうございます。

林先生は前任校である九州大学と、今いらっしゃる名工大の両方で当日、試験実施本部の業務に当たられた経験がおありということでした。自然災害というところ、今のテーマは自然災害ですけれども、自然災害発生時の意思決定、情報収集、あるいは自然災害以外のご経験にも派生していただいても構いませんけれども、試験実施本部の大学間の違いについて、ご紹介いただけますでしょうか。

林：

2つの大学で、実施本部に入る機会があったわけですが、2つの大学とも、一番情報が収集しやすいというのは多分テレビなのだろうとは思いますが、テレビが常時ついているということは基本的にはあまりないということで、名工大の場合は逐次、交通機関に電話をして、遅れ等はありませんかということを探ね、大丈夫だということを確認しながら実施しています。

前任の九大に関しては、立脇先生のほうが現状はお詳しいでしょうから、私は若干古いということになりますが、九大の場合は分散キャンパスでありまして、実施本部とそれぞれの部局の試験場というのは全く独立した場所にあるといってもいいぐらい距離があります。そのため完全に電話でそれぞれの部局とやり取りをします。

情報収集について、皆さんは実施本部というのはどういう業務をされているか、なかなか想像しにくいのかもかもしれませんが、テレビやウェブを常時監視できるというような環境にはありませんでした。逆に言うと、いろいろと判断しないといけない情報がどんどん来るものですから、それに対応しないといけない。現在日本国内でどういうことが起こっているのか、この後、刺傷事件の話もありますが、それも実は12時のテレビのニュースで知ったという状況でした。

本学、今いる名工大のほうは非常にコンパクトでありますので、そういう意味では私も着任してびっくりしたのですが、職員がトランシーバーを持っていて、それぞれのポイントに常駐をさせて、今こういうことが起こっているということを、それぞれシェアをするということをしていて、なかなかうまくいっている方法だと思っています。

大学はそれぞれいろいろな文化を持っているわけですが、それぞれのキャンパスの配置だとかサイズだとかを含めて一番運用しやすい方法を、長年先輩方が構築をされてきて、現在があるのだなというのが、この2か所の大学を拝見しての感想ということになっています。

寺尾：

どうもありがとうございます。

入試当日に自然災害が起きたときの危機対応をどうするかということ、お話にも上がってきたと思います。入試前日あるいは入試後に自然災害が起こった場合と分けて議論す

る必要があると思います。他の危機との関係も踏まえながら、総合討論のところで改めて扱いたいと思います。

第 3 部

人が介在する禍と大学入試

3

人が介在する禍と大学入試

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

31

東大農正門前刺傷事件のあらまし

- 2022年1月15日 (土) 朝
 - 東京大学本郷地区キャンパス農正門前で、受験生の男女2名と70代男性が切りつけられた
 - 名古屋市の高校に通う少年 (当時17) が殺人未遂容疑で現行犯逮捕
- 東京メトロ南北線「東大前」駅における不審火
 - ペットボトルなどに可燃性の液体を用意、車両内にもまき散らし
 - 東大前駅構内では、着火剤のようなものが燃えた形跡が8か所ほど
- この事件の影響で精神的動揺を受け、
受験できなかった者 4 名には追試験の受験を許可

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

32

寺尾：

続いて第3部「人が介在する禍と大学入試」に移りたいと思います。

第3部の最初のトピックは東大農正門前の刺傷事件です。先ほどのトンガの話から時間軸が前後して申し訳ないのですが、共通テストの1日目、1月15日土曜日の朝、東京大学本郷キャンパスの農正門前において、受験生の男女2名と70代の男性1名が刃物で切りつけられたという事件が起きました。当時17歳の少年が殺人未遂容疑で現行犯逮捕されることになりました。この少年は、東京メトロ南北線東大前駅でも不審な行動を取っていました。少年はペットボトルに可燃性の液体を用意し、駅構内に拡散した上で火をつけていました。車両内にも可燃性の液体をまき散らし、駅構内には着火剤のようなものが燃えた跡が8か所ほどあったということです。

この事件の影響により、精神的動揺を受けたために本試験を受験することができなかった受験生が4名いらっしゃいました。この4名に対しては追試験の受験を認めることといたしました。

令和5年度入学者選抜実施要項の関連箇所

- ・ 令和4年6月3日
「令和5年度大学入学者選抜実施要項について（通知）」（4文科高第302号）

第13 その他注意事項 8 災害等の不測の事態への対応 (p.11)

特に、受験者が安心して受験に臨めるよう、各大学は次のことに取組むこと。

1. 試験実施当日の安全対策について、必要に応じて警察や受験者が利用する公共交通機関等と連携して対応すること。
2. 試験実施日には、入試方法や受験者数など大学の実情に応じて、教職員の活用も含め、必要な警備要員を確保するとともに、試験場周辺や試験場内の十分な巡回に努めること。
3. 警察や消防等の協力の下、警備体制や救助要請等に関する危機事象発生時のマニュアル等を整備し、定期的に見直すこと。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

33

試験当日に不測の事態が発生した場合、大学側は適切な対応を取る必要が出てきます。令和5年度の入学者選抜実施要項においても、安全対策、警備員の確保、十分な巡回などについて明記されています。また、こうした不測の事態が発生した際に、受験することができなかった者がいる場合には、受験機会の確保に努めるということも記載されています。

令和5年度入学者選抜実施要項の関連箇所

- 令和4年6月3日
「令和5年度大学入学者選抜実施要項について（通知）」（4文科高第302号）

第13 その他注意事項

8 災害等の不測の事態への対応 (p.11)

この他、各大学は、大学の実情に応じて、次のようなことについても継続的に対応することが考えられる。

1. 試験実施当日の試験場周辺や試験場内において、受験者等が万が一、不審者や不審物を発見した場合に、その通報を受けられる体制を整えておくこと。
2. 自然災害や人為災害等により、受験することができなかった者がいる場合には、当該受験者の受験機会の確保等に配慮すること。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

34

本日の登壇者の先生方の中に直接の当事者の方はいらっしゃいませんので、この座談会ではこのトピックを間接的にしか取り上げられませんけれども、加害少年が名古屋市在住の少年だった、高校生だったということで、名古屋大学、名古屋工業大学では共通テスト2日目に対応を求められたようでした。

第3部で取り上げる話題

・東大農正門前刺傷事件を受けての対応

- ・本試験2日目における名古屋市内の大学での対応

・不正行為

- ・不正行為の考え方
- ・中国・韓国と比較しての不正行為対策
- ・オンライン面接等での不正行為判定について

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

35

はじめに、名古屋大学の石井先生にお伺いしたいのですが、東大前刺傷事件のニュース

をどのようにお知りになったのかというところ、あるいは名古屋大学としてどういった対応が求められたのかということ、当日の様子も含めながら詳しくお話をお伺いしてもよろしいでしょうか。

石井：

まず、ニュースを知ったのは報道です。ネットニュースやテレビのニュースで知りました。特に警察等から連絡があったわけではなく、一般報道で知りました。ただ、音声は出していないのですが、ニュースの映像を試験場本部ですっと流しているの、何かあると分かる状況にはありました。かなり早い段階でキャッチしていたと思います。

その話に入る前に、まず例年どういう体制であったかを申し上げておきたいのですが、コロナの感染防止のため、まず構内等に保護者は入れない対策を取っていました。また、高校など周辺が住宅地のところもあり、送り迎えの車が来たり、受験生が騒ぐことがあってはいけないので、警備会社の方をお願いして地域の巡回やパトロールを例年行っていました。今年度も1日目はそれを行っていました。

2日目ですが、その事件を受けまして、警備会社に警備をもっと増強してもらおうか、パトロールを増やそうか、職員の巡回数を増やそうかということを検討していたところ、警察から見回りをしたいという連絡が入ってまいりました。大学を分断するように一般道が走っておりますので、大学にパトカーが来て警官の方がいらっしゃって、大学職員の案内で構内を巡回していただきました。

また、大学入試センターからも注意喚起を促す警備体制を強化してくださいというファクスも届いておりましたので、それらの指示に従って警備体制等を強めたところです。

それで、2日目どうしようかというときに、1日目の夕方から夜にかけて、警察署から入試課宛てにファクスが届きました。警察としても事態を重視して警備をしますので、大学においても対応方よろしく願いますという内容が、各警察署から届きました。各警察署と申し上げたのは、名古屋大学は名古屋市の千種区にあり、高校会場をいくつか設けていますが、他の区にその高校があった場合には警察署が他の区の管轄になりますので、それぞれの管轄の警察署から同様の内容のファクスが届きました。ファックスの内容としては、警察署と警戒状況等についての情報共有をしてください、全入学者の身元を確認してください、警備を増強してください、刃物を持っているなどの不審者に注意してください、もしそういうことがあった場合には警察署に連絡してください、刺股（さすまた）などの

備品の確認をしてください、などの項目が上がっていました。大学としてはそれらに沿って、いろんな警備体制の強化・備品の再確認等を行いました。

初日は建物に入るところで受験票を確認していたのですが、2日目はまず大学構内や高校の敷地内に入る段階で受験票の確認をし、さらに建物に入るところでも受験票の確認をする体制を取りました。警察も引き続き巡回をしてくださいました。高校会場では、さすがに会場にパトカーが来るのはどうかということで、パトカーの入構はご遠慮いただいて、ただ近隣の巡回だけをしていただきました。

おかげさまで特に大きなトラブルもなく、また不調等を訴え出てくる受験者はおらず、無事に入試ができたという状況です。

寺尾：

大変詳しい話をありがとうございます。当日の様子が手に取るように伝わってきます。名工大ではいかがでしたでしょうか。

林：

石井先生が詳しくご紹介くださったのですが、名工大のほうはそういった対応はほとんどありませんでした。もともと本学の場合は正門の前の交差点からしか入構はできませんし、受験者しか入構できないという条件でこれまでも、多分これからも実施してまいります。その交差点というのは一般の道路で、ちょうど本学に入る形でT字型になっています。その交差点のところに2名の警察官の方が整理のために立ってくださいまして、構内に入ってしまうと、物々しいこともなく実施をさせていただきました。

実は先ほども申し上げましたけど、警察官が立ったということも、実は昼のニュースで知ったぐらいで、本部から正門までもちょっと距離はあるものですから、そういった状況把握しかできていないということです。

名古屋地区の報道機関の考え方なのかどうか分かりませんが、2日目は本学に来られるということが定番のようになっていて、2日目は本学の正門が映るということで注視していたところ、お巡りさんが2人整理をしてくださっていたということで、それほど刺傷事件との関係で物々しいということは全くなかったということでございます。

寺尾：

どうもありがとうございます。名古屋地区においても、これほどコントラストがあるのかというふうに思った次第です。

ここまでが東大前の刺傷事件ですけれども、人が介在した禍という意味では、不正行為もその一つと言えらると思います。初めに、共通テストの1日目に起こった不正行為のあらましを振り返りたいと思います。

共通テストにおける不正行為

- **本試験1日目「地理歴史・公民」**
 - スマートフォンを用いて世界史Bの問題冊子の一部を撮影し、画像送信の中継役が、外部の者に送信
- **スマートフォンを使用して検索を行う不正行為は数件あった**
- **試験問題が流出し、外部の者から解答を送ってもらう事件は前代未聞**
 - 15日中に大学入試センターに匿名通報
- **不正行為を行った女子大学生は「去年も不正を行った」と供述**

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

36

本試験1日目の最初のコマ「地理歴史・公民」の時間において、スマートフォンを用いて世界史Bの問題冊子の一部を撮影し、中継役の手助けの下、外部の者に送信をするという不正行為が発生しました。これまでスマートフォンを用いた不正行為は数件あったところですが、試験問題の画像が流出し、外部の者から解答を送ってもらう形での不正行為は共通テストでは初めてでした。

類似した不正行為は一橋大学の私費外国人留学生選抜の試験でも起きました。一橋大学の事例では、スマートフォンの使用に加えて、報道ベースではありますけれども、長さ1センチほどのワイヤレスイヤホンを耳につけて、それを使用したのではないかという報道もあります。

一橋大学における不正行為

- 共通テストと同様の方法で、一橋大学でも不正行為が発生
 - 2022年1月31日(月)の試験(私費外国人留学生選抜)
 - 数学の問題冊子の一部が撮影され、外部の者に画像を送信
 - 問題の画像を受け取った者は、不審に思って大学側に通報
- 『長さ1センチほどのワイヤレスイヤホンが見つかった。スマホと連動させたイヤホンを耳に隠し入れていたところに、答えを教えたのだろう』という報道もある

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

37

大学入学共通テストにおける電子機器類を使用した不正行為の防止策について

令和4年6月10日 大学入試センター

基本的な考え方

- 不正行為を行う者は極めて少数であり、大多数の者は誠実に受験しているため、受験者に対し過度な負担を強いるものではないこと
- 大学(監督者等)の負担増により、試験の円滑な実施に支障が出ないこと
- 令和5年度大学入学共通テストにおいて効果が期待できること
- 今後の技術的進展等に応じ、適宜必要な検討を行うこと

1 大学(監督者)対応の見直し

- 大学(監督者)に対し、①不正行為事例等の情報や、②写真照合及び試験時間中の巡視の際に確認すべきポイントをマニュアル等で提供する。
- 巡視の回数を増やすよう要請する。その際、静謐な環境保持に留意するよう注意を促す。
- スマートフォンなど電子機器類を監督者の指示で一斉に机上に出させ、電源を切らせてかばん等にしまわせる。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

38

共通テストで不正行為が発生したことを受けて、当センターは本年6月10日に「大学入学共通テストにおける電子機器類を使用した不正行為の防止策について」を公表しました。基本的な考え方として、大多数の者は誠実に受験しており、過度な負担を強いることのない対策であること、大学や試験監督者の負担を過度に増やさないことなどを掲げて、これに沿った対策を講じるということにいたしました。

具体的には、大学に対して不正行為事例等の情報提供、試験時間中に写真照合や巡視を

行っていただく際に確認すべきポイントなどを記したマニュアルの提供、それから今年から監督者の指示で一斉に机の上にスマートフォンを出させて、スマートフォンの電源を切らせる、かばん等にしまわせるという変更、受験者への注意喚起というのを行うことにいたしました。受験者への注意喚起として、受験番号票にも不正行為に関する心得を記載する、不正行為を行った場合の不利益等について記載するというにいたしました。

大学入学共通テストにおける電子機器類を使用した不正行為の防止策について

令和4年6月10日 大学入試センター

2 受験者への注意喚起

- 不正行為に関する注意事項、不正行為を行った場合の不利益について、「受験案内」や「受験上の注意」でより注意を引くように記載する。
- 受験番号票※に新たに記載する。

(原寸 100mm × 100mm)

受験番号	1001A
1 携帯電話などの取扱い ① 携帯電話、スマートフォン、音楽プレーヤーなどの音の出る機器を全て机の口に出す。 ② アラームを解除してから電源を切る。 ③ 電源を切った後、袋に付けずにかばんなどにしまう。 ④ 時計のアラーム、時刻、目覚まし音の設定を解除する。	
2 机の上に置けるもの ○受験票、○写真票、○黒鉛筆、鉛筆キップ、○メモ用のシャープペンシル、○プラスチック製の消しゴム、○鉛筆削り、○時計、○腕時計、○ハンカチ、○計算機、○ティッシュペーパー(袋から取り出したもの) これら以外は、かばんなどにしまいなさい。	

※試験室で机の上に貼付されるシール

- 新たにリーフレット等を作成し、全受験者に周知を図るとともに、高等学校等に活用を促す。

不正行為に関する
注意事項や
不正行為を行った
場合の不利益等を
新たに記載予定。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

39

大学入学共通テストにおける電子機器類を使用した不正行為の防止策について

令和4年6月10日 大学入試センター

3 技術的対応

- スマートフォンなどの電子機器類から発信される電波を妨害する装置や発信源を特定する装置等について、技術的な観点から有効な手段として検討したが、様々な問題があることから、今後、技術の進展に応じて改めて検討する。

4 不正行為をした場合の取扱い

- 不正行為の抑止のため、不正行為に対する取扱いの強化について検討したが、教育的配慮の観点を踏まえ、現行どおり、不正行為を行った場合は全ての教科・科目の成績を無効とする。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

40

技術的な対応につきましては、今後の技術の進展に応じて改めて検討するというに

たしまして、不正行為を行った受験者についてはすべての教科・科目の成績・得点を無効にするという対応を堅持することにいたしました。

受験案内

(3) 不正行為

① 次のことをすると不正行為となります。不正行為を行った場合は、その場で受験の中止と退室を指示され、それ以後の受験はできなくなります。また、受験した大学入学共通テストの全ての教科・科目の成績を無効とします。なお、不正行為については、状況により警察へ被害届を提出するなどの対応をとる場合があります。

ア 志願票、受験票・写真票、解答用紙へ故意に虚偽の記入（受験票・写真票に本人以外の写真を貼ることや解答用紙に本人以外の氏名・受験番号を記入するなど。）をすること。

イ **カンニング**（試験の教科・科目に関するメモやコピーなどを机上等に置いたり見たりすること、教科書、参考書、辞書等の書籍類の内容を見たり、他の受験者の答案等を見たり、他の人から答えを教わることなど。）をすること。

ウ 他の受験者に答えを教えたりカンニングの手助けをすること。

エ 配付された問題冊子を、その試験時間が終了する前に試験室から持ち出すこと。

オ 解答用紙を試験室から持ち出すこと。

カ 「解答はじめ。」の指示の前に、問題冊子を開いたり解答を始めること。

キ 試験時間中に、定規（定規の機能を備えた鉛筆等を含む。）、コンパス、電卓、そろばん、グラフ用紙等の補助具を使用すること。

ク 試験時間中に、携帯電話、スマートフォン、ウェアラブル端末、タブレット端末、電子辞書、ICレコーダー、イヤホン、音楽プレーヤー等の電子機器類（※注）を使用すること。

※ イヤホンについては、耳に装着していれば使用してはなりません。（試験時間中、病氣・後傷や障害等により補聴器等を使用したい場合は、受験上の配慮申請（→p.15）が必要です。）

ケ 「解答やめ。鉛筆や消しゴムを置いて問題冊子を閉じてください。」の指示に従わず、鉛筆や消しゴムを持っていたり解答を続けること。

② 上記①以外にも、次のことをすると不正行為となることがあります。指示等に従わず、不正行為と認定された場合の取扱いは、①と同様です。

ア 試験時間中に、定規（定規の機能を備えた鉛筆等を含む。）、コンパス、電卓、そろばん、グラフ用紙等の補助具や携帯電話、スマートフォン、ウェアラブル端末、タブレット端末、電子辞書、ICレコーダー、イヤホン、音楽プレーヤー等の電子機器類（※注）、教科書、参考書、辞書等の書籍類をかばん等にしまわず、身に付けていたり手に持っていること。

イ 試験時間中に携帯電話や時計等の音（着信・アラーム・振動音など。）を長時間鳴らすなど、試験の進行に影響を与えること。

ウ 監督者の指示に従わず、ICプレーヤーを操作したり、ICプレーヤーの不具合について虚偽の申出をすること。

エ ICプレーヤー、イヤホン及び音声メモリーを試験室から持ち出すこと。

オ 試験に関することについて、自身や他の受験者が有利になるような虚偽の申出をすること。

カ 試験場において他の受験者の迷惑となる行為をすること。

キ 試験場において監督者等の指示に従わないこと。

ク その他、試験の公平性を損なうおそれのある行為をすること。

（注） リスニングの試験時間に配付するICプレーヤー、イヤホン及び音声メモリーは除く。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

41

本年9月に配布しております受験案内においても、不正行為に関する記述を増やすとともに、警察へ被害届を提出する可能性についても明記しております。詳しくは受験案内をご覧ください。

まず、西郡先生にお伺いしたいと思っているのですが、試験における不正行為の考え方に関して、詳しくお話をお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

西郡：

私なりに不正行為が行われる際にこういった背景で行われるのかということのを少し整理したものがこちらになります。

まず1つ目に、立場や置かれている状況という観点から見たときに、2つここでは挙げていますけれども、不正行為によって失うものよりも得られるものが大きいであるとか、組織的な不正行為、プロの仕業というようなところで、こういったところが1つ考えられるであろうと思います。2つ目は不正行為に関する技術的な革新ということで、発見が困難なカンニング技術であるとか、見つかっても言い逃れができる技術があげられます。今回の不正行為につきましてもスマートフォン等を使って、以前ではできなかったような方法で不正行為が行われたというところがあるのではないかと思います。

不正行為を行う背景として考えられること

【立場や置かれている状況】

- 不正行為によって失うものよりも得られるものが大きい。
- 組織的不正行為（プロの仕業）

【不正行為の技術革新】

- 発見が困難なカンニング技術がある。
- 見つかったと言い逃れができる技術がある。

【赤信号みんなで渡れば怖くない】

- 自分ひとりではないという感覚（他にもやっている人がいる状況）

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

また、最後の部分は心理的なところになると思われかもしれませんが、赤信号みんなで渡れば怖くないということで、自分1人ではないという感覚、他の人も実はやっているのではないのかというような、そういった感覚が不正行為というものに至らせるという背景も考えられるのではないかと考えています。

不正防止策に何を取り入れられるか

【万引き防止対策より】

- 売場の視認性の確保
- 店舗内全体の視認性の確保
- 商品の整理、点検を行う
- 防犯ミラーの設置
- 万引き防止用機器（EAS）の設置
- 防犯表示による注意喚起
- 従業員の声かけによるアピール
- 店内放送を利用した声かけ
- 従業員、警備員による店内巡回

【入試における場面】

- 試験室の選択、設営（配席等）
- 監督者の立ち位置や配置（人数）
- 持ち物チェック、受験生のチェック
- 監視カメラの設置？
- 不正防止機器類の導入？
- 張り紙、受験案内による注意喚起
- 不審な受験生への声かけ？
- 監督者から注意事項の徹底
- 監督者の机間巡視強化

入試にあまり相応しくないもの・新たなコストが生じるものがある

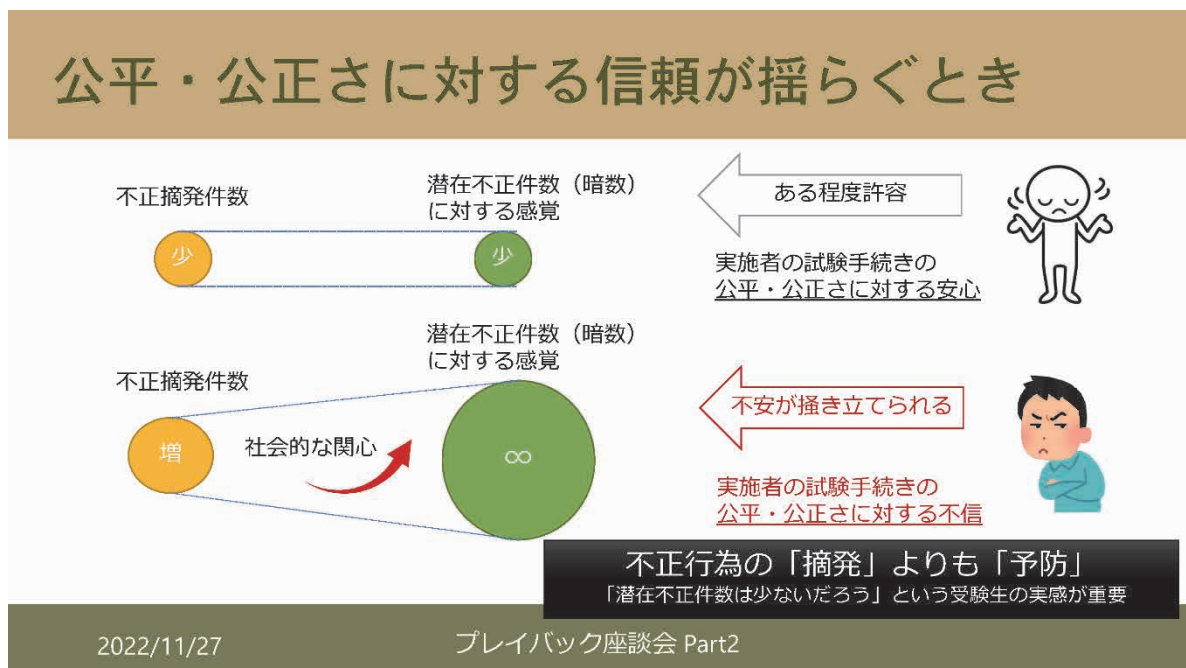
【参考】福岡県万引防止連絡協議会 (<http://www.fukuoka-manbou.com/taisaku/index.html>)

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

また、こういった不正行為に関して、他の文脈での不正行為防止を例に考えてみたいと思ひ、万引き防止の対策から入試に取り入れることができるものがあるかということを少

し見てみました。左側が万引き防止策の対策として挙げられていたものです。売場の視認性の確保は、試験室の選択とか設営に関するものでしょうし、店舗内全体の視認性の確保は監督者の立ち位置とか配置などに関わってくると思います。防犯ミラーの設置に関しては、ひょっとすると試験室でも監視カメラの設置が該当するかもしれません。万引き防止機器、EASと呼ばれるものだと思いますけれども、こういったものも不正防止機器類の新たな導入に関するものかもしれません。従業員の声かけによるアピールについては、不審な受験生への声かけなどが対応します。このように考えてみると、入試の場面にはあまりふさわしくないものもあつたりしますし、新たな仕組みを入れて不正防止というものに取り組みうとすると、また大きなコストが生じてくるというところもあると思いました。どこまでこの不正防止というものを念頭に置いて対策を取っていくのかということ是非常に難しい問題だと思っています。



そうした中で、公平・公正さというところから見たときに、不正行為の案件をどのように捉えられるのかというところを整理してみました。少し強い言葉になりますが、上のように不正摘発件数（不正行為を見つけて、それを公にする件数）が少なければ、恐らく受験生もその関係者も含めて潜在的にある不正件数（暗数）はそれほど大きくないだろうと認識されるのではないかと思います。試験の手続きの公平・公正さに対する安心はある程度確保されていて、不正行為が摘発されたとしても、ある程度許容されてきたのではないかなと思うところです。

一方で、不正摘発件数が増えていく（どんどん不正行為が見つけれられて公になっていく）と、もちろん今回のように社会的な関心は非常に高まります。そうすると、ひょっとすると見つかっていない不正件数というのも本当は多いのではないかという感覚がどんどん大きくなっていきます。これは受験生にとって大きな不安の喚起につながっていくということになるのではないかということです。試験の手続きに対する公平・公正さに対する不信がどんどん大きくなっていくのではないのかと考えられるわけです。

そう考えると、不正行為の摘発というのはもちろん大事なことなのですが、見つけて公にするというよりも、やはりまず考えるべきことは予防である、というところをどうしっかりと確保していくのかという点が必要だと思います。また潜在的な不正件数というのは少ないだろうという受験生の実感を、どれだけしっかりと維持していくのかという点に配慮して不正行為に関して考えていくべきなのではないかと思っています。

寺尾：

どうもありがとうございます。

次に、東北大学の倉元先生にお話を伺いたいと思いますが、不正行為というトピックについて、試験に関して日本と類似した文化を持つアジア圏である中国や韓国との比較から、日本の入試における不正行為の位置づけというのを教えていただきたいと思うのですが、倉元先生、いかがでしょうか。

倉元：

日本における不正行為の位置づけに関して、まさしく西郡先生の今のお話にありましたように、試験の大事な価値というのは「公平性・公正性」ということになるかと思います。この点に関しても、「東北大学大学入試研究シリーズ」で西郡先生がまとめた本がありますので、参考にさせていただければと思います。

この国際的な動向に関していうと、原点に持っていきたいと感じているのは、昨年、大学入試センターが主催をされたシンポジウムです。諸外国のコロナ対策ということで、アメリカ、イギリス、フィンランド、韓国、日本でどのように対応したのかということと比較するという機会がありました。その中で浮かび上がってきたのは、制度そのものが全然違うということもあるのですが、韓国や日本というのは本当に受験生がそれまで準備してきたことをそのまま実施するという非常に注力していました。それに対して、欧米

各国というのは割と大胆に選抜方法を変更している（ルールを変えている）ということがありました。そこに登場してこなかった中国だとか、韓国だとか日本というのは、ある意味、共通の文化を持っています。それは試験に基づく選抜という制度に信頼を置いていることもあります。さらに、受験生一人一人が準備をしてきて試験に臨むことに関して非常に神経を配って、その環境を整えるというところがあるかと思います。

ただ、不正行為に関していうと、実は、日本は中国や韓国と比べるとかなり違った考え方になっています。というのは、中国、韓国ではやはり大きな不正事件が起こったこともあって、今、極めて厳しい不正行為防止のテクニカルな措置が取られていることが分かっています。これらの国に対して、日本は確かに緩いです。もし、日本が中国や韓国のようにテクニカルに防止するという方向に行くとすると、実は関係してくるのが実施の部分だけではないことに気づきます。例えば、作題に携わる関係者は、日本ではふだんと同じように普通に日常生活を送っています。秘密をきちんと守る、意図的に漏えいしたりしないというようなことを前提にした上で、そういう生活が送れるということです。これが韓国の例だと、一定期間缶詰めになって外部との交流を遮断した上で作題に携わるというような制度になってくるわけです。

ですので、この日本の入試のやり方を支えている根本的な価値だとか文化だとかというのは何なのだろう、ということをもう一度考えさせてもらいたい機会にはなったのかなと思います。

実は、私は以前、大学入試センターに勤めていたこともあって、また宣伝になって申し訳ないのですが、「東北大学大学入試研究シリーズ」の第2巻に入試センターの実施の理念と、可能な範囲で実際にこういう形で実施をしているという事実と両方を合わせて書かせていただきました。基本的な考え方というのは、センター試験であっても大学の個別試験であってもそうですけども、とにかく「一人一人の受験生のために」ということを一番大事にしているということです。デリケートな公平性が要求される中で、可能な限り条件を整えようとするのですが、すべての条件を完全にそろえることは不可能なわけです。それを支えているのは、そこに携わる関係者というか、いろんな立場で携わる人たちが真摯にミッションを受け止めて、真面目に業務を遂行していると。そういう前提で成り立っているものですから、セキュリティ的なことをいうと、おそらく悪意でこれを壊そうとする者が現れたら脆弱なのだろうかと思います。

その脆弱性を技術的に埋めていこうとすると、無限のコストがかかってしまいます。そ

のあたりを我々どういうふうに捉えるかということで、先ほどの西郡先生の予防が大事という話につながってくるのではないかなと考える次第です。

寺尾：

どうもありがとうございました。

予防が大事ということであるとか、あるいは費用対効果の観点は総合討論でも扱おうと思っていましたので、重要な論点かなというふうに思います。ありがとうございます。

次に、九州大学の立脇先生にお伺いしたいのですが、この不正行為ということに関して、コロナ禍でオンライン面接や一部筆記試験を行うような入試区分も出てきましたが、オンラインを使うことによる不正行為認定の考え方の変容や、新たな論点があるのではないかなという問題提起をいただきました。九州大学の事例も交えながら少しお願いできますでしょうか。

立脇：

オンライン入試を導入するに当たって、全学で対応に関して検討しました。そのときに1つ問題になったのが不正行為に関することです。共通テストの不正行為は、協力者からの情報提供がきっかけで発覚し、最終的に本人が警察等に名乗り出ましたが、もし本人が否認した場合どうできるかです。さらにはオンラインの場合ですと、面接等の様子をビデオで撮ることができますが、対面の試験と違って現行犯でということがなかなか難しいです。そのときにビデオ映像が証拠として意味があるかどうかというようなことに関して議論を行いました。

その結果、まず募集要項に後から発覚した場合でも合格取消しになる可能性があるということを明記しました。面接を開始する段階でも、同じように不正行為が後から発覚した場合でも合格を取消すことを説明しています。ただ、これらの措置で本当に取り消しているかは、最終的には裁判か何かにならないと分からないと思います。いくらそう言っても、それが本当に有効かどうかというのは分からない状態で実施しています。

現状は合格取消しによって不正を防止しようということではなく、合格取消しの可能性によって受験生が自発的にしないようにしていると思います。その点で先ほど西郡先生から不正行為によるデメリット・メリットの話が出てきましたけれど、一生で1回しか入試を受けられなければ不正行為のデメリットは非常に大きいです。しかし、日本の大学入試は以前と大きく

変わって受験機会が複数化されています。さらに、共通テストの不正行為は現役の大学生が行っており、デメリットが通常の受験生に比べて少ないです。合格を目指さない人とか合格以外に利益がある人にとって、現在の不正行為対策のやり方でどこまで有効かというのは、入試関係者は多分ヒヤヒヤしながらやっているというのが実情だと思います。

寺尾：

どうもありがとうございます。

このように第3部では、人が介在する禍としまして刺傷事件と不正行為を取り上げました。日本の入試は公平で公正だということが大事であるということはよく言われます。まず国民から、そして受験生から公正・公平と認識してもらえるような入試もまた、紛れもなく人がつくり上げているものであるということ、倉元先生からもご指摘いただきました。予防が大事ということも、不正行為については受験生の心に訴えかけていくような形での対策になっていくというところで、やはり人が大事であるということをご指摘いただいたかなと思います。

これまでたくさんの危機が大学入試を襲ってきたわけですが、多くの関係者が知恵を絞った結果として、今の入試制度を絶妙なバランスの上に成り立たせていたのかなというふうに感想を持った次第です。

総合討論

それぞれの危機対応を位置づけると？

登壇者をお願いしたこと

- コロナ（感染症），自然災害，刺傷事件・犯罪行為，不正行為の4つを座標上に布置する。
- その際，危機対応において重要と考えられる2軸も各登壇者が独自に設定する。
- まだ見ぬ危機についても，可能であれば布置を試みる。

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

寺尾：

それでは、これより総合討論の時間に入りたいと思います。

総合討論を進めるに当たって、登壇者の先生方には事前に宿題をお願いしました。それは、新型コロナウイルスを含む感染症、地震・津波・火山の噴火・雪なども含めた自然災害、刺傷事件やその他の犯罪行為、不正行為、これら4つの危機を2次元の座標上に位置づけて布置していただくというものでした。その際、危機対応において重要と思われる2軸そのものも先生方にそれぞれ独自に考えていただくこととしました。その2軸上に4つの危機を布置していただいたということです。

ここからは総合討論ということで、これまでそれぞれの危機について理解を深めてきましたけれども、登壇者の先生方にこの軸についての説明をお伺いしながら、より危機を統合するような形で大局的に考えてみたいと思います。

まず倉元先生からお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いたします。

それぞれの危機対応を位置づけると？

倉元 直樹



2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

倉元：

なかなか難しい宿題を出されました。ただ、この図は、一瞬の間に「もうこれしかないかな」と考えついたものです。実は、私は、前提として大学入試共通テストをイメージして作っています。それは、個別学力検査やその他の入試に関していうと、この図式の中のある部分で収まるかなというふうに考えているからです。まず、左右の軸ですけども、これは影響の範囲の話です。軸名が「ローカル／グローバル」となっていますが、それでいいのかどうかよく分からないのですが、左側は受験生個人です。それから試験室、すなわち、受験生が集まっている1つの部屋、さらに、試験場という単位があって、右端はすべての試験場です。日本中の試験場というようなイメージです。縦軸は、事前準備をできることから現場でその場で対応しなきゃいけないこと、ということで考えました。

災害ということからはちょっとはみ出すような中身もあるのですが、要は、お仕着せのというか、事前に皆同じような形で準備したもので対応できるかどうかというようなことで考えると、例えば、個別の事情があって特別な対応をしなきゃいけない「合理的配慮」なども含めて考えています。

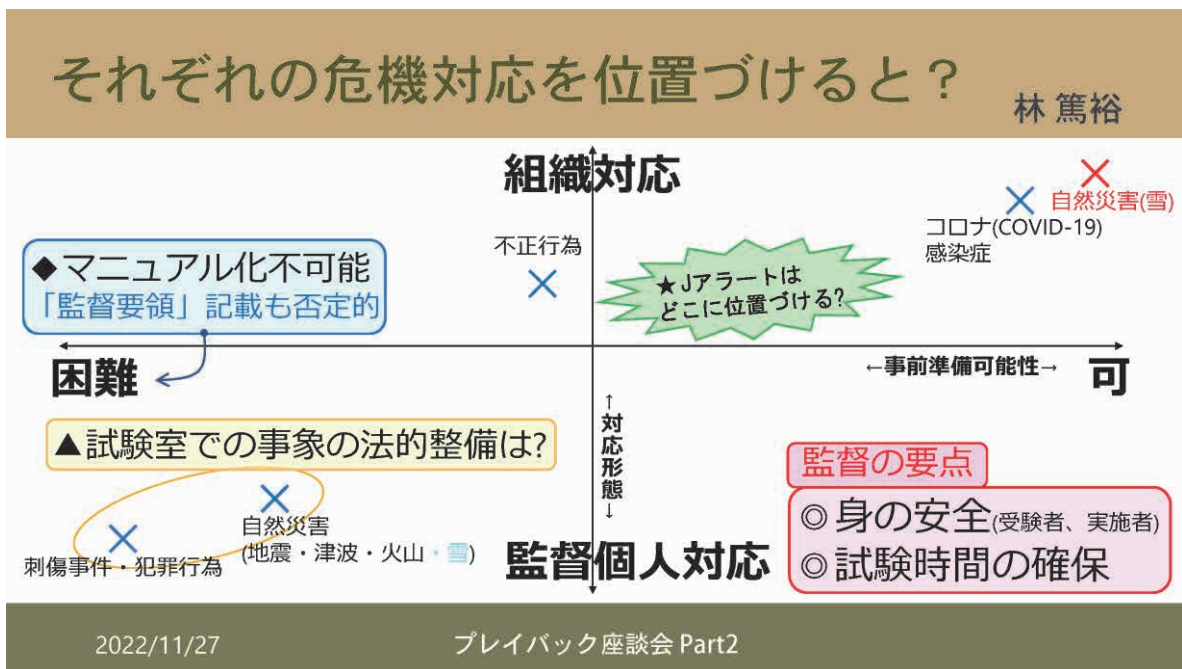
実際、最終的にはその場その場で実施本部の人が判断したり、監督者が判断したりということが多いのでしょうけれども、大学入試センターが共通テスト用に作っている分厚いマニュアルは、今までの事例集のようになっているところがあります。それを参照すれば何とか対応できるようになっている、というところが素晴らしいと思っています。ですか

ら、個別の試験でトラブルになったときに「センターではどうなっている？」というフレーズは、大学の中でよく交わされる会話です。

右下の部分というのは、できれば、後で議論したいと思うのですが、「非常に多くの人たちに関わる内容でありながら、現場で対応しなければいけない」という事例は、これは思いつかない。それは、今までいろいろご意見はあると思うのですが、40年以上ですか、積み重ねてきた共通一次から始まる大学入試センターのノウハウのおかげで、我々はぜひぶん助けられているのだなというふうに思っている次第です。

寺尾：

ありがとうございます。続いて林先生、お願いいたします。



林：

図を見ていただければと思いますが、まずこの図を考えるのは結構大変でございました。いろいろここにもメモはあるのですが、最終的にはこの2軸にしたということでございます。最初に、左右方向であります、右側に書いてある事前準備の可能性について、事前準備ができるものとできないものがあるだろうということを考えました。もう一つは上下方向です。対応を組織（大学など）としてするのか、監督者個人が対応せざるを得ないものかというふうな形の2軸を考えました。

まず、横軸に関しての左端にあるマニュアルに記載するかどうか、という観点ですが、

事前準備ができないということになると、先ほどの不正行為や刺傷事件への対応をマニュアルに書くかという、これ結構マニュアル自体が既に分厚いわけですから、それをさらに分厚くするというのはあまり得策ではないなという気はしたということでもあります。今回与えられた4つの事象を当てはめてみますと、右上から、今皆さんも対応されているコロナについては比較的事前準備も可能だし、組織的にも対応できるだろうと思いました。それから、左のほうにいきまして、不正行為に関してもある程度事前準備はできていますけども、目の前で起こっていることをどうするかというのは、やはり監督者などと相談をしながら対応しなければいけないということで、真ん中の上あたりかなと考えました。そして左下でございしますが、自然災害と刺傷事件については、これは本部に報告をされてから対応ということは非常に難しく、監督個人がどういうふうにするかということで対応していただくしか方法がないだろうという気がしています。

そこで今回、この図を作るに当たって自分としても分からなかったのが、黄色の部分に書いてございしますが、試験室における監督者と受験者の関係ですよね。たまたま割り当てられた部屋で両者が出会い、そこで自然災害等が起こったときに、法的にはどういうふうな取扱いになるのだろうというのがちょっと不思議に感じました。

それで自然災害の中にも横に4つ、地震、津波、火山、雪と書いてありますが、雪に関してのみは右端の上、先ほど石井先生もおっしゃっていましたが、雪をかくとか坂をきれいにするというようなこと、これは事前にできるだろうということで、雪だけは右方向に一応持ってまいりました。この後の質問の中にも出ているようですけども、Jアラートというのが最近注目を浴びてきて、自分としてもJアラートはどこに位置づけるのだろうというのはまだ明確にはなっていないのですが、それも考えるフェーズに入ってきてしまっているのかなという気がしています。

こうした危機が起こる前までは、試験監督の先生方とにかく「試験時間の確保」をお願いしておりましたが、「身の安全の確保」も大事だという認識を持ったという次第です。

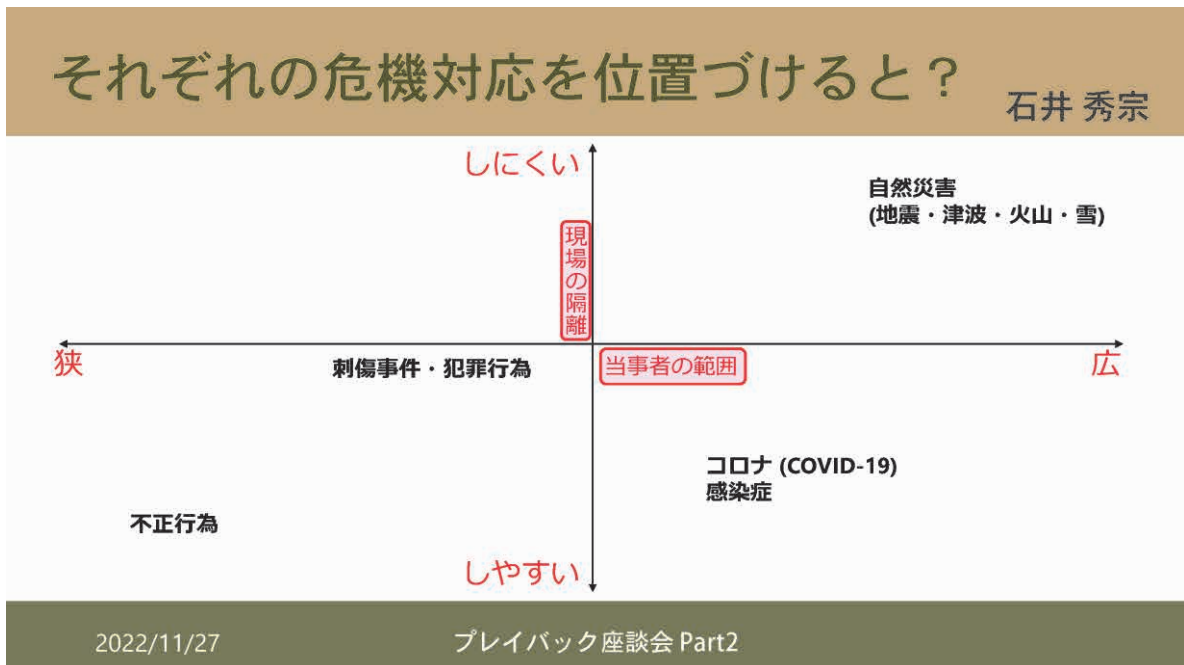
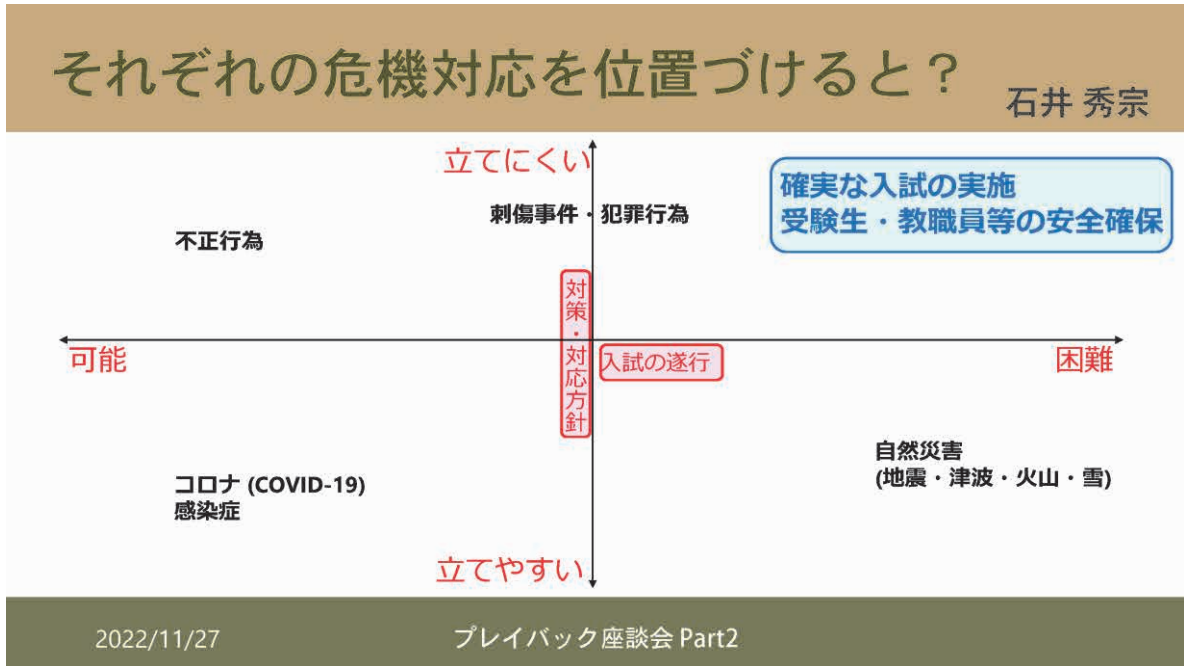
寺尾：

ありがとうございます。それでは石井先生、お願いいたします。

石井：

こちらは私が準備したスライドになります。先ほども申し上げたのですが、確実に入試

を遂行することが大事であるということですね。受験生はもちろんですが、教職員の安全を確保することも考えてやっていく、これを軸に考えました。そうすると、2軸でと言われていましたが、ちょっと2軸に収められず、2つのスライドになっています。



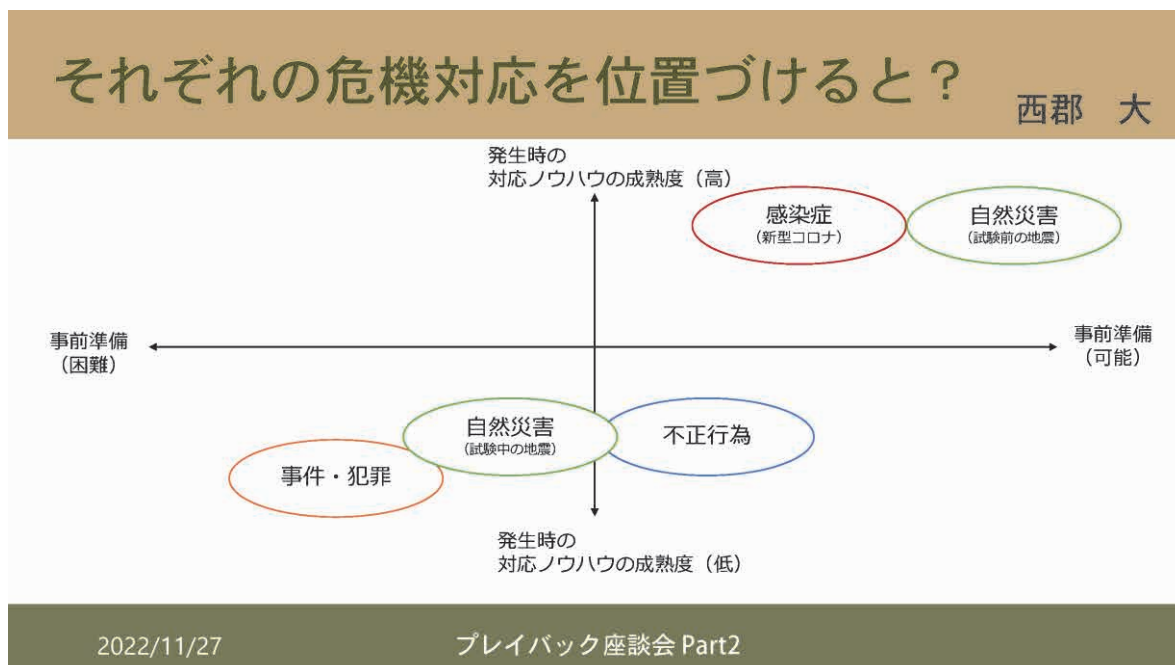
まず入試が遂行できるかどうかで考えると、それが困難と言ってもやらなくては行けないわけですが、しかし、そうはいつでも地震等、大きな災害のときには実際東北ではできな

かったこともあるので、それがまず1つあると考えられます。そして、対策です。他の先生方のスライドでも出てきていましたが、事前の対策を立てやすいもの、立てにくいものがあると思います。コロナに関しては、初年度は本当に手探りでしたが、2年目となると、ノウハウもだんだんできてきて、対策は立てやすくなったと思っています。不正行為とか事件はある程度の予防はできますが、万全な対策を立てられるかという難しい場合もあると考えられます。

あとは、実際それがどのぐらいの範囲に及ぶのかということです。当事者の範囲としてコロナ、感染者という点では狭い範囲かもしれませんが、対策という点では広い範囲になります。自然災害はもっと広い範囲になります。不正行為については、対策を立てるのは非常に大変ですが、範囲という点では個別になりますので狭い範囲になります。そして、その現場をどれくらい隔離しやすいか、しにくいかで考えると、不正行為なんかは発見すること自体も難しいかもしれませんが、特定されれば、この場所であったということは特定しやすい。どのぐらいの範囲に及ぶかで見えていくことも可能ではないかということです。

寺尾：

ありがとうございます。それでは西郡先生、お願いいたします。



西郡：

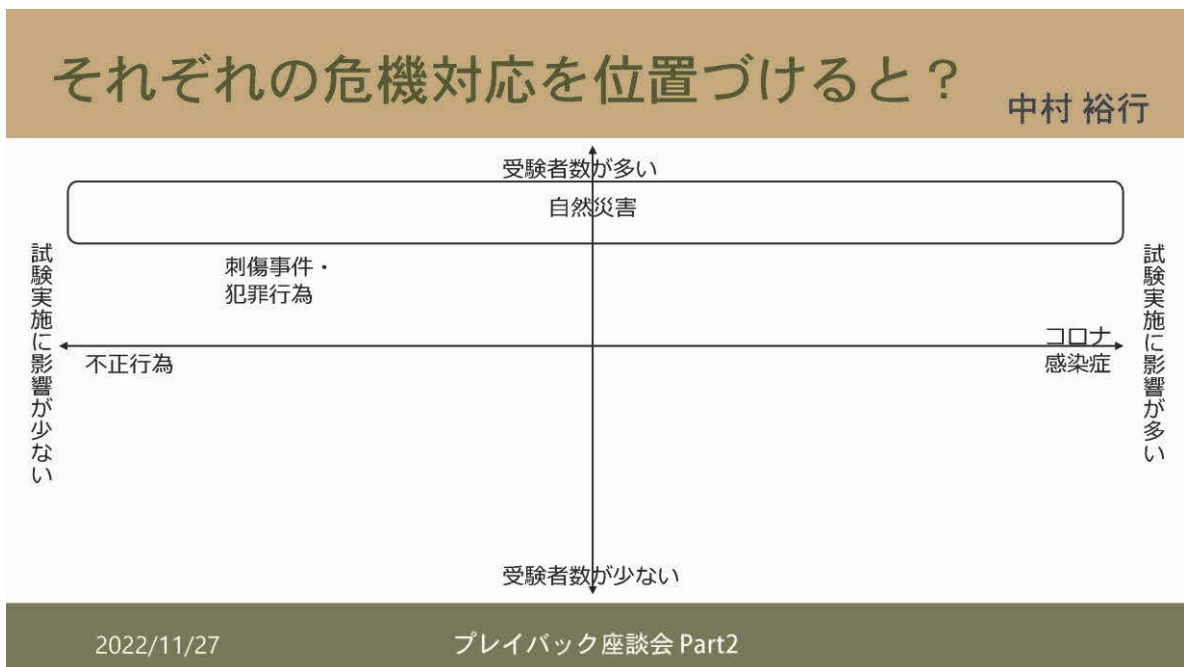
私も事前準備の軸が1つあります。それが困難であるか可能であるかということです。

そしてもう一つの軸は発生時の対応ノウハウの成熟度というところを縦軸に入れております。

感染症、新型コロナにつきましては、おそらくこれが初年度であれば上のほうにはいかなかったのですが、2年目、3年目となるにつれて、ある程度の対応のスキルが成熟したのかなと思っております。一方、自然災害ですけれども、これは地震に注目しているのですが、試験前に起こったケースと試験実施中に起こったケースでは、これは対応のノウハウの成熟度も違ってくるのかなというふうに考えているところです。また、不正行為につきましては、ある程度事前準備というのは可能だとは思いますが、先ほど申しましたように、どこまでコストをかけて事前準備をするのかということも関係してきますので、真ん中ぐらいに置いているところです。

寺尾：

ありがとうございます。それでは中村先生、お願いいたします。



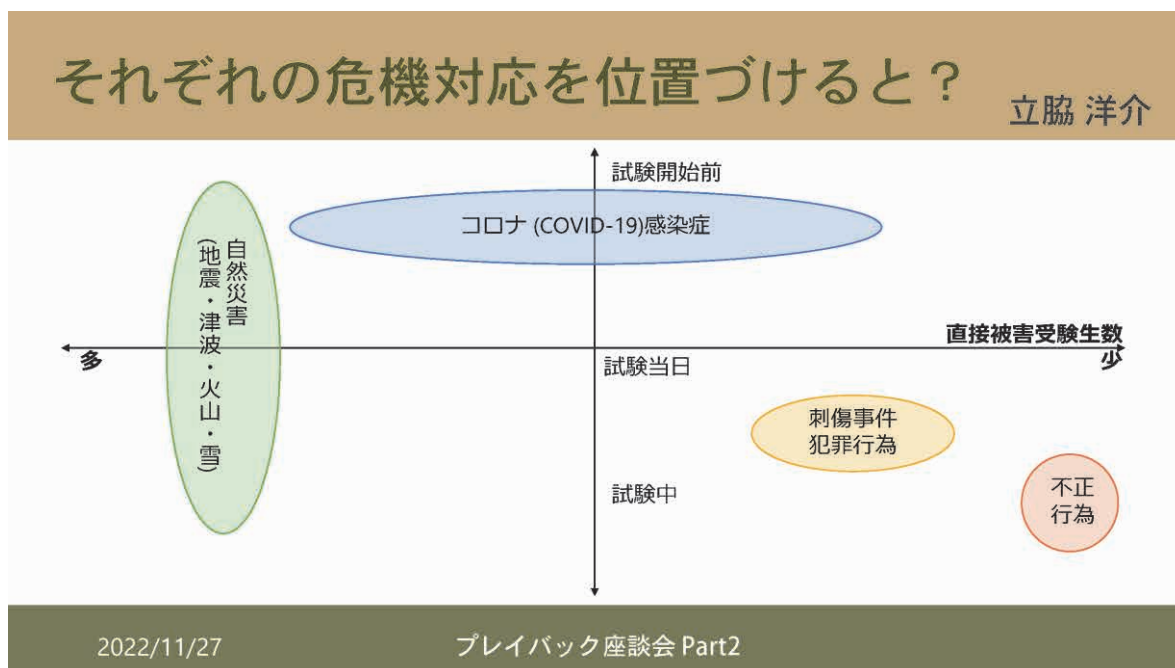
中村：

私は個別大学の現場ではどう捉えるかという視点で考えました。横軸には試験実施に影響が多い・少ない、縦軸には受験者数が多い・少ないということで考えました。自然災害は他の先生方も言われているように、自然災害によって試験実施に影響が多い場合と少ない場合と両方が考えられるので、災害の種類によって変わってくるというふうなことがあ

と思います。また、刺傷事件とか犯罪行為については、昨年起きたように実際当該試験を行っている試験場ではない場所で起き、また受験者に被害がないというような場合には、可能な限り試験実施に影響がないように試験を行う必要があるため、影響が少ないほうに位置づけました。不正行為については受験生数にかかわらず影響が少ないと判断しました。やはりコロナ等の感染症による試験実施の影響というのは、実際に複数年実施して対応してみているのですが、非常に大きい影響があるというふうに思います。ただ、実際対応がいろいろできてきているとは思いますが、影響は大きいかなと思います。

寺尾：

ありがとうございます。立脇先生、お願いいたします。



立脇：

軸自体は既に他の先生方がお話しされているのと重複していますが、縦軸は試験開始前から試験当日、試験中という時間軸で、横軸は直接的被害を受ける受験者数が多いか少ないかということで整理をしております。

左上の試験開始前で受験者数が多いものの場合、事前にこういうふうにするということを発表し、それに基づいて試験を実施していくというように、かなり大幅に手を入れることになります。それに対して、右下の試験中で直接被害の受験生が少ないものの場合、当日の対応となりますので、かなり個別で現場に任せた対応になるため、大きな方針だけ事前に決めること

になります。コロナ感染症に関して、令和3年度の入試のときに一番難しかったのは、どれぐらいコロナ感染者がいるのか予想ができなかったことです。大規模なものとして対応をつくったら、結果的に少なかったため、ここでは受験者数を広めにしております。

それぞれの危機対応を位置づけると？

軸のまとめ

※ 分類・着色は寺尾によるもの。類似していると思われる軸を類似色で分類。

倉元先生	グローバル・ローカル (全国・試験場・試験室・受験生個人)	事前準備・現場対応			
林先生	事前準備可能性	対応形態 (集団・個人)			
石井先生	入試の遂行の困難度	対策・対応方針の立てやすさ	当事者の範囲	現場の隔離	
西郡先生	事前準備 (可能・困難)	発生時の対応ノウハウの成熟度			
中村先生	受験者数	試験実施への影響の大きさ			
立脇先生	直接被害受験生数 (少・多)	試験開始前・試験当日・試験中			

2022/11/27

プレイバック座談会 Part2

56

寺尾：

ありがとうございます。

ここまで6名の先生方の軸を見てきましたけれども、私のほうで先生方の軸のまとめを1枚にしてみました。私のほうで分類・着色を行ってみました。

倉元先生のグローバル／ローカルは当事者の範囲の大きさというところで、もしかしたら緑で着色すべきところだったのかもしれませんが、林先生の対応形態という、組織で対応するのか、個人で対応するのかというところも関わってくると思ひまして、同じ色で着色いたしました。

ここからは総合討論という形で、危機と危機との間を大局的に眺めながら大学入試はどう考えたらいいかということを考えていきたいと思ひます。まず私自身は、事前準備可能性という軸が結構大事な軸かなと思ひます。

コロナに関しては西郡先生のスライドにもあったとおり、3年目の貫禄というところで対応ノウハウの成熟度も高くなっていましたけれども、やはり1年目の2020年では予見できないというところで混乱があったかと思ひます。西郡先生、時系列的な変化、対応ノウハウの成熟度についての時系列的な変化について、ご意見をお伺いできますでしょうか。

西郡：

初年度は我々もどのように対応しているのかが分かりませんでしたので、やはり大学入試センターがどのような形で対応するのか、その方針をかなり参考にして個別試験に生かしたところです。

初年度は試験監督をする先生たちも本当に試験監督をして大丈夫なのかなどのご不安もあり、そういったところも含めてどう対応していけばいいのかというところはかなり手探りの状況でした。3年目になりますと試験監督をする先生方も我々実施する側も、こういったケースが起こればこう対応すればいいというところはかなり形ができていましたので、そういったところでこの3年間で大きく変化があったと思います。

寺尾：

ありがとうございます。

事前準備困難なものというところも結構悩ましいところかと思うのですが、石井先生にお伺いしたいのは、防犯指導内容として、刺股（さすまた）を確認してくださいなど警察署から求められたことがあったと思います。昨年限定の対応と考えるか、今年以降、こういうことが起こった場合に今後の準備にも含み込む事項として追加されていくのかというところはどちらになるとお考えでしょうか。

石井：

例年そういったものは準備をし、確認はしていますので、そういった点では再確認をした形になるかと思います。前もって、不審者等が現れるというような予想を立てて、対策をしているので、それは今後もそういったことをやる、特に事件が起きた場合には、再点検をする形になるかと思っています。

寺尾：

ありがとうございます。

個人的にもうひとつ大事な軸だと思うのは、倉元先生が挙げてくださったグローバル／ローカルという全国レベルで対応を考えなきゃいけないことと、試験室単位、個人単位で

考えなきゃいけないところという視点です。林先生も対応形態というところで組織対応とするのか、監督者個人の対応とするのかというところを挙げておられました。やはり大学入試センターというところに身を置きますと、中央の役割もとても意識しますし、現場で何を考えなきゃいけないかということも踏まえた方針決定も大事な視点かなと思いました。順に倉元先生と林先生にお話をお伺いしたいのですが、倉元先生、いかがでしょうか。

倉元：

私の捉え方は寺尾先生が投げかけた枠にうまくはまっていなかったかな、という反省があります。というのは、基本的に入試の対応は「危機対応の連続」です。小さな、危機とは言えないかもしれないけど、アクシデントが必ず起こります。それを連続的に何とか対応していくことの中の延長線上に、世の中の方々が関心を引かれるような今回取り上げられたようなトピックもあるというふうに思います。

1つはやはり対応可能性ということでは、今まで経験があるものというのは、それに対する対応のノウハウも積み上がっているというところがあります。それを越えたものははっきり言うとどうしようもないです。だから、そこで大事になってくるのが原則です。一番のプライオリティは、何度も出ていますけれども、身体・生命の安全です。それを越えるものはないのだけれど、次は受験生一人一人にとって自分に対して不公平がないような形での実施が原則として課されます。だから、マニュアルがなくなったときに何を大事にするかというところなので、それを個別の対応になってきたときに一人一人の実施関係者、特に試験監督までどうやって徹底させられるのかというのが課題だと思いますし、大事なところだし、そこは大学に任されているところなのかなと思います。

ただ、今までの経験に関しての対応指針というのは、改めて考えてみたところで、やはり、大学入試センターで行われてきた試験の積み上げはすごく大きな財産になっているかなというふうに思っている次第です。

寺尾：

ありがとうございます。林先生、いかがでしょうか。

林：

どういうふうに考えればいいのかというのがあって、当然目の前で刺傷事件が起きてい

るときに、本部に起きていますけどというふうな連絡を取られて、じゃ、それは止めてくださいなどという指示をしている時間はないわけで、やはり人道的に対応しないといけないことが起こるといえることが、この1年間ぐらいで私は再認識をしたということです。

ちょっと古くなりますけれども、以前、地歴と公民の問題冊子が別のパックになっている状態で配ったことがありました。そのときに片方の冊子の分しか配っていなかったという事例があったわけです。もちろん配り間違えたというのは非常に大きいわけですが、監督者のト書きには2つの冊子が目の前にありますかということを問うて、受験者のほうからは両方ありますよというふうにご確認いただいた後に試験を実施していたと思っています。しかしあの事件以降、つまり監督者は受験生に問いを投げかけても、その答えがすべて正しいということにはならないのだと痛感しました。つまり今までは監督者と受験者が両方でセットでより公平な環境というのを構成していたのですが、もちろん受験者は非常に緊張した環境にございますので、彼らに必ず正しい答えが返ってくるということを期待してはいけないのかもしれませんが。しかし監督者側だけですべてをきちんと包括して運営をしないといけないという時代に入ってしまったということが、今回の刺傷事件もしくは自然災害も含めて監督者側に非常に重い責任を負わされたということなのだと感じ、私の場合は、横軸の左のほうに持っていったということでございます。

寺尾：

ありがとうございます。

次に、当事者の範囲という軸がありました。私のまとめでいうと緑で着色していた、当事者の範囲、あるいは直接被害受験者数という軸です。中村先生も受験者数については、影響範囲ということだと思のですが、中村先生と立脇先生にお伺いしたいのは、影響範囲の広さというのをどう考えるかということです。その影響範囲、人数ということもありますし、中村先生の場合は総合型選抜とか学校推薦型選抜で、選抜日程や方法も考えなければいけない、当日も配慮しなければいけないということで、気を配らなければいけない側面が各所にあるという意味でも実施への影響が多いという意味なのかなと思ったのですが、まず中村先生からお話をお伺いできますか。

中村：

単純に受験者数が多ければ、当然その影響が大きいということももちろんありますけれ

ども、おっしゃったように1名でも影響が出るのであれば、やっぱり試験実施には運営上困難なことが予想されます。事前の段階から当日、一番大きいのは当日ですけれども、このところは実際には影響の範囲というのはかなり多方面に及ぶのかなと思います。

先ほど来ちょっとお話が出ている、例えばどうやって受験生に周知するかというところも多分影響が出てくるのかなというふうに思います。実際たまたま本学はそういったところが今のところ起きていないのですが、やはりマニュアルというかそういったことをきちんと整備していかないといけないとは実感しています。

寺尾：

ありがとうございます。立脇先生も直接被害受験者の多い・少ないという軸を掲げられていますけれども、これについて数というところもそうですし、気を配るべき事項という意味でもいかがでしょうか。

立脇：

被害受験者が多い場合、極端なことを言えば、全員の日程を大幅にずらすとか、あとは半分の当該受験者を同じ入試の仕方でやって、その中で合否判定をするということが可能になります。それに対して受験者数が少ない場合は1人2人のために全体の日程を遅らすということは無理ですので、その受験生だけ特別な対応を取って不利益が起こらないようにするというふうに、人数によってやり方が違うかなと思います。ですので、人数をある程度予測しながら対応を決めていくということが必要になるかと思います。

寺尾：

ありがとうございます。

座談会の本体のところでも話題に上がっていたのは費用対効果の問題でした。その費用対効果そのものは不正行為のところでももちろん問題になるでしょうし、コロナの対応でも受験者数が少ないパターンなのにもかかわらず、大学としては対応を考えなきゃいけないという費用対効果もあると思います。費用対効果に関して何か先生方、ご意見お持ちの方いらっしゃいますでしょうか。やはり費用に対しててきめんの効果が出ればいいわけですけれども、費用のほうが大きくなってしまいうことでしたら、不正にしても……はい、倉元先生、お願いします。

倉元：

費用対効果という話ですけども、ここ2～3年のコロナ対策は、はっきり言えば、費用を度外視して対応してきました。緊急事態という認識でやっているということは理解していただきたいです。ですから、コロナ対応を恒常化するという発想は本当にやめてほしい。ただ、我々実施側としては、可能な限りすべての受験生に可能な限り公平な条件を提供したいということはありますが、完全に徹底ということ、1人残らずみたいな表現で言われると、すべてが壊れてしまう。それだけの体制はないし、多分、どれだけ費用をかけても無理だと思うのです。限界がどこなのかというところは、ある程度ご理解をいただきたいなと思うところではあるわけです。

具体的な話になってくると、またいろいろありますので、ここで議論する内容ではないと思いますけども、全体としてはそういうところがあると思います。

寺尾：

ありがとうございます。

やはり非常事態における対応というのは費用度外視ということで、効果を最大化したがあまりに費用が大きくなってしまっているということだと思います。

倉元：

それは、逆に言うと、世界的にそうだというわけではないのです。日本はそういうふうに対応しているということを特に一般の方に理解してほしいなと思います。

寺尾：

ありがとうございます。

総合討論の最後のトピックとしてお願いしたいのは、やはり試験中に予期せぬことが起こったというときです。Jアラートあるいは緊急地震速報は音で最初に試験場に鳴動するわけです。試験中、地震が起こった場合、リスニングの時間も音には最大限配慮をするわけですけども、立脇先生の軸の中で試験実施前、当日、試験中というのがありました。また、西郡先生のところで試験中の地震と試験前の地震と区別して分類いただきました。立脇先生と西郡先生にお伺いしたいのは、試験中の音の鳴動、あるいは危機というところ

をもう少しどう考えたらいいかご意見お伺いしてもよろしいでしょうか。

立脇：

これに関しては多分、各大学で対応等を決めていると思います。特にJアラート等に関しては、この1年で現実的なものと認識されたので、対応をしていく必要があります。

ただそのときに、あってはいけないのは、部屋によって対応が異なることです。そのため、各大学で方針を決め、同じやり方でやっていく必要があります。

寺尾：

ありがとうございます。西郡先生、いかがでしょうか。

西郡：

極めて難しい判断になると思います。やはり試験中に受験生の携帯が全部鳴動し始めたとなると、その際にどういった判断をするのかという切り分けをルール化するというのは、今この段階ではかなり難しいのかなと。ただ、やっぱり目指すところは今、立脇先生が言われたように、それぞれのところで違った判断が生じないように、どういうふうに工夫すればいいのかということのをこれから考えていかなければいけないと。その際、倉元先生も言われていましたけど、一番重要なのは何か起こった際に受験生の生命であるとか、試験監督の生命であるとか、そういったところをどう考えていくのかということが論点の一つかなと思います。

寺尾：

ありがとうございます。

コロナ、自然災害、あるいは刺傷事件、通底して生命や身体の危機というところと入試が少し近接したような事案だったというふうに思います。そこにおいては、試験をやるというところにも増して、身体の安全、生命の安全の確保というところがもちろん大事な観点になってくるということは浮き彫りになったかなと思います。ありがとうございます。

ライブQ&Aセッション

寺尾：

視聴者の方からご質問、ご感想等をAhaSlidesのほうにいただいておりますので、こちら読み上げさせていただきたいと思います。

たくさんの方からご質問いただきました。どうもありがとうございます。ご質問、「いいね」がたくさんついているものから順番にご回答申し上げたいと思います。石井先生にお尋ねします。第1部で令和3年度より令和4年度のほうが監督数を減らせた、監督を減らせたというお話があったと思いますが、どの部分で人数を絞ることができたのか、差し支えなければ教えてくださいとのことです。

石井：

ご質問ありがとうございます。

試験室に入る監督者、これは減らせませんので、いわゆる本監督、ここは従前のままです。減らせたのは、予備監督及び待機です。予備監督は大学に来ていただいて、何かあったときに予備で入っていただく監督です。令和3年度入試の場合には、学内のいくつかの試験場で、予備監督をそれぞれ何名としたのですが、そこを融通し合いました。試験場が複数あったときに、こっちでは足りない、ではあっちの試験場の予備監督をこっちにという具合にし、ちょっと予備監督を減らすことができました。それに連動しまして、待機の先生の数も試験場ごとではなく大学全体で整えました。令和3年度はどの程度になるか予想がつかなかったもので、かなり多くの先生に待機いただいたのですが、令和3年度の試験をやってみて、令和4年度はそこまでの人数はなくてもいけるだろうという判断で、試験場間で融通し合い減らした次第です。

寺尾：

ありがとうございます。続いてのご質問です。

これまでの全国の大学の危機対応事例集のようなものがあれば、実施本部必携として共有していただきたいと思いましたというご感想をいただいております。それが共通テスト

やセンター試験においては監督要領だという考え方だと思うのですが、これについて何かコメントおありの先生方、いらっしゃいますか。林先生、お願いします。

林：

これは皆さん望まれていると思うのですが、ないのだろうなというふうにしか、少なくとも私個人は把握をしておりませんし、ないのではないかなと。皆さんで作らましよう、ここで呼びかけたら何か力が出るならばありがたいです。

寺尾：

ありがとうございます。倉元先生、お願いいたします。

倉元：

通常の入試でも危機の連続だという発想からいうと、私が実施本部に行ったときにまず何をするかということがあります。「Q&A」というリストが大学入試センターから配られます。これを眺めます。これは、毎年同じものもあるのですが、それに新しい内容が付け加わっていくのです。現状、そういう経験の積み重ねがある程度各大学に配られていると思います。その中に、例えば、大きな危機のときにどうするか、といった内容を加えていただくということが一番現実的かなと思ったりします。ただ、大きなアクシデントというのは、起こる頻度は少ないですね。そのことは念頭に置いておいたほうがいいかなと思います。

寺尾：

ありがとうございます。続いてのご質問です。

緊急時には人道的対応とのこと、ごもっともだと思います。一方で、共通テストでは監督者は問題があればすべて本部からの指示で動くということ、さらには対応不明な点はセンターに問い合わせることになっていると思います。この境界の判断、問題の境界の判断は難しいと思いますが、一般常識的な対応をすればよいということですねという、ご質問プラスご感想でしょうか。基本的には共通テストのときには問い合わせさせていただくと思うのですが、現場で判断しなければいけないことももちろんあるということですが、これに関してはいかがでしょうか。中村先生、お願いします。

中村：

現場で判断というか、先ほど来、倉元先生もおっしゃっていますけども、入試センターからいただく監督要領、そういった実施要領などに既にいろいろなものが書かれています。そこに書かれているものについては、それを読んで大学で判断するということがあって、それを超えるものについては、センターに問合せをするというふうな切り分けができるのかなと思います。

寺尾：

倉元先生、お願いします。

倉元：

中村先生の席がお隣だったので、ついでに、と思ひまして。実は、実施本部から指令を出さなきゃいけない相手は監督者ですが、怖いのは気の利く監督者です。つまり、監督者はマニュアルを読んでその通りにやってくればいいのですが、気を利かせて自分のアレンジをしてしまうというのが、かえって一番怖いのです。だから、それをどうコントロールするかという課題が実施本部側にはあります。逆に言うと、意外とアクシデントの判断って、結構、決まった形があるので、実施本部レベルだと割とそんなに悩むことはないです。

寺尾：

ありがとうございます。続いてのご質問です。

先ほども論点に上がりましたけれども、Jアラートが上がった場合の対策などはどうなっているのでしょうかと。個人的にはJアラートが鳴って、鳴っただけで終わったという場合もあるでしょうし、本当にミサイルが飛んでくるという場合もあると思いますが、これに関してはいかがでしょうか。難しい質問だと思いますが、林先生、お願いいたします。

林：

私も先ほどの2つの軸の図に緑の色で書かせていただきましたけども、本当に困ったなというのが正直なところですよ。今、寺尾先生おっしゃったように、本当に警戒だけで済む

のか、実際に物理的に物が落ちてくるのかというのは当然、試験室にいる者にはまったく分からないわけです。ただやはり身に危険が迫っているということをアラートで示してくださっているのに、それを無視して続けろとは当然それは言えないだろうと思います。私もそう書きましたけども、中止をしてでも身の安全、ということとしか言いようがないです。事前に、Jアラートが鳴動する可能性があるのだということを監督者にお伝えはしておいたほうが多少は心構えになるのかな、と思います。ただ、本当にそれが役に立つのかと言われると、私も全く心もとないです。非常に困った世の中になったなという感想です。

寺尾：

ありがとうございます。

英語リスニングのときは音が鳴った場合には、試験監督者の指示がない限りは試験を続けなさいという指示だと思うのですが、このJアラート、試験監督者が判断できないものが生じるということだと思います。そこのあたりは結構難しい、今後検討すべき論点のかなというふうに思っています。ありがとうございます。

続いてのご質問です。

林先生にお尋ねします。同じ日の追試験の権利の話ですけれども、前期と後期で得てしまった人がいたとのことですが、もし仮にその人が前期の追試験で不合格だったので、日付は違うけれど後期の追試験を受けさせてほしいと言ってきた場合は、どうしていたか。追試験の日は3月22日で固定、1つの日しかありませんので、どちらかしか受けられないと思いますが、仮にもし前期の追試験と後期の追試験があったらどういう対応になっていたかと、これも差し支えない範囲でお願いできますでしょうか。

林：

先ほどもコメントの中で申し上げましたが、基本的には国大協のほうで3月22日というふうにしてくださっていますので、そちらにのっっているわけです。今回のご質問のように、不合格だったからということになるわけですけど、これは私の意見であって大学の意見ではございませんが、現状では申し訳ないが、それはできないということでご了承いただきたいということを説明するしかないだろうなという気がしています。というのは、3月22日としていること自体がもうぎりぎりなのです。合格者の確定期日というのが決ま

っております。不合格になる通知が出て、それを受けて今度次の大学に対してリクエストを出すとなると、多分4月に入るのではないかと。入らないとしても非常にぎりぎりだということからすると、個別の大学でそれに対応するということは難しいと感じるのが事実です。実際起こったときのことについては、今後は検討の余地があると思いますが、現状では、申し訳ありませんということだと思います。

寺尾：

ありがとうございます。

1月の岸田首相の受験機会の確保というところでも、4月にまたがってもいいからというような話もありましたけれども、やはり年度で区切って3月31日までに決着をつけなければいけないということはあると思います。林先生、お願いします。

林：

確かにその通りで、大学ごとに対応を変えるということになると、やはり問題があるだろうと思います。国大協などで再度ご検討いただいて、こういう事例の場合には、国大協としてこういう対応にしましょうという指針を出していただかないと難しいと思います。現状ではそこまで織り込んだ指針にはなっていません。4月に入るまでに合格者確定その他をうたっているわけですから、緊急事態だということも含めて、その辺は軽々には出せないだろうという気がしております。

寺尾：

ありがとうございます。西郡先生宛ての質問が来ています。

西郡先生だけでなく他の先生でも構いませんが、例えば不正行為の防止策を講じています。ただし対策上、その内容には公表できないものもありますとアナウンスするのは予防策にはならないでしょうかという、ご質問をいただいています。いかがでしょうか。

西郡：

かなり具体的な対策を打ち出し過ぎると、その対策を見て、また新たな不正行為というものにつながるかもしれませんので、あまり具体的なものは出せない場合もあるかもしれません。ただ漠然と「対策しています」と言うだけだと、それもなかなか予防策にはつな

がらないのかなと。やはり出し方によるのかなと思います。

寺尾：

どうもありがとうございます。

予防のつもりでいろんな策を講じて公表することが予防にならなくなってしまうということもあり得るのでしょうか。

西郡：

そうです。あまり具体的にやれば、またそれに応じた不正というのも出てくるでしょうから、そういった意味では、どういった出し方をするのかというところは工夫が必要なのかなというふうに思います。

寺尾：

どうもありがとうございます。

時間も迫ってまいりましたので、あと1つ2つお伺いしたいと思いますけれども、コロナ対策では費用面を度外視しているという倉元先生のお話があったと思いますけれども、コロナの流行はまだ収束のめどがつかっていない。そのような状況の中、今後数年間でどのように費用対効果に折り合いをつけていくのかというご質問が来ています。差し支えない範囲でということですが、倉元先生、いかがでしょうか。

倉元：

受験生が当日にいろいろなアクシデントで受験を迎えられないという現象は、本当はコロナだけではないのです。それに対してどう対応するのかということはコロナ以前で、まづ固まっていたやり方があるわけです。ですから、今やっている対応はどこかで終了しなきゃいけないと思っています。特に、先ほどから話題に出ている追試験、大学入試共通テストは追試験を毎年やっていますけれども、個別試験に関してはないのですよね。個別試験の追試験は、はっきり言えば、とにかく止めていただきたいということは国立大学協会にもお願いをしているところです。

先ほども申し上げたように、できるだけすべての受験生に対応したいのですが限界がある。今は、その限界を超えて対応しているのは事実なのです。私が考える一番の負担は、

個別試験の追試験のところでは、そこが非常に重たい負担になってしまっている、過重なミッションになってしまっているというふうに思います。

寺尾：

どうもありがとうございます。

まだまだご質問いただいているところですが、お約束の時間が迫ってまいりました。もう既に過ぎておりますので、結びに入りたいと思います。どうもありがとうございました。

最後にアンケートに関するお願いです。このウェビナーを退出されますと自動的にアンケートに遷移します。また、配付させていただきました資料のURLからもアンケートに接続できますので、ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

これでプレイバック座談会Part2を結びにさせていただきたいと思います。長時間にわたりましてご視聴くださり、どうもありがとうございました。

資料編

シンポジウムのアンケート結果と実施運営のバックヤード

独立行政法人 大学入試センター 研究開発部 寺尾尚大
独立行政法人 大学入試センター 研究開発部 内田照久
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 宮本友弘
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 久保沙織

1 参加申込に関わる事項

1.1 参加申込期間 2022年10月20日(木)～11月20日(日)

1.2 参加申込者数 計164名(登壇者を除く)

1.3 参加申込者内訳

1.3.1 ご所属機関

	人数	割合
国立大学	50	30.5%
公立大学	20	12.2%
私立大学	36	22.0%
高等学校・教育委員会	17	10.4%
教育産業	13	7.9%
その他	28	17.1%

1.3.2 職種

	人数	割合
教員・研究者	73	44.5%
事務職員・会社員	75	45.7%
その他	17	9.8%

1.4 当日の参加者数 60～102名(時間によって変動あり)

2 シンポジウムの広報方法と実施日

- 2022年10月20日(申込締切1か月前)
 - 大学入試センターのウェブサイトでのお知らせ
 - 大学入試センターの公式のTwitterアカウントでのお知らせ(第1回)
 - 大学入学共通テスト利用大学へのメールでのお知らせ
 - 日本行動計量学会の会員向けメーリングリストでのお知らせ
- 2022年10月21日
 - 日本テスト学会の会員向けメーリングリストでのお知らせ
- 2022年11月14日
 - 大学入試センターの公式のTwitterアカウントでのお知らせ(第2回)
- 2022年11月18日

▶ 大学入試センターの公式の Twitter アカウントでのお知らせ（第 3 回）

3 シンポジウム申込時のアンケートの結果

3.1 2021 年に開催された「プレイバック座談会 大学入試におけるコロナ対策：令和 3 年度入試の舞台裏」をご覧になったことはありますか？（任意）

	人数	割合
当日のリアルタイム配信で視聴した	47	29.9%
入研協の見逃し配信期間に視聴した	13	8.3%
当日のリアルタイム配信・入研協での見逃し配信 ともに視聴した	2	1.3%
視聴していない	95	60.5%

4 シンポジウムの事後アンケートの結果

4.1 ご所属

	人数	割合
国立大学	19	38.0%
公立大学	6	12.0%
私立大学	12	24.0%
高等学校・教育委員会	6	12.0%
教育産業	5	10.0%
その他	2	4.0%

4.2 座談会本体（前半）について

4.2.1 座談会本体（前半）の内容はいかがでしたか。

	人数	割合
よかった	45	90.0%
どちらともいえない	5	10.0%
改善が必要	0	0.0%

4.2.2 座談会本体（前半）の内容をそのように判断された理由について、具体的に教えてください。（自由記述）

【「よかった」と回答された方のご意見】

- 他大学の状況が分かった。（国立大学）
- 新型コロナへの対応を冷静に振り返れた。（国立大学）
- これまでの個々の対応が聞いて参考になった。（国立大学）
- COVID-19 対応を一般的な危機対応に落とし込む視点が感じられたから。（国立大学）

- 各大学の立場から振り返りを行うことで、今後の対応に有効と考える。(国立大学)
- パネリストが入試の中心にいる方で、話が具体的だったから。(国立大学)
- 日頃から予想している困難について、共有することが出来ました。(国立大学)
- 様々な危機のテーマごとに、今年起きた事象と各大学の対応が明確に説明され、わかりやすかったため。(国立大学)
- DNC だけではなく各大学での取り組みについて、時系列順にわかりやすく概観できたため。限られた時間のなかで入試がらみの「事実」を伝えるのは難しいと思いますが、いつもわかりやすくお示しいただいていて、感心いたします。(国立大学)
- 危機について整理され、各大学の対応を知ることができたから。(国立大学)
- 令和4年度選抜および過去の危機についてご丁寧なまとめや事例を示してくださったため。(国立大学)
- 各大学の具体的な対応事例を伺うことができ、大変参考になりました。(国立大学)
- 各大学の様子(課題と対処)について参考になりました。(国立大学)
- 一過性のものと考えがちだが、振り返り記憶を新たにすることに意味がある。(国立大学)
- 各具体事例での話であったため、情報として今後の参考になりました。(公立大学)
- 本学は芸術大学のため、国公立の芸術大学とは情報交換を行うことはありますが、なかなかお電話等もできない他の大学さんの対応を知ることができ、とても勉強になりました。(公立大学)
- 昨年度の様々な事例を概観することができたため。(公立大学)
- 各大学の対応について非常に丁寧に説明されていたから。(公立大学)
- 予想していない危機について知ることができた。(公立大学)
- 実体験に基づくお話が参考になりました。(私立大学)
- 論点が整理されていた。(私立大学)
- これまでの概況が理解できたから。(私立大学)
- 複数大学のご意見をお聞きすることができた。(私立大学)
- 参加大学さんの具体的な対応や準備が参考になったため。(私立大学)
- 昨年度入試の振り返りができた事、そしてそこで発生した非常事態にどのように対策や検討がなされたのか、先生方の生の声を聴くことができ、意義が大きいと感じたため。(私立大学)
- 3つのテーマに分けて、状況を整理しながら説明頂いたので、よく理解できたから。(私立大学)
- 大学サイドの苦勞の一端を見ることができました。(高等学校・教育委員会)
- 特に各大学個別入試が通常実施できない場合の対応とその判断のポイントについて整理できたと思います。(高等学校・教育委員会)
- 具体的な事象に対する対策の概要が納得できた。(高等学校・教育委員会)
- 各大学の具体的な対応策が知れて興味深かった。(高等学校・教育委員会)

- 話が大変整理されていてわかりやすかった。(教育産業)
- 現場の先生方の生の意見を聞けるのがとても勉強になります。(教育産業)
- 大学入試の周辺において次々と新しい事象が起こってきた中で、どのように対応がなされてきたかを俯瞰的に捉えるよい機会でした。(その他)
- 各セクションのテーマが明確で、各大学の報告情報が整理されていたため。(その他)

【「どちらともいえない」と回答された方のご意見】

- 特に目新しい情報を得られなかったこと。(国立大学)
- 視聴できなかつたため(国立大学)
- 事例紹介に尽きていて、何が問題なのかよくわからなかった。(私立大学)
- これまでの危機対応の体験の報告が中心でしたので、事前にまとめていただいたほうがよかったかと思えます。(私立大学)

4.2.3 座談会（前半）の時間はいかがでしたか。

カテゴリ	人数	割合
短すぎた	2	4.1%
ちょうどよい	45	91.8%
長すぎた	2	4.1%

4.3 総合討論について

4.3.1 総合討論の内容はいかがでしたか。

カテゴリ	人数	割合
よかった	39	79.6%
どちらともいえない	9	18.4%
改善が必要	1	2.0%

4.3.2 総合討論の内容をそのように判断された理由について、具体的に教えてください。(自由記述)

【「よかった」と回答された方のご意見】

- 色々なアクシデントに対する対応の考え方が参考になった。(国立大学)
- 討論形式のシンポジウムはあまり多くはないが非常に参考になった。(国立大学)
- パネリストが入試の中心にいる方で、話が具体的だったから。ただし、軸の意味がよくわからなかった。(国立大学)
- 共有できたことは嬉しかったですが、同時に解決等が難しいように思いましたし、そうだろうと考えたからです。(国立大学)
- 公平性を保った形で入試を行うことの難しさが浮き彫りになり、マクロな点から細か

い点に至るまで、非常に考えさせられる内容であったため。(国立大学)

- 2軸で位置付けることにより、問題の性質が理解しやすかった。(国立大学)
- 各先生方の図をもとに、さまざまな種類の危機対応の位置づけや予防の可能性について考えることができたため。(国立大学)
- 「それぞれの危機対応を位置づけると」という先生方のスライドが勉強になりました。危機対応に際し、様々な観点があるのだなという気づきと、それらを整理しておくことの必要性を感じました。自分なりに取り組んでみたいのですが、「それぞれの危機対応を位置づけると」のスライドは資料として配付いただくのは難しいでしょうか。ぜひご一考いただければ幸いです。(国立大学)
- 現メンバーでもじゅうぶんですが、事務方(入試課長)などの意見もあれば更に充実したのではと感じました。(国立大学)
- 大きな総合大学では、単科大学では予想していないような事案があり、それに対する対応策をどのようにされているかを知ることができた。(公立大学)
- ポイントを絞った、討論の進行であったため。(公立大学)
- 各先生の入試上の危機管理へのスタンスのようなものを知ることができたため。(公立大学)
- 危機対応について、お聞きすることができた。(私立大学)
- 各大学の先生方が、どのように考えを整理されているかが分かり、有意義であったため。(私立大学)
- それぞれの危機を2次元で表現する、という先生方の考え方に感銘を受けました。(私立大学)
- 前半の内容のさらに深い理解に繋がったから。(私立大学)
- 試験時の不測の事態への対応について、気が回る監督者ほど危うさを孕んでいるという主旨の発言は大いに納得できた。(高等学校・教育委員会)
- コロナ対応、とりわけ追試については常態化できない、してほしくないということとその背景が確認されたため。(高等学校・教育委員会)
- 2軸チャートとご説明で、それぞれの先生方が捉えられている危機対応についてお聞きできたことが良かったし、その内容は普遍的な物事の捉え方に通ずるところがあるとも感じた。(高等学校・教育委員会)
- 割と本音が出ていたように感じられました。(高等学校・教育委員会)
- 先生方の考える2軸を聞くことで、共通して入試における重要項目を再認識できました。(教育産業)
- 二次元の作り方を各自に委ねて、それぞれの経験や知見を踏まえた表現をしてもらった点は面白い工夫でした。(その他)

【「どちらともいえない」と回答された方のご意見】

- 立場上答えられない事項が多いと思うが、結局大学独自で対応が求められていると感

じた。(国立大学)

- 登壇者間における討議をもっと見たかった。(国立大学)
- 前半の設定以上に深まったようにはかんじられなかった。(私立大学)
- 難しいテーマだったとは思いますが。想定される新たな危機（例えばJアラートなど）について、課題として浮き彫りになったことは良いと思いますが、もう少し突っ込んだ討論になるとよかったのではないかと思います。(私立大学)
- 現在自分が入試実施に直接係る立場にないから。(私立大学)
- 途中から聞くことができなかつたので。(私立大学)

【改善が必要」と回答された方のご意見】

- 各先生方の表を見ながらお話を聞きたかったと思います。(公立大学)

4.4 ライブ Q&A について

4.4.1 ライブ Q&A はいかがでしたか。

	人数	割合
よかった	25	53.2%
どちらともいえない	17	36.2%
改善が必要	5	10.6%

4.4.2 ライブ Q&A をそのように判断された理由について、具体的に教えてください。(自由記述)

【「よかった」と回答された方のご意見】

- 参加者の質問に丁寧に答えていただきありがたかった。(国立大学)
- 様々な角度から回答が聞けたことは良かったと思います。(国立大学)
- 各先生のお考えがより伝わってきて興味深い内容であったため。(国立大学)
- 質問が聞きたい内容であり、回答も経験に根差した深いものであった。(国立大学)
- 各質問に対して、ご丁寧なご回答をいただいたため。(国立大学)
- 大学の運営側（執行部）でなければかわる機会が少ない「危機管理」をメインテーマに据えられたことは素晴らしいと感じました。とくに最後のまとめが、各先生方にも大変だったかと存じます。有難うございました。(国立大学)
- 初めてアハスライズを使用してみましたが、簡単に使えて他の方の意見も見ることができ良かったです。欲を言えばもう少し質疑応答の時間があればと思いました。(公立大学)
- 追加の情報を得ることができた。一般選抜の追試験をやめてほしいという意見には、大賛成です。(公立大学)
- タイムリーで、興味をひかれる内容であったため。(公立大学)

- いいねの数が表示されたこと、また時系列の質問項目などライブ感があってよかったです。(私立大学)
- 不正抑止に関する費用対効果やその方法の示し方などについての話題が興味深かったです。(高等学校・教育委員会)
- やはりリアルタイムの反応は重要。(高等学校・教育委員会)

【「どちらともいえない」と回答された方のご意見】

- 立場上答えられない事項が多いと思うが、結局大学独自で対応が求められていると感じた。(国立大学)
- 質問がしにくい。(国立大学)
- こちらも難しいと思いました。(国立大学)
- 質問をしなかったから。(私立大学)
- 現在自分が入試実施に直接係る立場にないから (私立大学)
- はっきりとした答えがなかったため。(私立大学)
- 結果論ですが、テーマ・質問の内容からして、ご質問された方と同様に登壇されている先生方も、判断・見解が固まっている訳ではないため、基本的な考え方の共有に留まる以外無いと感じました。(私立大学)
- 聞くことができなかつたため。(私立大学)
- Q&A への入力画面にアクセスできなかつた。(私立大学)
- もう少し時間をとって良かったかと思います。(高等学校・教育委員会)
- Q&A で質問をしなかったから。ただし、聞いているだけでも有意義であった。(高等学校・教育委員会)
- 自分自身が ahaSlides を使ったことがなく、終了間際まで分からなかつた。質問の入力が終わり間際になってしまった。(教育産業)
- 時間がかかり限られていたように感じましたが、今回のテーマ的に深い質問を投げかけることは難しいかと思ったので、結果的にはほどほどの時間配分でよかったのではないかと思います。(その他)

【改善が必要」と回答された方のご意見】

- もう少し時間を長くした方がよかったと思う。(国立大学)
- 活発な意見交換がなされてよかった一方で、時間がもう少しあればなおよかったように思います。入試関係のイベントで、質問が皆無ということはあまりないように思います。(国立大学)
- 参加者からの質問をきっかけに、更なる情報や見識をお伺いすることができて、すばらしい内容でした。可能なら、もう少し時間を長めに取っていただければ嬉しかったという思いがあります。(国立大学)
- やはり同一のプラットフォーム内に Q&A 機能があった方が質問しやすい。(公立大

学)

- 時間が足りなくなったのは残念でした。ここは、できれば寺尾先生にサポート役がついて、Q&A から優先順序を整理して（投票結果によるだけでなく）伝える役割の人がいるとよかったと思います。結構質疑がでましたね。（その他）

4.5 その他、全般的なご意見・ご感想をお寄せください。（自由記述）

- 参考になりました。有難うございます。（国立大学）
- ぜひ来年も続けてほしい。（国立大学）
- あくまでも個人的な意見ですが、公平・公正という点で考えると果たしてコロナや自然災害など本シンポジウムで取り上げた要素だけでは無いような気がします。究極の公平や公正は難しいと思いますが、線を引くことで不公平が生じることもあるのではないのでしょうか。（国立大学）
- このような企画の続編を期待します。新型コロナのことを討論する場合、医者などの専門家もパネリストに加わっていた方がよいと思った。（国立大学）
- 試験実施中のJアラート対応などは、具体的対応をどこかのレベルで決めておく必要性を感じた。（国立大学）
- 貴重な機会に参加させていただきまして誠にありがとうございました。（国立大学）
- この度は、貴重なお話を拝聴する機会を設けていただきありがとうございます。（国立大学）
- 申し訳ないのですが、当日の都合により視聴できませんでした。見逃し配信をしていただくと幸いです。（国立大学）
- いろいろと貴重なお話を伺うことができました。ありがとうございました。以下感想です。やはり各先生のご経験された具体的な事例（どういう事があってどのように判断したのか）をもう少し詳しく伺いたいと感じました。また、リスクの度合い（現実味）は場所によっても異なるので、地域や内容ごとに分科会（事例共有や実務者座談会）をやってもよいのではないかと思いました。（例：北海道・東北：雪、太平洋沿岸：津波、日本海側：Jアラート、大都会：密集・事件、大規模試験場：広域情報伝達の難しさ、小規模試験場：教室確保・人繰りの難しさ、等）・小さい規模の大学では、初任者が他業務と兼務しながら共通テスト業務や個別入試業務をこなしており、短期間での異動があるため学内での危機対応事例・ノウハウの継承も十分とは言えない実情があります。担当者の不安軽減のためにも、危機対応事例集については切に望みます。（公立大学）
- よかったので、同じような企画があれば是非参加したい。（公立大学）
- 私立大学と重なる部分もあり、とても参考になりました。（私立大学）
- 様々な大学での事例に基づきながら今後の方向性を考えることができ、大変勉強になりました。ご発言や運営の先生方、ありがとうございました。（私立大学）
- 危機対応というのは、大なり小なり常に付きまとう、というご発言に対し、もっともだと思いました。（私立大学）

- このような機会は貴重だと思います。これからも折に触れ実施していただけると幸いです。(私立大学)
- コロナ禍の対応は、多くの大学関係者が大変だと思います。少数がコロナ陽性で受験ができない場合、振替や追試験の実施はかなり負担になり、体力的、精神的な負担が多い。受験者は1年限りだが、大学関係者は毎年。そろそろ落ち着いてほしいものです。(私立大学)
- 今後もこのような場を設けていただけることを希望しております。ありがとうございました。(私立大学)
- とても良いお話しをお聞きできて良かったと思います。その上で、阪神淡路大震災では、関西の私立大学の中には、大学の建物が倒壊し当初の日程で入試が出来なかった大学があれば、多くの大学では、郵便局が焼けて願書が焼失したことで、志願者の個人情報試験当日まで分からず、試験当日に、銀行振込の情報をもとに特定し、受験番号を付けて、受験してもらったという事例や、本人死亡により入学検定料を返還したケースなども聞いています。東日本大震災よりも状況が厳しかったようにも思います。大学入試センターや国立大学の先生方からすると大して影響を感じなかったことなのだろうと思います。あまりにもサラッと流されたように思います。(私立大学)
- ありがとうございました。参考になりました。(高等学校・教育委員会)
- 興味深い企画をありがとうございました。入試本番を控えるクラスの生徒に、トラブルがあっても大学さんはきちんと対応してくれる旨、話したいと思います。多少なり不安解消につながると思います。(高等学校・教育委員会)
- 多くの受験生は真摯に受験に取り組んでおり、彼らに過剰な負担をかけないよという点から不正防止についての議論がなされていたのが印象的でした。また、不正による合格取り消し等、受験生(生徒)側に影響の大きい判断は実際には裁判を経なければならなくなるだろうということについても、教育の現場では類似の多くの事柄を抱えており、それらの内実が広く知られるようになると抑止効果も薄れていくことが難しい点だと感じました。(高等学校・教育委員会)
- 各大学や危機管理フォーラムにて、安全・公平な大学入試の実施ために先生方が叡智を集結して策を講じられていることとともに、高校での進路指導の大切さを再認識させていただきました。本日はありがとうございました。(高等学校・教育委員会)
- ahaSlides の使い方も載せておいていただけるとありがたかったです。ただ、とても勉強になりました。本日はありがとうございました。(教育産業)
- 論点が整理されていて、非常にスムーズな進行でした。レジュメの配布や Q&A 受付の手引きなども利用しやすく、ありがたいです。音声トラブルの際は、自分の機器の不具合かと思いましたが、すぐに復旧されたようで何よりでした。(その他)
- 前回同様、周到的な事前準備とカメラワークが見事でした。音声トラブルは大事に至らなくてよかったですね。皆様、本当にご苦労様でした。そしてどうも有難うございました。(その他)

事務局より御礼

この度はご多用の中、シンポジウムの事後アンケートに貴重なご意見をお寄せいただき、どうもありがとうございました。改めて、ご参加いただいたことに御礼申し上げます。

皆様からお寄せいただいたご意見を拝見し、大学入試の実施・運営および危機対応に関する関係者間の情報共有の重要性を再認識しました。また、本研究プロジェクトのメンバーが十分に認識できていなかった課題もご指摘いただいております、このテーマの深さも実感した次第です。

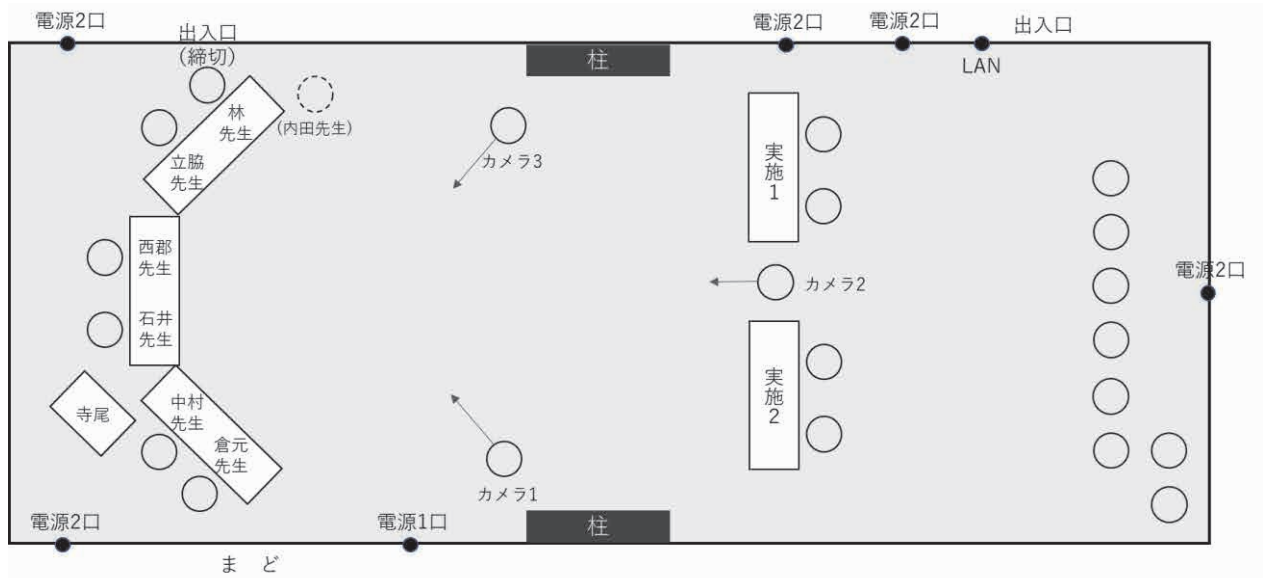
何名かの方から、見逃し配信のご要望をいただきました。誠にありがとうございます。本プロジェクトでは、プレイバック座談会 Part1・Part2 とともに、シンポジウムの動画を YouTube で公開しております。

5 実施運営のバックヤード

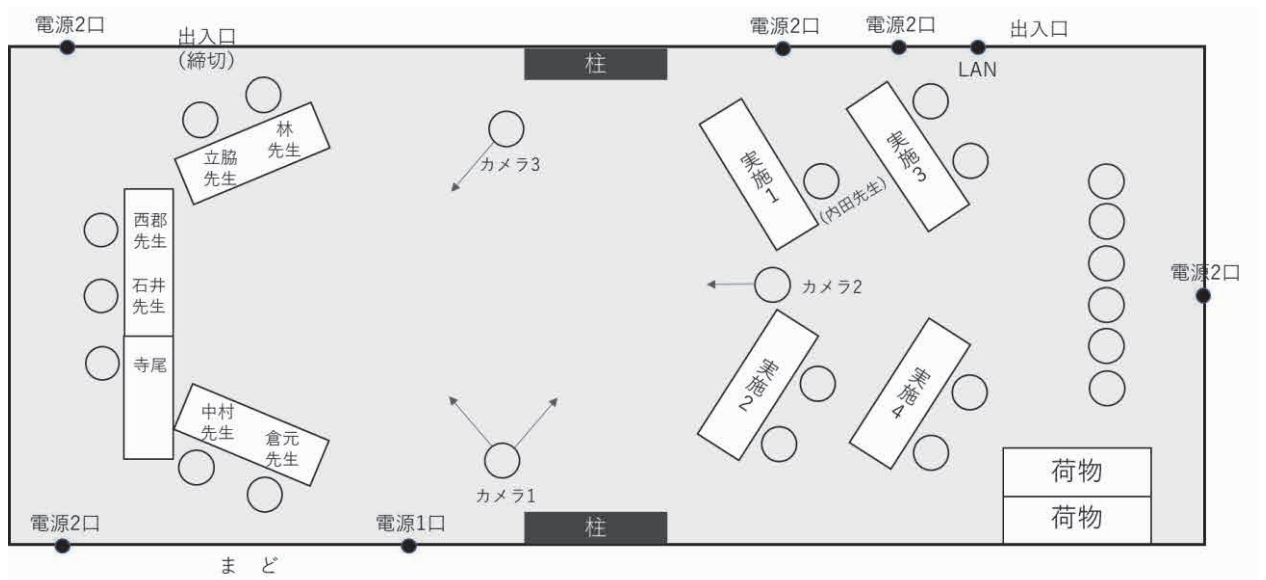
※ ライブ配信は、大学入試センターの建物内の一室で実施した。

5.1 会場レイアウト

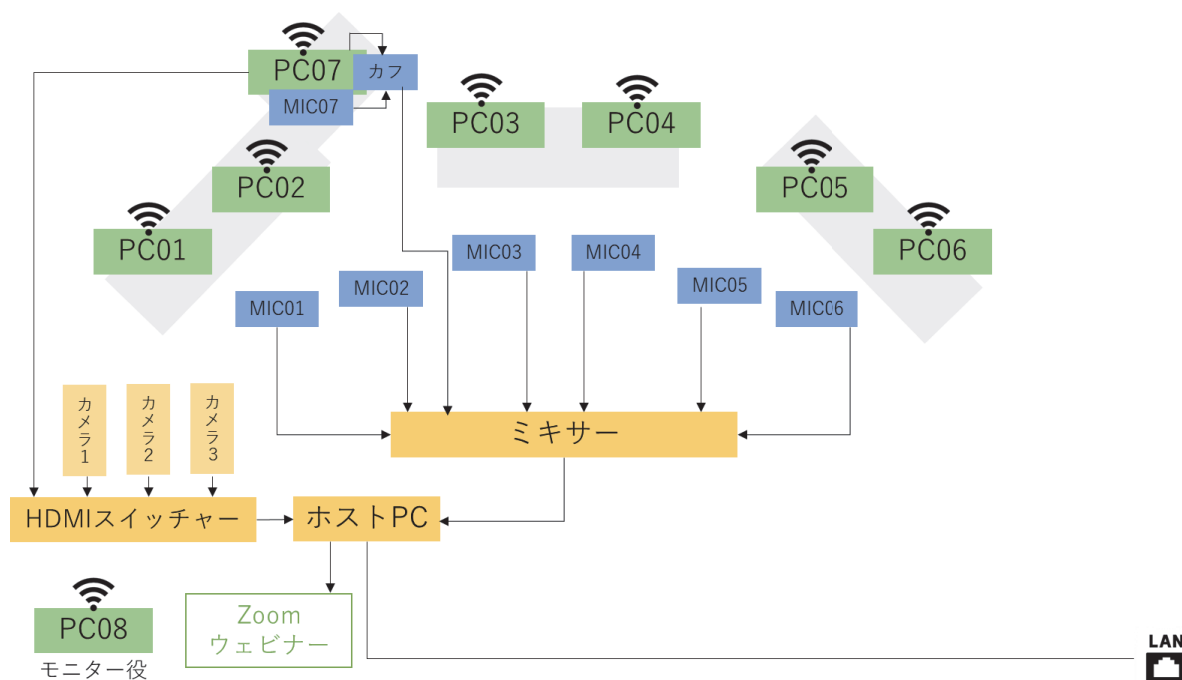
5.1.1 2022年11月15日案



5.1.2 2022年11月25日案



5.2 機器等の接続・配線



5.3 会場設営のスケジュール

- 配信日前々日（2022年11月25日）
 - 机・椅子のセッティング
 - 音響機材の配線・接続確認
 - インターネット接続環境構築
- 配信日前日（2022年11月26日）
 - 映像機材の配線・接続確認
 - 進行およびカメラスイッチングの確認

5.4 当日の役割分担（敬称略）

映像・Zoom ウェビナー管理：

宮本（東北大学）・久保（東北大学）・竹浪（東北大学事務補佐員）

写真撮影：

中村（大学入試センター事務補佐員）

視聴者配信映像のモニタリング：

内田（大学入試センター）・中村（大学入試センター事務補佐員）

Q&A プラットフォーム（AhaSlides）のモニタリング：

橋本（大学入試センター）

【実際の配信会場の様子】



プレイバック座談会 Part2 進行表

2022/11/25 第3稿

当日お話をお願いするとき、次のような表現を含める場合がありますので、ご協力をお願いします。

- ・「簡潔に」…予定の時刻を過ぎておりますので、短くまとめる方向でお話ください。
- ・「詳しく」…予定の時刻よりも早く進行しておりますので、しっかりお話いただいてかまいません。

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
13:00	冒頭の挨拶	寺尾	50 秒	<p>□ 視聴者の皆様、こんにちは。定刻となりましたので、「プレイバック座談会 Part2 大学入試における危機対応：災いと禍を乗り越える」を始めたいと思います。本日の司会を務めさせていただきます、大学入試センター研究開発部の寺尾です。よろしくお願いたします。</p> <p>□ 本日はご多用の中、ご視聴いただき、どうもありがとうございます。昨年 12 月 19 日に開催した「プレイバック座談会 大学入試におけるコロナ対策：令和 3 年度入試の舞台裏」に続く第 2 弾となります。</p> <p>□ はじめに、大学入試センター研究開発部の内田より、趣旨説明をさせていただきます。内田先生よろしくお願いたします。</p>
13:01	趣旨説明	内田	5 分	趣旨説明
13:06	全体説明	寺尾		<p>□ 内田先生、どうもありがとうございました。</p> <p>□ はじめに、本座談会の内容の位置づけについて一言申し上げます。本座談会は、登壇者と大学入試センターの教職員に閉じて実施した「オンライン・フォーラム」の内容を再構成したものです。文部科学省の施策や当センターの試験実施方針に影響を持つものではなかった点、あらかじめご承知おきください。</p> <p>□ また、本座談会は、入試の実施・運営にあたる大学関係者の視点で議論を進めてまいります。コロナ、自然災害、刺傷事件や不正行為を取り扱いますが、実施関係者目線の議論が中心となりますの</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
13:07				<p>で、すべての論点を網羅することが難しいこと、あらかじめご了承ください。トピックによっては、間接的にしか扱えないものもございます。こちらもどうかご理解ください。</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 座談会の中身に入る前に、ご視聴いただくにあたっての確認事項について説明します。 □ 1 つ目は、進め方についてです。本座談会は、司会者と登壇者の短い質疑応答のラリーを重ねる形で進めてまいります。登壇者個別のご発表の時間はございませんので、よろしくお願いたします。 □ 2 つ目は、視聴者の皆様からのご質問についてです。今年は、ご質問・ご感想などを随時、Q&A の形で受け付けたいと思います。こちらのahaSlides（アハスライズ）にアクセスしていただき、登壇者へのご質問・ご感想等を投稿してください。最後の15分程度で、Q&Aにお答えする時間を設けます。ご質問は、匿名でもお名前を出していただく形でも可能です。ZoomのQ&A機能は使いません。 □ 時間の都合上、座談会の内容をさらに深めるご質問やご感想を優先して取り上げさせていただきますので、すべてのご質問にお答えできないこと、あらかじめご了承ください。投稿のルールなどの詳細は、参加者の皆様にお配りした資料をご確認ください。
△13:08	プレイバック座談会のハイライト	寺尾		<ul style="list-style-type: none"> □ まず、昨年プレイバック座談会のおさらいをしたいと思います。3分程度の映像にまとめましたので、こちらをご覧ください。
<p>～スライドに埋め込んだビデオを再生。映像・音声配信されているか確認【3分】</p> <p>登壇者の先生方は、イヤホンをつけてビデオの音声をお聞きください</p>				
△13:11		寺尾		<ul style="list-style-type: none"> □ なお、今年度から佐賀大学の西郡先生にも、研究プロジェクトのメンバーに入っております。 □ 座談会後のアンケートでは、「様々な対応事例の情報共有は非常に重要」「他大学のリアルな情報

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>はなかなか聞くことができない」などのご意見をいただきました。試験実施に関する情報共有の重要性をあらためて認識した次第です。</p> <p>□ また、「コロナ禍を通じて入試制度そのものが抱える課題も顕在化した」「ここからさらに議論が進むことを期待する」など、本座談会の今後の展開を求めるお声も頂戴したところです。</p>
△13:12	プレイバック座談会 Part2 の進め方	寺尾		<p>□ プレイバック座談会 Part2 の進め方は、ご覧いただいている通りです。今回のテーマは「危機対応」であります。前回に引き続いてコロナ対策を取り上げます。加えて、自然災害・刺傷事件や不正行為など、令和4年度入試にふりかかった困難をプレイバックし、大学入試の危機対応のあり方について考える時間をもちたいと思います。</p> <p>□ オミクロン株の流行前まで、新型コロナウイルス対策の二周目を着実に進めれば、コロナ禍の中でもできるだけ混乱のない入学者選抜を取り戻せるものと信じておりました。そこへ11月中旬から、オミクロン株の不穏な足音が近づいてきます。第1部は、オミクロン株と大学入試と題して、ギリギリまで粘り強い調整を続けた大学入試関係者のリアルをお伝えします。</p> <p>□ 第2部は、自然のもたらす災いと大学入試と題して、共通テスト当日に起こったトンガでの海底火山の噴火をきっかけに、自然災害に見舞われたときの大学入試の危機対応を考えます。実際、海底火山だけではなく、地震や雪害は、今までも入試の実施基盤を揺るがしてきました。人間が自然災害の前に無力であることは前提としつつ、自然災害が入試を襲った場合の対応や考え方について、お話を伺います。</p> <p>□ 第3部は、人が介在した禍と大学入試と題して、東大前の刺傷事件と不正行為を取り上げます。どちらも、人が努力の結果を発揮しようとする場を壊してしまおうとする事件でした。こうした危機に大学入試がどう立ち向かっていくか、先生方に</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>お話をお伺いしたいと思います。</p> <p>□ 第 1 部から第 3 部は、個別の危機について理解を深める時間と位置づけます。休憩を挟んだあと、総合討論の時間では、それぞれの危機をもう少し大局的に眺め、危機対応の共通点やそれぞれの危機の独自な点を探りたいと思います。</p>
<p>○第 1 部 オミクロン株と大学入試</p> <p>※13:15～13:45 を予定しているが、後ろ倒しになる可能性あり。第 2 部・第 3 部には比較的余裕があるため、若干押してもそのまま進行する。</p>				
△13:15	コロナ	寺尾		<p>□ それでは、第 1 部 オミクロン株と大学入試に入っていくしたいと思います。</p> <p>□ まずは、昨年にならって、新規陽性者数の分布を見てみたいと思います。</p> <p>□ 紺色でお示ししたのが 2020 年度の新規陽性者数、緑色でお示ししたのが 2021 年の新規陽性者数です。令和 3 年度入試を直撃したデルタ株の新規陽性者数と比べると、令和 4 年度入試は本当の意味で“桁違い”です。総合型選抜・学校推薦型選抜のシーズンとなる 10 月・11 月に感染が下火となっていたのは、不幸中の幸いでした。</p> <p>□ オミクロン株の厄介なところは、感染したときの症状の重さではなく、感染力の高さでした。大多数は軽症で済むと考えられていましたが、オミクロン株の影響範囲をどう考えるかが、政策決定者を悩ませ、関係者を混乱させることになりました。</p> <p>□ 都道府県ごとの人口 10 万人あたり新規陽性者数も日本地図で確認したいと思います。こちらが 2022 年の共通テスト本試験 1 日目の状況です。オミクロン株が米軍基地を中心に流行し始めたことを反映して、広島・山口・沖縄にまん延防止等重点措置が出されていました。</p> <p>□ 2 週間後、追試験 1 日目です。まん延防止等重点措置がほぼ全国に拡大され、大都市圏は赤色を乗り越えて真っ黒となっています。</p> <p>□ 1 か月弱が経過して、個別学力検査本試験の 1 日</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>目ですが、状況はそれほど変わっていないようです。</p> <p>□ さらに1か月経過した3月22日は、個別学力検査追試験でした。まん延防止等重点措置は解除されたものの、依然として日本地図は濃い赤のままでした。</p>
				<p>□ 新規陽性者数の推移だけを見ても、令和4年度入試のコロナ対策を振り返るには十分ではありません。今度は、文部科学省や国立大学協会から各大学のもとに届いた通知を振り返りながら、オミクロン株対応が難しかった点を確認します。</p> <p>□ オミクロン株の流行が最初に直撃したのは、外国人入学志願者に関わる選抜区分でした。11月18日の依頼では、定められた条件を満たせば、外国人入学志願者の入国が認められるということになっておりました。出願先の大学を受入責任者とすること、共通テストを受ける海外在住の外国人志願者に対しては大学入試センターがどこに出願するかを確認のうえ、その大学に通知すること、大学は渡航の可否を判断してセンターに回答すること等が主なポイントです。この時点では、出願先の大学が渡航を認めた場合、外国人志願者は来日して試験を受けることが可能でした。</p> <p>□ その後、オミクロン株の急速な感染拡大により、水際対策を強化することになりました。11月30日の通知では、すべての国と地域からの新規入国を停止することとなりました。渡航の上での試験を計画していた各大学は、急ハンドルを切ることになります。</p> <p>□ 社会的に大きな話題となったのが、濃厚接触者対応でした。12月24日の通知では、宿泊施設への滞在が求められているオミクロン株の濃厚接触者となった受験者については、別室での受験を認めないという対応になりました。この対応が世論からの反発を招き27日、岸田首相は会見を行い、オミクロン株感染者の濃厚接触者についてもでき</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>るだけ受験機会を確保するよう文部科学省に指示した、と表明しました。これを受けて翌 28 日には、濃厚接触者の別室受験を認める対応に再改訂されました。</p> <p>□ ここで着地すればよかったのですが、年が明けて 1 月 11 日、受験機会の更なる確保についてという依頼文が発出されました。この内容を簡潔に申し上げるならば、共通テストや個別学力検査について、本試験と追試験の両方とも受験することができなかった者については、利用可能な選抜資料のみで合否判定を実施するというものでした。この発出文書が出たからには、各大学で対応を考えなければならなくなりました。共通テスト本試験の 4 日前のことです。</p> <p>□ 国立大学協会は翌 12 日、たいへんバランスのとれた文書を国立大学長宛てに送付しました。前日の依頼文への対応は、各大学の経験と事情等に基づき、各大学の判断に委ねられるものであること、この対応については緊急かつ特殊なもので、今年度限りであることを各大学に通知しました。国立大学協会は各国立大学に可能な範囲での対応を求め、政策決定者の対応変更の落としどころを示した形となりました。</p> <p>□ 12 月を過ぎてからの繰り返される対応変更、共通テスト直前における救済措置の検討など、各大学のアドミッション関係者はギリギリの調整を余儀なくされました。先生方には、このギリギリの調整の部分を詳しくお伺いしたいと思います。</p>
13:18 △13:20				<p>□ 第 1 部では、オミクロン前・オミクロン後に分けてお話を伺います。</p>
13:18		寺尾	30 秒	<p>□ まず、愛媛大学の中村先生にお伺いしたいと思います。前回もお話くださったとおり、愛媛大学は総合型選抜・学校推薦型選抜が他大学に比べて早い日程にあるかと思います。感染状況が下火になっていた状況ということで、予定通り当日を迎えられたのでしょうか。</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
13:19		中村	1分程度	令和3年度入試(2020年)での愛媛大学の総合型選抜・学校推薦型選抜における変更をおさらいした上で、令和4年度入試の状況についてお話しいただく
13:20		寺尾	10秒	□ ありがとうございます。同じ質問を九州大学の立脇先生にもお伺いしたいと思うのですが、いかがでしょうか。
13:20		立脇	2分程度	令和4年度入試におけるオンライン面接の実施状況 大学全体では対面授業に戻していく方針。 これを受け、入学者選抜でも対面に戻していく流れとなっている話。一方で、継続的にオンライン面接を続けたいと考えている学部もあるというお話。
13:22		寺尾	30秒	□ どうもありがとうございます。 □ さて、オミクロン株の水際対策の影響が直撃した、私費外国人留学生入試について、連続で恐れ入りますが、立脇先生にお伺いしたいと思います。私費外国人留学生入試の概要についても改めて教えていただきながら、オミクロン株の影響について、教えていただけませんかでしょうか。
13:23		立脇	3分程度	特に4月入学での私費外国人留学生入試に焦点を当てる。最初に制度についての解説や、レジデンストラックについての説明を入れていただきつつ、オミクロン株での対応で苦慮した点などのお話。
13:26		寺尾	15秒	□ ありがとうございます。 □ 東北大学でも、外国人留学生の入試で対面とオンラインを併用されるなど、入国禁止の措置の影響があったと伺いましたが、倉元先生いかがでしょうか。
13:26		倉元	1分半	対面とオンラインのハイブリッドで筆記試験を実施することになった話。対面筆記試験の様子。オンライン筆記試験の様子(伝聞という形でもお話いただければ幸いです)
13:28		寺尾	30秒	□ ありがとうございます。 □ さて次に、名古屋大学の石井先生に、令和4年度入試における共通テスト・個別学力検査の当日の様子を伺いたいと思います。オミクロン株の濃厚接触者への対応も含めて、石井先生お願いいたし

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				ます。
13:29		石井	3分	昨年の内容（試験監督の方法・体制中心）について少し触れていただく。共通テストではコロナの2周目ということで、体制が十分に組めた。試験監督者の別室ローテーション、のべ試験監督者数の増加。試験時間1.5倍の受験者が濃厚接触者となった場合の対応。個別学力検査での濃厚接触者対応（別室は作らない）
13:32		寺尾	15秒	□ ありがとうございます。 □ 続いて、佐賀大学の西郡先生にもお話を伺いたいと思います。共通テストでご苦労されたお話を伺いましたが、このことについて教えていただけますか。
13:32		西郡	1分半	佐賀県内のある地区における集団感染。共通テストでは、学級ごと別室対応を行った。佐賀大学での直前対応、答案の取扱い等。
13:34		寺尾	15秒	□ ありがとうございます。 □ 個別学力検査での濃厚接触者対応に関連して、愛媛大学では丁寧な対応をされたと伺いました。このことについて、教えていただけますか。
13:35		中村	1分	濃厚接触者となった受験生について、個別学力検査では「本学に相談してください」という対応とされた。
13:36		寺尾	15秒	□ ありがとうございます。 □ 名工大では、個別学力検査での追試験の受験資格認定に関して、少し不思議なことが起こったと伺いましたが、林先生、お願いできますでしょうか。
13:36		林	2分	前期日程で他大学を受験したと思われ、後期日程で名工大に出願してきた志願者が、前期・後期ともに追試験受験資格があった話。追試験は3月22日しかなく、志願者が前期の志願大学と後期の志願大学のどちらを受けるか選べることになってしまう話。
13:38		寺尾	30秒	□ ありがとうございます。 □ 第1部の最後のトピックとして、共通テストなしの個別学力検査による選抜、共通テストのみの選

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				抜を取り上げたいと思います。追試験も受けられなかった受験生への救済措置として、1月11日に届いた通達への対応ですが、例えば佐賀大学ではどのような対応をとられましたでしょうか。
13:39		西郡	2分程度	選抜区分ごとに全体方針を決定した 一般選抜について、共通テストを万一受験できなかった場合、共通テストで課している科目で個別学力検査の科目の中になれば、他学部の個別学力検査を活用する対応。過去問も利用するなどの対応。実際、どのような状況だったか。
13:41		寺尾	10秒	<input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 愛媛大学では、学科ごとの対応にバリエーションがあったようですが、このことについてお話しただけですか？
13:42		中村	2分程度	共通テストを受験できなかった者への対応：ほとんどで対応することとしたが、医学部・看護学科、社会共創学部の2学科では対応を見合わせた。 個別学力検査を受検できなかった場合の対応：医学部と理学部で対応を見合わせた。
△13:44		寺尾		<input type="checkbox"/> ありがとうございます。 下記は、予定の時間を超過していた場合には省略可 <input type="checkbox"/> 令和4年度入試を直撃したオミクロン株への対応は、該当者がいなかったり、ごく少数に限られるケースについても、時間がタイトな中で多大なエフォートを割いて検討されたようでした。このことについては、のちの総合討論の論点にもなるかと思います。
○第2部 自然のもたらす災いと大学入試				
13:45		寺尾	10	<input type="checkbox"/> 続いて、第2部 自然のもたらす災いと大学入試に移りたいと思います。
△13:45		寺尾	3分	<input type="checkbox"/> 共通テスト1日目の午後1時ごろ、日本から遥か8000km離れたトンガで、海底火山が噴火したとのニュースが飛び込んできました。 <input type="checkbox"/> 海底火山噴火は、ラム波という気圧波を発生させ、潮位の変化が生じた結果、津波という形で日本に影響を及ぼしました。1月16日日曜日深夜0

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
△13:47				<p>時 15 分、気象庁は、太平洋側の広い範囲に津波警報・津波注意報を発表しました。</p> <p>□ この場をお借りして、事前配付資料をご丁寧にご覧いただき、資料の誤りを指摘して下さった方へ、御礼申し上げたいと思います。事前配付資料の初版では、岩手県を津波注意報に入れたままにしておりました。実際、0:15 の発令では注意報だったのですが、2:54 に注意報から警報に変わっております。情報が不足していたことについてお詫び申し上げるとともに、ご指摘いただいたことに御礼申し上げたく存じます。ありがとうございました。</p> <p>□ 共通テストの 2 日目の実施に対する直接的な影響としては、沿岸部の試験場の再試験があげられます。岩手県沿岸部の公共交通機関は、始発から運転を見合わせ、試験場に向かおうとする受験生を足止めすることになりました。岩手県沿岸部の釜石高校・大船渡高校の試験場は 2 日目を予定通り進行できましたが、岩手県立大学宮古短期大学部試験場は 2 日目を再試験としました。</p> <p>□ 実は、試験実施当日の自然災害が、公共交通機関の運行状況に波及することは、入試関係者にとって「基本のキ」なのかもしれません。当センターが実施してきた共通一次試験・センター試験の歴史を見ても、自然災害の影響はさまざまあります。</p> <p>□ 共通一次試験・センター試験は、現行試験と同様、1 月に実施してきました。雪とは切っても切り離せない季節で、共通一次試験の初回だった昭和 54 年度入試も 1 日目は雪に見舞われたそうです。共通一次試験・センター試験において、雪の影響による公共交通機関の乱れ、試験時間の繰り下げは、それほど珍しいことではありません。</p> <p>□ 大きな震災は、センター試験の当日こそ直撃していませんが、試験の前後で各地を襲い、入試の実施・運営を揺るがしてきた歴史があります。平成</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
△13:49				5 年度入試では、前日に釧路沖地震が発生し、北海道教育大学釧路分校の試験場の窓ガラスが割れたため、試験場として使い物にならなくなりました。夜を徹し、急遽体育館に試験場を移設して、当日を迎えたという記録もあります。
△13:50				<p>□ 平成 7 年度入試に関しては、皆様ご存じのとおり、1 月 17 日の阪神・淡路大震災の影響が出ました。当日の実施・運営を襲うことはありませんでしたが、答案輸送網が麻痺しました。マークシートは 1 枚たりともなくさずこちらに戻す必要がありますので、代替の輸送手段を用いて迂回路を確保し、なんとか輸送することができました。また、当初、西日本地区の追試験会場は京都大学となっていましたが、急遽九州大学に試験場を追加したことも大きな出来事でした。</p> <p>□ 平成 24 年度入試では、前年の東日本大震災を受け、試験場の増設、被災した受験生に対する検定料の免除など、各種の対応を行いました。</p> <p>□ これらの歴史的な事実は、2020 年に当センターが公表した報告書「センター試験をふり返る」の巻末に掲載されています。ご関心がおありの方はご一読ください。</p>
13:51		寺尾	30 秒	<p>□ トンガの海底火山噴火の影響を受けた岩手県ですが、まずは、本日の登壇者の先生方の中で地理的に近い、倉元先生にお話を伺いたいと思います。</p> <p>□ トンガでの噴火は、共通テストの 2 日目にどういった影響を及ぼしたのか、教えていただけますか。</p>
13:52		倉元	1 分程度	<p>特に影響なし。</p> <p>倉元先生ご自身が、本試験 2 日目の業務のために早朝出勤する際、公共交通機関の運休の影響を受けた。運休を知らずに自転車で試験場に向かっていった受験生の話。男子トイレ漏水事件をここで紹介するか（トンガとは無関係）</p>
13:53		寺尾	30 秒	<p>□ ありがとうございます。</p> <p>□ 倉元先生は、入試に長く携われる中でいくつも</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				の自然災害をご経験されていらっしゃいます。自然災害と入試での危機対応について、エピソードをご紹介します。
13:54		倉元	6分	釧路沖地震（1994）、岩手宮城内陸地震（2008；入試シーズンではないが）、東日本大震災（2011）。自然災害に備えて合否判定資料の分析・整理の重要性。
14:00:		寺尾	1分	<input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 入試シーズンは、どうしても雪の影響を受けざるを得ないと思う次第です。当日は、状況を見ながら判断すべき時に適切な判断を下す必要があります。関係者のみに閉じたオンライン・フォーラムでは、自然災害の話題から派生して、大学間で試験実施本部の様子が異なることも教えていただきました。 <input type="checkbox"/> 詳細をお話いただくのは限界があると思うのですが、ここで、名古屋大学の石井先生と、名工大の林先生にお話をお伺いしたいと思います。 <input type="checkbox"/> まずは石井先生にお話をお伺いしたいのですが、雪と公共交通機関の乱れ、試験時間の繰り下げ判断などについて、差支えない範囲でご経験を教えていただきたいのですが、お願いできますでしょうか。
14:01		石井	1分	名古屋大学で雪による試験時間繰り下げのご経験のお話
14:02		寺尾	30秒	<input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 林先生は、前任の九州大学といまいらっしゃる名工大の両方で、当日、試験実施本部の業務にあられたご経験がおありということでした。自然災害発生時の意思決定や情報収集、その他にも派生していただいてかまいませんが、大学間の違いも含めながらご紹介いただけますか。
14:03		林	1分半	名工大での情報収集 九州大学での情報収集 試験実施本部と大学の文化差など
△14:05		寺尾		<input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 入試当日に自然災害が起きたときの危機対応の観

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				点については、他の危機との関係も踏まえながら、後半部分であらためて触れたいと思います。
○第3部 人が介在した禍と大学入試				
14:05				□ 続いて、第3部 人が介在した禍と大学入試に移りたいと思います。
△14:05		寺尾	4	<p>□ 第3部の最初のトピックは、東大農正門前の刺傷事件です。</p> <p>□ さきほどのトンガの話から時間軸が前後しますが、共通テスト1日目、1月15日土曜日の朝、東京大学本郷キャンパスの農正門前において、受験生の男女2名と70代の男性1名が、刃物で切りつけられたという事件が起きました。当時17歳の少年が、殺人未遂容疑で現行犯逮捕されることとなりました。</p> <p>□ この少年は、東京メトロ南北線「東大前」駅でも、不審な行動をとっていました。少年は、ペットボトルに可燃性の液体を用意し、駅構内に拡散した上で、火をつけていました。車両内にも可燃性の液体をまき散らし、駅構内には着火剤のようなものが燃えた跡が8か所ほど見つかったということでした。</p> <p>□ この事件の影響により、精神的動揺を受けたため本試験を受験することができなかった受験生4名に対しては、追試験の受験を認めることといたしました。</p> <p>□ 試験当日に不測の事態が発生した場合、大学側は適切な対応をとる必要があります。令和5年度の実施要項でも、安全対策、警備要員の確保、十分な巡回などについて明記されています。</p> <p>□ また、こうした不測の事態が発生した際に、受験することができなかった者がいる場合には、受験機会の確保に配慮する必要があることも記されています。</p> <p>□ 本日まで登壇の先生方の中に、直接の当事者の方はいらっしゃいませんので、本座談会ではこのトピックを間接的にしか取り上げられないところです</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>が、加害少年が名古屋市在住の高校生だったということで、名古屋大学・名古屋工業大学では、共通テスト 2 日目に対応を求められたようでした。第 3 部では、名古屋大学の石井先生・名工大の林先生に、東大前刺傷事件関連の対応についてお話を伺いたいと思います。</p> <p><input type="checkbox"/> はじめに、名古屋大学の石井先生に伺いたいのですが、東大前刺傷事件のニュースをどのようにお知りになったかというところから教えていただき、名古屋大学としてどういった対応が求められたか、当日の様子も含めながらお話をお伺いしてもよろしいでしょうか。</p>
14:09		石井	4 分	<p>ニュースで知る。 管轄の警察署から「防犯指導内容」の FAX が到着。これに基づいて確認・対応を実施。 警官やパトカーによる巡回・警備。 受験票確認を敷地入口と建物入口で両方実施。 職員同伴の下、不審者対策に重点をおいて、構内を警備。制服警官の巡回に安心の声も。保護者対応。</p>
14:13		寺尾	5 秒	<p><input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 名工大では、いかがでしたでしょうか。</p>
14:13		林	1 分	<p>名大ほどものものしい警備ではなかった。交差点に警察官が立ち、不審者がいないかを巡視。</p>
14:15		寺尾	5 分	<p><input type="checkbox"/> ありがとうございます。 <input type="checkbox"/> 人が介在した禍という意味では、不正行為もひとつの禍といえると思います。はじめに、共通テスト 1 日目に起こった不正行為のあらましを振り返りたいと思います。 <input type="checkbox"/> 本試験 1 日目、地理歴史・公民の時間において、スマートフォンを用いて世界史 B の問題冊子の一部を撮影し、中継役の手助けのもと、外部の者に送信するという不正行為が発生しました。これまで、スマートフォンを用いた不正行為は数件あったのですが、試験問題の画像が流出し、外部の者から解答を送ってもらう形での不正行為は、共通テストでは初めてでした。</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<ul style="list-style-type: none"> □ 類似した不正行為は、一橋大学の私費外国人留学生選抜の試験でも起こりました。一橋大学の事例では、長さ 1 センチほどのワイヤレスイヤホンもあわせて使用したのではないかとする報道もあります。 □ 共通テストで不正行為が発生したことを受け、当センターは本年 6 月 10 日に、「大学入学共通テストにおける電子機器類を使用した不正行為の防止策について」を公表しました。 □ 基本的な考え方として、大多数の者は誠実に受験しており、大多数の受験者に過度な負担を強いる者でないこと、大学や試験監督者の負担を過度に増やさないことなどを掲げ、これに沿った対策を講じることといたしました。 □ 具体的には、大学に対して不正行為事例等の情報提供、写真照合および巡視の際に確認すべきポイントなどを記したマニュアルの提供、監督者の指示で一斉にスマートフォンの電源を切らせ、かばん等にしまわせる変更、受験生への注意喚起を行うことといたしました。 □ 技術的な対応については、今後の技術の進展に応じて改めて検討することとし、不正行為を行った受験者はすべての教科・科目の成績を無効とする対応を堅持することといたしました。 □ 本年 9 月に配付しております受験案内でも、不正行為に関する記述を増やすとともに、「警察へ被害届を提出する」可能性について明記しております。
14:20		寺尾	30 秒	<ul style="list-style-type: none"> □ このトピックについて、まず佐賀大学の西郡先生から、試験における不正行為の考え方に関するお話を伺いたいと思います。よろしく願いいたします。
14:21		西郡	5 分程度	<p>※スライド有。寺尾画面を提示。</p> <p>不正行為の考え方（不正行為に手を出す状況） 潜在不正（暗数）、受験生の公平・公正認識から見た不正行為の構造</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>予防の重要性, コスト</p> <p>※ 西郡先生の「公平性・公正性」に関する立場にも少し触れながらお話を伺う。</p>
14:26		寺尾	30 秒	<p><input type="checkbox"/> ありがとうございます。</p> <p><input type="checkbox"/> 次に、東北大学の倉元先生にお話を伺います。試験に関して日本と類似した文化をもつと考えられている中国・韓国との比較から、日本の入試における不正行為を考えてみたいのですが、倉元先生いかがでしょうか。</p>
14:27		倉元	3 分程度	<p>不正行為に対する中国・韓国の対応（昨年度シンポジウム「世界の大学入試」での討論も触れながら）</p> <p>日本のシステムの緩さ, 受容</p> <p>日本の巨大な試験システムを支えているのは「人」</p> <p>セキュリティ上の弱点, 悪意をもつ者が破壊するのは容易</p>
14:30		寺尾	30 秒	<p><input type="checkbox"/> ありがとうございます。</p> <p><input type="checkbox"/> コロナ禍でオンライン面接や筆記試験を行う入試区分も出てきましたが、九州大学の立脇先生からは、オンラインを用いた試験における不正行為認定について、新たな論点があるのではないかという提起もありました。九州大学の事例を交えながら、立脇先生、お願いできますでしょうか。</p>
14:31		立脇	3 分程度	<p>九州大学でのオンライン面接・筆記試験においては、ウェブ会議システムで録画・録音している。あとから映像を見返して、不正行為判定できるかどうかは重要な論点。</p>
14:34		寺尾	1 分	<p><input type="checkbox"/> ありがとうございます。</p> <p><input type="checkbox"/> 第 3 部では、人が介在する禍として、刺傷事件と不正行為を取り上げました。日本の入試は公平性・公正性が大事であると言われてますが、国民から公正・公平と認識してもらえる入試をつくりあげるのがまぎれもなく「人」であることを、倉元先生からご指摘いただきました。</p> <p><input type="checkbox"/> これまでにもたくさんの危機が大学入試を襲ってきたなかで、多くの関係者が知恵を絞った結果が、いまの入試制度を絶妙なバランスの上に成り</p>

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				立たせていたということのかな、と感じた次第です。
14:35		寺尾	30 秒	<input type="checkbox"/> これで、座談会部分は終了となります。5 分の休憩をはさんで、※から総合討論およびライブ Q&A のセッションを再開したいと思います。視聴者の皆様は、このウェビナーを閉じずに、※にお集まりください。それでは、休憩といたします。 ※総合討論再開時刻〔当日記入〕 <div style="border: 1px dashed black; width: 100px; height: 30px; margin: 5px auto;"></div>
○総合討論				
△14:40	総合討論	寺尾		<input type="checkbox"/> それでは、これより総合討論の時間に入りたいと思います。
	軸のスライド			カメラワーク ・14:40 司会のトーク → すぐ寺尾画面 ・2 軸スライドを以下の順番で説明。1 人 1.5 分×6 =9 分。 倉元先生→林先生→石井先生→西郡先生→中村先生→立脇先生。 その後は司会が適宜振るので、その先生を映す。 【登壇者へ】ご発言をされたい場合には、(物理的に)手を挙げてください。 ・15:10 「それでは総合討論の最後に、登壇者の先生方からお一人ずつご感想をいただきたいと思います。」の後、以下の順番で一人 1 分程度感想。 立脇先生→中村先生→西郡先生→石井先生→林先生→倉元先生
△15:15	ライブ Q&A	寺尾		<input type="checkbox"/> それでは最後に、視聴者の皆様からいただいたご質問にお答えする時間を設けたいと思います。
				カメラワーク ・基本的に寺尾画面に AhaSlides の投稿画面を映す。 ・質問を寺尾が読み上げるので、その後回答者を映す。
△15:29				<input type="checkbox"/> 最後に、アンケートに関するお願いです。このウェビナーを退出されますと、自動的にアンケ

目安時刻	スライド名 カメラ切替★	話者 (敬称略)	所要時間 (目安)	詳細
				<p>ートに遷移します。また、こちらに画面共有している QR コード，配付させていただきました資料の URL からも接続できます。ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。</p>
△15:30				<p>□ これで，プレイバック座談会 Part2 を結びにさせていただきます。長時間にわたってご視聴くださり，ありがとうございました。</p>

配信準備の様子



映像技術担当・宮本先生のご指導のもと、登壇者の映り方の確認



登壇者の到着前



映像技術担当（左から） 竹浪綾子、宮本友弘、久保沙織（東北大学）



音響技術担当 内田照久（大学入試センター）



当日のバックヤード業務担当 橋本貴充（大学入試センター）



登壇者が全員到着。マイクの利用方法について説明



配信開始前の一コマ



最後は一本締めでおひらき

プレイバック座談会 **Part 2** 大学入試における 危機対応



わざわい と わざわい
災いと禍を乗り越える

開催日時 **2022年11月27日(日) 13:00~15:30**

開催方法 Zoom ウェビナー 定員 **400名**

定員に達し次第、お申し込みを締め切らせていただく場合がございます。

趣旨説明 内田照久 大学入試センター研究開発部 教授

登壇者 倉元直樹 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教授
林 篤裕 名古屋工業大学大学院 工学研究科 教授/アドミッションオフィス長
石井秀宗 名古屋大学教育基盤連携本部 アドミッション部門長/教授
西郡 大 佐賀大学 アドミッションセンター長/教授
中村裕行 愛媛大学・四国地区国立大学連合アドミッションセンター 准教授
立脇洋介 九州大学アドミッションセンター 准教授

司会 寺尾尚大 大学入試センター研究開発部 助教

共催 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究 (A) 21H04409
「コロナ禍の下での大学入試政策及び個別大学の入試設計のための総合的入試研究」
【研究代表者 倉元直樹（東北大学）】

令和4年度入試は、単に新型コロナウイルス感染症対策の二周目ではなかった。
オミクロン株の濃厚接触者への対応で迫られたギリギリの調整、
当日の東大前刺傷事件・トンガにおける海底火山の噴火・不正行為など、
自然のもたらす災い<わざわい>と人間の招く禍<わざわい>が次々とふりかかった。
大学入試は、こうした危機の数々をどう乗り越えたらよいだろうか—
令和3年度入試とは違った形でその基盤を揺さぶった、令和4年度入試を振り返りながら、
大学に依じてさまざまな色彩を織りなす入試の危機対応のあり方を考える。

参加のお申し込み

以下の URL または右の QR コードから
11月20日(日)までに
お申し込みください
<https://forms.gle/tmDfhAjykStMTZPX7>



お問い合わせ先

大学入試センタープレイバック座談会 Part2
事務局
nyushi.kiki.playback.2022@gmail.com



大学入試の危機対応策を探る

●入試センターなどがオンラインシンポジウム



独立行政法人大学入試センター（山口宏樹理事長）はこのほど、シンポジウム「プレイバック座談会」を『大学入試における危機対応…災いと禍を乗り越える』をオンラインで開催した。

科学研究費助成事業「コロナ禍の下での大学入試政策及び個別大学の入試設計のための総合的入試研究」（研究代表 倉元直樹東北大学高度教育・学生支援機構教授）との共催。オミクロン株が主流となった新型コロナウイルス感染症はもとより、2022年度の大学入学共通テスト初日（22年1月15日）に東京大学弥生キャンパス前で起こった刺傷事件など、大学入試の危機対応の在り方を話し合った。

追試験「2回権利」の受験生も

座談会の発端は、20年6月から21年4月までの4回にわたり非公開で行われた緊急オンラインフォーラム「新型コロナウイルス禍における大学入試の在り方を考える」。未曾有のコロナ禍で各大学が大学入試準備に右往左往したこと、同センターの研究開発部が倉元教授ら同センターに在職経験がある5大学の入試担当教員に、情報交換

の場を設けるよう提案したものの、これを基に危機対応の手掛かりを探ったのが、前回のオンライン座談会「大学入試におけるコロナ対策—令和3年度入試の舞台裏—」（21年12月開催）だった。

同センターの内田昭久教授は趣旨説明で、コロナ禍初年度となった21年度入試では「受験生を守りながら入学者の選抜を行うという難題に苦しみながら、入試に当たってきた。くしくも個々の大学の裁量、決断に委ねられているものがかいかに大きいかを、目の当たりにすることになった」と振り返った。

その経験を基に22年度入試では各大学が体制を整備して臨んだものの▽濃厚接触者への対応の二転三転▽共通テストが受験できなかった場合の個別学力検査対応などを求める文部科学省依頼（1月11日付）▽東大前の刺傷事件▽トンガ海底火山噴火（日本時間同15日午後1時ごろ）と津波警報・津波注意警報（同16日）▽共通テスト初日に起こったスマートフォン撮影による試験問題の外部流出▽同様の方法による一橋大学の私費外国人留学生選抜での不正行為（同31日）——という「不測の事態」が続出した。

内田教授は「大学入試を揺さぶった個々の事案について順を追って振り返り、それぞれの大学が環境条件の中で何を最も大切だと考えて決断をしたのか、大学入試の中で守るべきものは何なのかを見詰め直し、そこで考え抜いたことが、まだ見ぬ危機への対応のための体制の構築に向けた手掛かりになっていけばと願っている」とシンポジウムの期待を述べた。

座談会は3部構成で行われ、倉元教授、林篤裕名古屋工業大学大学院教授（アドミッシヨンプラズマ）、石井秀宗名古屋大学教授（教育基盤連携本部アドミッシヨンプラズマ）、西郡大佐賀大学教授（アドミッシヨンプラズマ）、中村裕行愛媛大学・四国地区国立大学連合アドミッシヨンプラズマ准教授、立脇洋介九州大学アドミッシヨンプラズマ准教授が登壇した。

第1部のテーマは「オミクロン株と大学入試」。まず寺尾尚大同センター助教が、入試時期の新規陽性者数や文科省、国立大学協会（国大協）の通知類を確認した。

文科省は21年12月24日付の通知で、濃厚接触者として宿泊施設への滞在が求められている場合は別室受験の要件を満たさず、追試験の扱いにすべきだという見解を示していた。それが同28日には、別室受験を容認。さらに、共通テスト4日前の22年1月11日、共通テストの本試験、追試験とも受験できなかった場合には、個別学力検査や調査書等で可否判定を実施するなど、「一人の受験生も……受験機会を失うことのないよう」な措置を求

めた。これに対して国大協は同12日①各大学の経験と事情等に基づき、各大学の判断に委ねられるものであること②緊急かつ特殊な対応で、今年度限りであること——という「落としどころ」（寺尾助教）を示した。

オミクロン株が拡大する前に行われた総合型選抜や学校推薦型選抜に関して、愛媛大では21年度入試の経験も踏まえたため、結果的には特に変更なく実施することができた。九大でも、36入試区分のうち4区分をオンラインで実施するにとどまった（21年度は19区分）。

一方、私費外国人留学生入試を巡っては、21年11月18日付の文科省依頼で、出願先の大学が認められる限り、受験生の入国が可能とされていた。それがオミクロン株の水際対策強化の「直撃」（寺尾助教）を受けた同30日付の通知では、すべての国・地域からの新規入国を停止することが伝えられた。九大では4月入学で一般選抜に近い入試を課しているため、入国できなかった受験生には受験料を返還した。東北大は入試時期が3月と遅く、一部の学部で課している筆記試験も「オンラインで何とかやり切った」（倉元教授）。

共通テスト当日、名大では「（コロナ禍1年目に比べ）人数を絞って、万全の態勢で臨んだ」（石井教授）ものの、持病を抱えている教職員を守るため、監督時間を減らす必要があり、濃厚接触者の教室ではローテーションの人数が多くなった。佐賀大では、ある高校から「（クラスの）誰が濃厚接触者か分からない」との相談があり、全員を

別室受験させた。

個別学力検査に関して、愛媛大では一律な対応が難しいと判断して、個々に相談するよう求めた。名工大では、前期に別大学を受験して追試験と判定された受験生が後期の受験に来たものの、ここでも追試験と判定され「2回の受験の権利を有した受験生が出てしまった」（林教授）。国立大学の追試験期日は3月22日のみで、結局その受験生は名工大には現れなかったため、事なきを得た。林教授は「追試験を2日間設定することは個別大学として遠慮してほしいが、こういうことも起こり得る」と報告した。

1月の文科省依頼を巡って、佐賀大では共通テストを受けていない受験生への対応に苦慮したものの、できるだけ基礎学力を見るために、各学部のアドミッション・ポリシーに基づき、他学部の入試問題も活用して、総合的に合否判定を行う方針を採用。愛媛大では、事前相談で対応した。

不正行為は予防が基本

第2部のテーマは「自然のもたらす災いと大学入試」。トンガ海底火山噴火では太平洋側の広い範囲に津波警報や津波注意報の発表があったが、岩手県沿岸部の公共交通機関で2日目の始発から運転見合わせがあり、県立金石高校と同大船渡高校の両会場は予定通り実施したものの、県立大学宮古短大部の会場は再試験となった。

ただし、1979年の第1回大学共通第1次学力試験（共通1次）で関東地方にも降雪があつて

以来、「雪による試験時間の繰り下げは、ほぼ毎年のこと。雪とは切っても切り離せない」（寺尾助教）。さらに震災も、2011年3月の東日本大震災だけでなく▽1993年の大学入試センター試験前日に釧路沖地震▽95年のセンター試験2日後に阪神・淡路大震災——と、入試当日の直撃はなかったものの、前後には影響があつたことも少なくない。

倉元教授は「一つのヒントは東日本大震災」だとしながらも、被災地の大学として、受験生の「人生を懸けた」大事な受験機会の確保と、身体や生命の安全をどう図るかの間で、判断の難しさがあることをにじませた。

第3部は「人が介在する禍と大学入試」。東大前の事件を起こした高校生が名古屋出身のため、広いキャンパスを持つ名大には、各管轄署からパトカーが巡回するとファクスで連絡があつた。一方、名工大はもともと入構が正門に限られていたため、交差点に警官2人が警備に当たつたのも「昼のニュースで知った」（林教授）ほどで、同じ市内でも事情が違った。

不正行為に関して西郡教授は、万引きを引き合いに「まず考えるべきは予防だ」と指摘。オンラインでも不正が想定されるが、募集要項に「後から合格を取り消すこともある」と書いたとしても、裁判で争われる可能性があり、やはり「あくまで不正防止」（立脇准教授）が基本になるようだ。休憩を挟んで、総合討論が行われた。

（渡辺敦司∥教育ジャーナリスト）

令和 3 (2021) ～4 (2022) 年度

理事長裁量経費調査研究

「大学入試をめぐる危機対応の体制構築に向けて—COVID-19 の災厄を越えて—」

シンポジウム

「大学入試における危機対応：災いと禍を乗り越える」報告書

発行日	令和 5 (2023) 年 3 月 15 日
研究代表者	内田照久
発行	独立行政法人大学入試センター 研究開発部 〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23 電話：03-3468-3311 (代)
印刷	株式会社コムラ

